
著 東出祐一郎
イラスト 中央東口
原作 propeller
Bullet Butlers
バレット・バトラーズ
黒騎士は弾丸のごとく駆け抜ける 2
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

Bullet Butlers

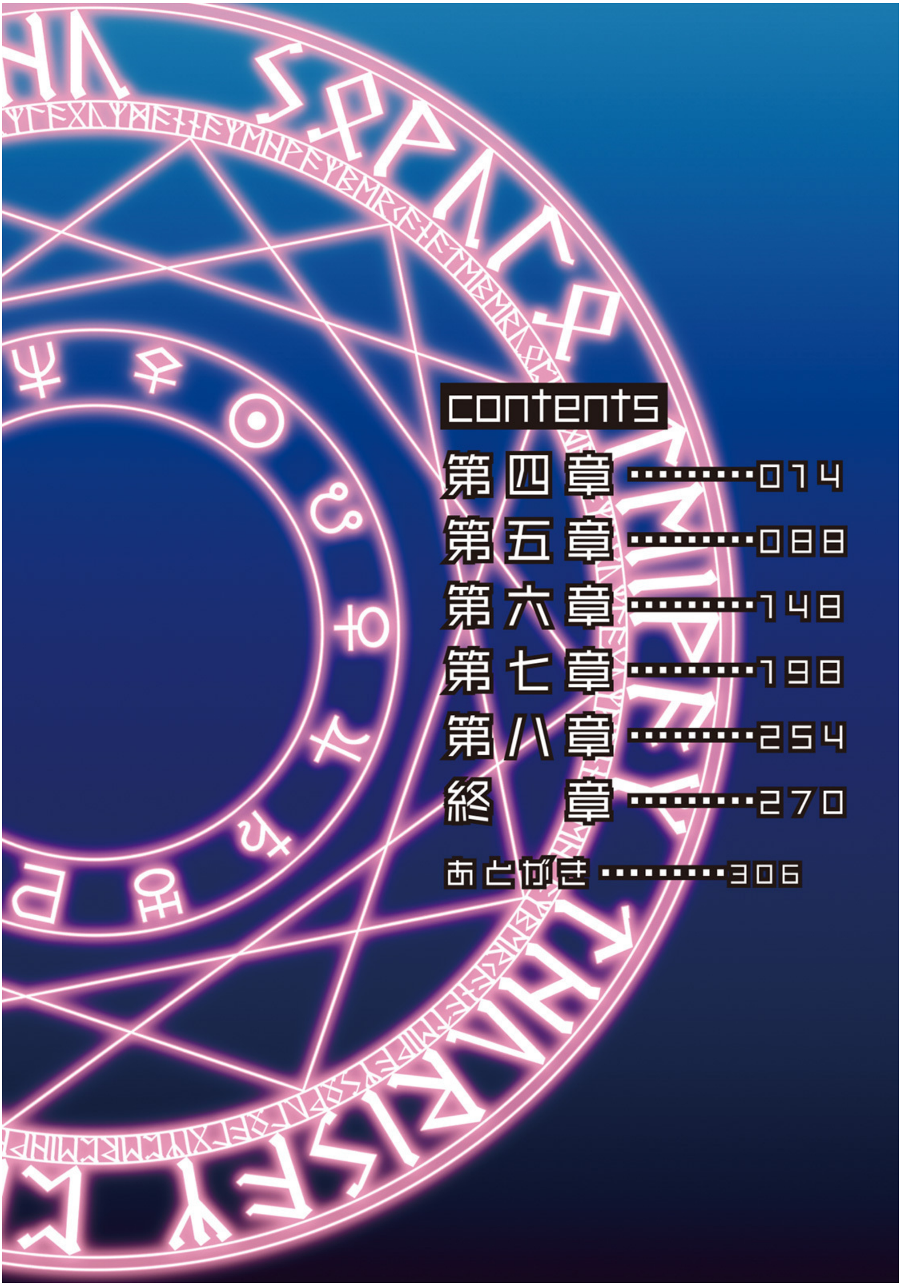
～黒騎士は弾丸のごとく駆け抜ける～ 2

東出祐一郎

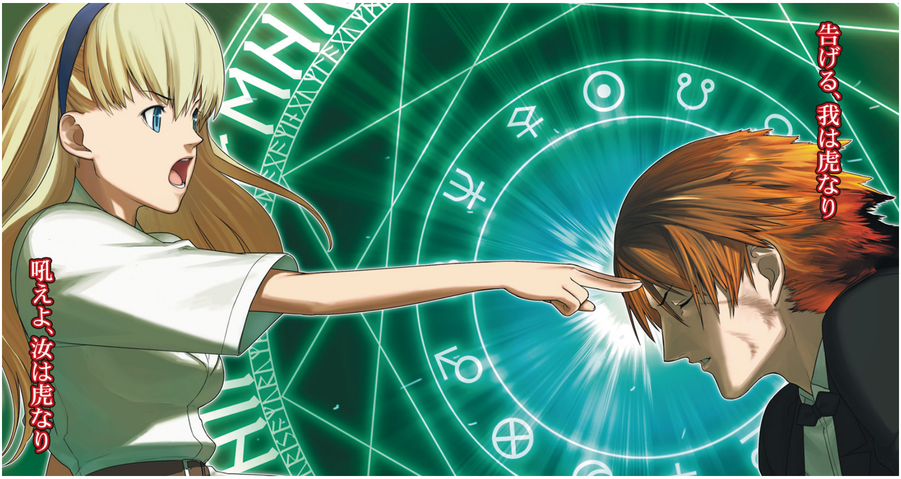
原作　propeller

イラスト　中央東口


Bullet Butlers
バレット・バトラーズ
黒騎士は弾丸のごとく駆け抜ける2
著 東出祐一郎
イラスト 中央東口
原作 propeller



contents


告げる、我は虎なり
吼えよ、汝は虎なり


——鮮やかな青空、大きな白い雲、無限に広がる草原
——この素晴らしき世界

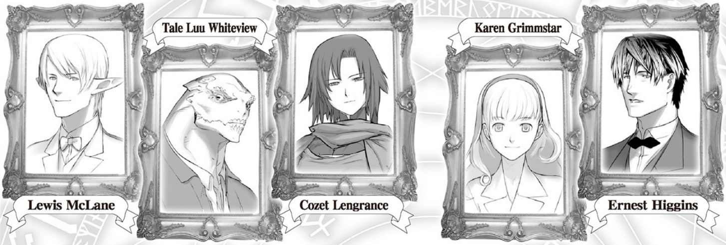
目次

――退屈なときは、異なる世界の話をしよう。
我々とは森羅万象（しんらばんしょう）の法則が異なる世界、違うものたちが生きる世界のことを。
かつて竜の少女と、その執事の話を三度（みたび）語ったように。
今から語るは、孤独だった少年の話。
寂しげな少年と、彼を救った少女の話――。


Bullet Butlers
バレット・バトラーズ
黒騎士は弾丸のごとく駆け抜ける2

「ディルビック号第三次調査メンバー」

“末裔たる者”ワイズマン六十三世より借り受けた超硬潜水艦“イエスラス”に乗り込み、一千mの深海に沈んだ豪華客船ディルビック号の謎に挑む20名の冒険家たち。



○アーネスト・ヒギンズ（男／ハーフ・ワータイガー／20歳）
本編の主人公。カレンの執事。8年前グリムスター家に拾われたが、それ以前の記憶はない。ナイフの使い手。

○カレン・グリムスター（女／人間／17歳）
アーク・メリア連邦国最大の造船会社、グリムスター造船会社の社長令嬢。13歳の頃から世界各地を旅している、社長令嬢らしからぬ逞しい精神力の持ち主。

○コゼット・レングランス（女／人間／20歳）
普段はフォルテンマイヤー家の給仕をしている、謎多き冒険家。

○テイル・ルー・ホワイトビュー（男／リザードマン／48歳）
イエスラスの操船指揮担当。白いリザードマン。

○ルイス・マクレーン（男／エルフ／??歳）
イエスラス艦長。タクピカル国立大学考古学教授。カレンの師匠にあたる著名な冒険家。外見は二十代後半だが……。

◆他、カレン・グリムスターによる招聘メンバー

○ベルベット・フィールタン（男／ゴブリン）
○ルイ・フィールタン（男／ゴブリン）

◆ルイス・マクレーンによる招聘メンバー

○パイル・ホロウスキー（男／人間）
○ユウマ・ササキ（男／ドワーフ）
○シェリー・ニキーティル（女／エルフ）

◆グリムスター船舶会社および
レッドライン社による招聘メンバー

○ジャン・ジャック・ルード（男／エルフ）
○サティ・モントルフ（女／ドラゴニュート）
○マイケル・ソウヤー（男／人間）
○フリードマン・フッカー（男／オーク）……死亡
○ブライト・ゴールニウム（男／ドワーフ）
○ブルース・マッケンジー（男／人間）
○ジェシー・マグワイア（男／ミノタウロス）……死亡
○マーティン・レーマン（男／ドラゴニュート）…死亡
○エヴァ・リーフ（女／リザードマン）
○フリント・イエール（男／エルフ）……死亡
○ラット・ジェイ（男／ゴブリン）……死亡
○ゲイリー・ブッチャー（男／オーク）

第四章

　────英雄暦１９３９年長なが槍やり月づき（９月）ノ１日

ディルビック号

　ディルビック海域──豪華客船ディルビック号が沈没したと思おぼしき深度一千ｍモールの海底には広大な空間が広がっていた。その空間には大気があり、乾いた大地があり、光があり、建物までが存在したのだ。

　〝王国キングダム〟──この空間を創造した少年は、そう呼称していた。

　空は薄ぼんやりとした膜のようなもので覆おおわれている。空の先には、やはり海が広がっているはずだが、それは人の視界では捉えきれない。

　空間と深海の境目には結界が存在するようで、その境目には圧倒されるほどの黒い海の壁が広がっている。だが、海水は決して空間に入り込むことはない。深海の壁は大地と海を分わかつ境界線であると同時に、〝王国キングダム〟を護る防壁でもあった。

　〝王国キングダム〟の大地は乾いているが、植物は皆無だ。砂漠とて少しは植物があるだろうが、ここにはない。

　だが、〝家〟はあった。様々な屍し骸がいや船の破片で構成された醜しゆう悪あくな〝家〟が。人が住むこともできない、そもそもその想定すらしていない建造物だ。

　その中に──今は一ひと際きわ目立つ存在があった。

　一か月ほど前から地面に突き刺さっているディルビック号の船体──その半身。それは巨大な墓標のようにも、今にも崩れ落ちそうな塔のようにも見えたに違いない。

　そのディルビック号に潜入した冒険家アドベンチユラーカレン・グリムスターと彼女の執事であるアーネスト・ヒギンズは七階フロアのブティックにて、不審な物音を聞きつけた。

　そのブティックに押し入った二人が見たもの──いや、見た人は。

　ここにいるはずのない幼い少女だった。

「……え、あ……え……？」

　呆ぼう然ぜんとしたまま、少女は服を抱き締めていた。年はカレンよりも明らかに下だろう。栗色の髪の毛はいささかくすんだような印象を与えていた。

　彼女は飛び込んできたアーネストを見て、目をまん丸にさせている。

「……君、は……？」

　そこまで言って、アーネストは自分がナイフを構えていることに気付いた。少女もそのナイフをハッキリと視認したらしく、たちまちじわりと目に涙を浮かべる。

「……やだ……こないで……」

　一歩後あと退ずさる。ふるふると首を横に振った。

「あ、いや。ご、誤解……」

　アーネストが慌あわてて、ナイフを持ったまま駆け寄ろうとする。

「こっ、こここここないでぇぇぇっ！」

　ぱたたたたと、少女はブティックの奥の試着室に引っ込んでしまった。

「い、今の誰……!?　生存者なの!?」

「わ、分かりません！」

　踏み込んできたカレンに、アーネストは半ばパニック状態になりながら叫んだ。

　カレンも彼女の姿は捉えたらしく、奥の試着室に向かって慎重に近づいていく。

「ね、ねえ！　ちょっと！　話を聞いてくれないかしら！」

　カレンの言葉に、試着室に篭こもった少女は叫んだ。

「え、えと、あの、えと、こ、こっちにはぶ、武器があるんだよ！」

　アーネストとカレンは揃そろって顔を見合わせた。

「……？」

「そ、それにたくさん友達がいるんだよ！　あんたたちなんか、ペ

しゃんこのメッタメタになっちゃうんだからっ！」

「……？」

「だ、だからっ、だからっ、だかららっ……」

「う、うん……」

　思わずカレンが頷きを返すと、

「こ、来ないで……」

　か細く、訴えかけるように切ない声を出して、少女がすすり泣き始めた。

　アーネストとカレンは揃って気まずげな表情を浮かべる。あれほど恐怖を抱き、それを乗り越えてこのブティックに踏み込んだ自分たちが、間抜けな案山子かかしのようにも感じられた。

「……ね、ねえ、あなた。その、お嬢さん？」

「……」

「あのね、私も、この人も、あなたを傷つけたり、怖い想いをさせたりはしないわ」

「…………うそ…………」

「嘘うそじゃないわ、本当よ。……アーネスト、ナイフを捨てなさい。思い切り、遠くに」

「は、はい……」

　アーネストは頷き、ブティックの外へとナイフを捨てた。

「これでどう？　そっちから見える？　私は何も持ってないわよ」

「……」

　試着室のカーテンの隙間から、おずおずと少女が顔を覗のぞき込んだ。

「どうかしら」

「…………」

　少女は無言で、アーネストの顔に真っ直ぐ人差し指を突きつけた。

「？」

　首を傾かしげるアーネストに、少女は冷れい酷こく無む残ざんな言葉の刃やいばを突き刺した。

「お兄ちゃんの、顔が怖い」

「ちょ、駄目よ！　気にしてるんだから！　あ、違うの！　その、これは世間一般っていうか、みんなの意見を拡大解釈しただけで、私は信じてるから大だい丈じよう夫ぶ！」

「……」

　二人の言葉を脳が理解すると同時、アーネストはしおしおとブティックの隅で蹲うずくまった。

　めそめそといじけるアーネストのお陰か、それとも単に彼が離れたせいか、少女はようやく試着室から外に出てくれていた。

「……」

　先ほどまでの怯えた表情は完全に消えたとは言い難いが、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

　カレンは彼女を、辛しん抱ぼう強く待った。

「……あの、えっと……お姉ちゃん」

「うん」

「抱っこ……してもらっても、いい？」

　おずおずと、顔を伏せながらそう呟いた少女をカレンはひょいと抱え上げた。

「ひゃっ……」

「これで、いいの？」

　カレンは笑顔を浮かべた。

「……うん」

　少女が嬉うれしそうに頬を擦こすりつけて、頷いた。

「ねえ、あなたの名前は？」

「……わかんない」

　少女が肩を落とす。名前が分からない……何かの拍子に忘れてしまったのだろうか？

　カレンはふむ、と呟いて彼女に提案した。

「そ。……おちびちゃんとか、どう？」

「そんなのやだ」

　少女は膨ふくれっ面つらで抗議した。可愛かわいらしい──そう思いつつも、カレンは彼女の正体をどうにかして探ろうとしていた。屍兵ゾンビではない。抱き上げたとき、それが理解できた。彼女には温かい血が流れている──それくらいは分かる。

　では、彼女は何者だ？　希望的観測を述べれば、この少女はディルビック号の生き残り──そう思いたかった。

　もしそうであるならば、自分たちにとってどれほどの救いになることか。

「あなたは……ディルビック号の生き残りなの？」

「ディルビック……？」

　少女はしばらく考えたあと、ぱっと目を輝かせた。

「それって、上から落ちてきたお船さんのこと？」

　少女の言葉にカレンは凍りつき、アーネストは立ち上がった。

「待って。あなた今、上からって言った？」

「うん」

「つまり、あなたは──前から、ここにいたの？　この空間に？」

「そうだよ。あのね、ギリィが……」

「ギリィ!?」

「う、うん……ギリィが、おともだちを連れてきてくれたの」

「あ───」

　──あの子が、寂しがるから。

　──僕たちの友達になってよ。

──〝加工〟しないといけないんだ。

「じゃあ、あなたの為に……ギリィは……その、お友達を？」

「うん、いっぱい連れてきてくれたの！　すごかったわ！　あんなに沢たく山さんの人たちを見たの、わたし、初めてだった！」

　だが、そう言ってから少女は急に意い気き消しよう沈ちんした。

「でもね、みんなわたしのこと見てくれないの。『こんにちは』って言っても、ぜんぜん聞いてくれなかったの……。みんな、きっとのんびり屋さんなのね。ギリィが何か言うと、何でもしてくれるんだけど、それ以外はぜんぜん駄目」

「……」

　その言葉に、嫌な予感が膨ふくれ上がった。ギリィ、という少年が使った魔法はやはり、人を何らかの形で屍兵ゾンビに変える類たぐいのものだろう。言葉を喋しゃべるほどの知能は失われているのだ。

「でも、カレンは違うわね！　ちゃんと喋ってるし、温かいわ！　ねえ、ねえ、わたしのお友達になってくれるよね？」

「……」

　カレンはしばし少女を見つめた。

　少女の願いを叶えるためにギリィは動いたのだ。あの少年にどんな力が備わっているのかは分からないが、少なくともディルビック号を深海１０００ｍモールに引きずり込み、〝イエスラス〟を引きずり回すだけの強大な力を持っている。

「ねえ、何で黙っちゃうの？　あの、友達になるの、そんなに……イヤ？」

　つまるところ、少女には責任がある──ディルビック号、そして調査隊のメンバーも含む三千人あまりの命への。

「……」

　だが、カレンはそれを弾だん劾がいする気になれなかった。弾劾したところで、何がどうなる訳でもない。彼女の願いはどうしようもなく無む垢くで、切ないものだ。

　その願いを聞き届け、叶えてしまったのはあくまでギリィという少年だ。

　カレンは泣き出しそうな少女の頬に軽くキスをした。

「いいえ、とんでもない。……友達に、なってくれるかしら？」

「あ…………いいの？」

　怯えたような表情。

「もちろんいいわ。ただし、一つだけ条件があるの。条件っていうのは、それを聞いてくれなきゃ友達になれないって意味ね、分かる？　とても簡単なことよ」

「う、うん……」

　少女は気け圧おされながらもこくりと頷いた。カレンは少女を抱えつつ、やや離れた場所にいたアーネストの元へと近づいた。カレンの肩を抱いていた少女の腕に、力が篭こもる。

「この、アーネストとも友達になって。そうしたら、私とも友達よ」

　そう言って、一旦カレンは少女を解放し、床に下ろした。

「……」

「……」

　アーネストと少女が見つめ合う。少女はわずかに体を引いていた。二人の体格の差は、単なる大人と子供以上のものがあった。巨人と人間という感じの。

　実際に経過した時間はせいぜい十秒程度なのだが、互いにとっては一時間にも感じられたらしい。アーネストは汗を吹き出し、緊張して彼女の言葉を待っている。

「あ、あ、あの、あのあの」

　少女がつっかえつっかえ言う。

「は、はははははいっ」

　アーネストがつっかえながら応じる。

「と、友達に…………な、なって、くださ、い……」

　語尾はほとんど掠かすれて聞こえないほど、弱々しいものだった。

　アーネストはおろおろと戸惑いつつ、深呼吸して両膝を床につけ

て、なるべく視線を近いものにした。

　彼はどう返事をすればいいのかさんざん迷った末に、たどたどしい言葉で告げた。

「い、いいです。どうぞ。はい、友達です」

　こんな簡単な受け答えでいいのだろうか──と、アーネストは思った。

　心からの言葉かどうか、と言われれば否かもしれない。友人とは、付き合いながら形成するものだ。最初から貴方あなたと私は友人だ、と決めるのは少し違うのではないだろうか──アーネストは、今までそう考えていた。

　けれど、少女はたどたどしい言葉で懸けん命めいに自分の意思を伝えた。それを無む下げに否定するのもまた、無情なように思えた。

　元より、アーネストは彼女を厭いとわしいとは思えない。友人になるに当たって不足しているものが共通な思い出だけと言うのであれば、これから作ればいいだけだろう。

「う、うん。……ありがとございます」

　少女はぺこりと頭を下げ───その額がアーネストの鼻っ柱に直撃した。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

「が、頑がん丈じようですから……大丈夫です、はい」

　鼻を押さえ、目尻に涙を溜めつつアーネストは無理矢理に笑顔を浮かべた。

「ねえ、あなた。ここで何をしていたの？」

　少女はもじもじと指を擦こすり合わせつつ、恥ずかしげに言った。

「あ……あのね、新しいお洋服が欲しかったの」

　確かに、少女の服はいささかデザインが古臭かった。

「色々と探検したんだけど、ここ、服がいっぱいあったから……」

「そうね──」

　この状況下で窃せつ盗とうが咎とがめられることはないだろう

が……と思いつつ、カレンは懐ふところにしまっていた金貨を二枚、カウンターに置いた。この服を買うには充分な価値がある金貨だ。少なくとも、これで窃盗を見逃した訳ではなくなる──と、カレンは自己解決した。

「じゃあ……服を選びましょうか。私が手伝ってあげる」

「うん！」

「アーネスト、悪いけど外で見張っててちょうだい。ホワイトビューが合流してきたら、事情を説明しておいて」

「畏かしこまりました」

　アーネストはブティックの外に出て、一度扉を閉めた。

　着替えは意外に早く、五分もするとカレンの「入ってちょうだい」という言葉が扉越しに聞こえた。

「失礼します、お嬢様」

「こ、こんにちは…………アーネストさん」

　少女はおずおずとスカートの両端を摘むと、淑しゅく女じよのように頭を下げた。

「似合うでしょう？」

　胸を張るカレンに、アーネストも笑顔で頷いた。愛らしいという表現が、これほど似合う少女は早々いまい。

「はい、よくお似合いだと思います。ええと……」

　アーネストは少女に名前がないことを思い出し、言葉に詰まった。少女もアーネストが自分の名前を呼びかけようとしたのに気付き、たちまち笑顔を曇らせる。



「ねえ、本当に名前は分からないの？　忘れちゃったのかしら、それとも……」

「……だって、わたし、名前をよばれたことがないんだもん」

　むぅ、というように頬を膨ふくらませせる。

「お父さんやお母さんはどうしたの？」

「……わかんない」

「いつから、ここにいるの？」

「……わかんない」

「どうやって、ここに来たの？」

「……わかんない……」

　質問のたびに、少女は落らく胆たんの度合いを増していった。

　何時から此処ここに居るのか、何故ここに居るのか、まったく分からない──嘘を言っているようには見えなかったから、きっとそれは真実なのだろう。

　記憶喪失──なのかもしれない。

　カレンはそう思いつつ、最後の質問をした。

「ギリィって、誰？」

「わたしの、一番の、おともだち……」

　声に力がない。目に見えて落ち込んでいる。カレンは、何だか自分が強引に尋じん問もんしているような気分を抱いた。

「ごめんなさい、厭いやなこと、聞いたみたいね」

「……名前がわかんないのって、やっぱりおかしいよね？」

「……」

「……でも、わかんないんだもん。今まで、それでこまったことなんてなかったし」

「ギリィは、あなたのことを何て呼んでたの？」

「〝ねえ〟とか、〝おーい〟とか……」

　それは名前ではなく、呼びかけだ。

「カレン、アーネスト。ふたりとも、とってもすてきな名前ね。いいなぁ……」

　沈黙が流れた。少女は縋すがるようにカレンに抱きつき、彼女も慰めるように少女に腕を回した。

「名前、欲しかったの？」

「……ずっと昔から、名前なんてなかったけど。それでも全然気にならなかった。……でも」

「──でも？」

「でも、名前で呼ばれたいって。そう、思った」

　カレンは目を細めた。

　──名前がない。

　いくら何でも、この年になれば己の名前くらいは覚えているはずだ。それが分からない、ということは何らかの衝撃で名前を忘れてしまったか、あるいは元より名前がないか、そのいずれかだ。

「アーネスト」

「はい」

「私たちで名前を考える──というのは、どうかしら？」

「……良い考えだと、思います」

　アーネストは頷いた。

「い、いいの？」

　おろおろとしつつ、少女がカレンとアーネストの顔を交互に覗のぞき込んだ。

「あなたこそいいの？　私たちが勝手にあなたの名前をつけちゃうのよ？」

　こくりと少女は首を縦に二度振った。

「わたしは、そういうの、ぜんぜんわかんないから……」

　そう言って、顔を伏せた。

　カレンがよし、と頷きつつ考え込む。名前をつける、とは言ったものの咄とつ嗟さに良い名前など思いつくものではない。ともかくホワイトビューと合流しなければ――。

「あ、あの……ジニー……はどう、でしょうか」

　アーネストの不意の呟きに、カレンと少女は一いつ斉せいに顔を上げた。

　彼が提示したのは、アーク・メリア連邦国においてありふれた名前だった。特に、これといった何かがあった訳ではない。ただ、少女の快活そうな雰ふん囲い気きに似合うかもしれない、そう思っただけだ。

　それに、ジニーの語源は〝祝福の精霊ジニーリツプ〟――から来たものだ。彼女には相応ふさわしいかもしれない。そんな気がした。

　きょとんとした表情で、少女はアーネストを見つめて言った。

「ジニー？　ひょっとしてわたしの……名前が……ジニー？」

　口ごもるアーネストの代わりに、カレンがジニーの語源を説明した。

「そうよ。ジニー。ジニーリップという精霊さんがいてね、結婚式とか、お誕生日の会とか、そういうお祝いごとの場所に出てくるの。そして、ジニーリップはお祝いごとを一緒に喜んでくれる、良い精霊さんなのよ」

「それが、わたしのなまえ？」

「うん、そうね……あなたがよければ、今からあなたをジニーって呼ぶわ」

　少女はたちまち目を輝かせた。

「ジニー……ジニー、ジニー、じにー、ジニー……ジニージニー、ジニー！」

　くるくると踊りだす。

「すてき！　わたしの名前はジニー！　ジニーなんだ！　アーネスト、ありがとう！　ねえ、お願い……ジニーって呼んで！」

「喜んでもらえて主としても鼻が高いわ、ジニー」

ジニーは満面の笑顔でアーネストの腰に抱きつき、ぐるぐると回ってから不意に首を上に向けて、彼と視線を合わせた。

「……」

その目が何を期待しているかはアーネストにも分かった。彼はひどくつかえながら言った。

「ジ……ジニー」

「うん。アーネスト！」

ジニーの喜びようは大変なもので、しばらく自分の名を口に出して浮かれ続けていた。

カレンは彼女の喜びを嬉うれしく思う反面、痛ましいとも思った。名前すら存在しなかったという彼女。

―ああ、そうか。

彼女を見てどうにも切なく思うのは、アーネストのせいだ。アーネストもまた、名も無き存在だった。そのアーネストが、彼女の名前をつけたというのは何とも不思議な気分だった―。

◇

コゼットの眼前で己の仲間を殺したマイケル・ソウヤーは金庫に逃げ込むなり、彼らが奪還を命じられていた秘ひ匿とく兵器―〝ガーゴイル〟を装着し、起動させた。

それは決して彼の意思ではなく、彼の内部に潜んだ何者かの仕し業わざなのだが―。

コゼットはもちろん、そんな事を知るはずもない。

突進してきた〝ガーゴイル〟を、コゼットはどうにか躱かわした。振るわれた曲刀シヤムシールは柱をバターのように両断する。

「チィッ……！」

コゼットは舌打ちしつつ、戦輪チヤクラムを投とう擲てきした。だが、〝ガーゴイル〟はそれを無造作に曲刀シヤムシールを振るってあっさりと打ち砕いた。おまけに直撃した一枚も、鎧よろいに傷一つつけていない。

（相性的には最悪だな。硬い敵は苦手なんだ、まったく……！）

そんな事を考えつつ、コゼットは尚も走る。考えられる最悪の展開は、この〝ガーゴイル〟が自分ではなく、別の誰か──即ち、階上の三人を標的にすることだ。

今のところ、この〝ガーゴイル〟の──いや、マイケルの狙いは自分一人だけだ。

──速さスピードならば負けるものか……！

コゼットは柱を蹴けって宙空を舞い、床を跳ね、天井を蹴った。

だが、それに〝ガーゴイル〟はぴたりと追いすがってくる。こみ上げる焦しよう燥そうの念を強引に押さえつけて、コゼットは外へ飛び出した。

〝ガーゴイル〟は跳躍──そして、頂点に達した瞬間、踵かかと部分から魔マカナが放出した。

「何だと……!!　まさか、まさかこいつ……!!」

〝ガーゴイル〟は曲刀シヤムシールを腰に装着し、代わりに背部から三十九式ルベルチオン重機関銃を手に取った。そして、首をディルビック号の方角へと巡らせる。

まるで、お前の次はあちらだというように。

「──ッ！」

コゼットは状況が最悪であることを認識し、即断した。

「奴隷のabd大月輪mgqamar！」

巨大な戦輪チヤクラムが二枚召喚された。コゼットは立て続けにそれを投とう擲てき、二枚の輪は切り裂くのではなく、相手の動きを封じることを狙ったものだ。

両腕と両足首に到達すると、戦輪チヤクラムは瞬間的に縮小した。輪は見事に〝ガーゴイル〟の両腕両足を封じた。

バランスを崩した黒い悪鬼はルベルチオンを反射的に放り捨て、空中で悶もだえた。

コゼットは素早く、懐ふところから仮面を取り出し装着。ディルビック号の船首に向かうために一気に駆け上った。

背後で、戦輪チヤクラムが砕かれた音がした。コゼットはその時すでに、ディルビック号の船体を半ばまで駆け上っていた。

〝ガーゴイル〟がルベルチオンを拾い上げる──狙いを定めることもなく、無造作に銃ひき爪がねを引いた。

ゴリゴリと、まるでノコギリで鋼はがねを斬るような凄すさまじい音と共に、７・９２ｍｍミリの銃弾がディルビック号の船体に直撃した。だが、ミスリル合金の外殻を持つ船体は撃ち抜かれることもなく、火花と共に銃弾を撥はね返す。

だが、銃口は上昇していく──船体を昇るコゼットに向けて。

「く……のっ……！」

コゼットの方が一瞬速く、甲板に到達した。足首に銃弾が掠かすめる、苦痛を感じるよりも速く、安全地帯に転がり込むことだけを考える、前へ、ひたすら前へ、操そう舵だ室しつに飛び込み、そのまま階段を駆け下りる。

「──ミスター・ホワイトビュー！　ミスター！」

叫びつつ、彼女は階段を飛び降りた。上からガラスの破砕音。恐らく、〝ガーゴイル〟は飛びながらこちらに来ている。だがここが船内である以上、どうしても速度は鈍る。コゼットはそう祈りながら、念話テレパスをホワイトビューへ叩きつけた。

──今、どこに居ますか!?

──中層フロア。吹き抜けの大広間だ。船底で銃声が聞こえたんだが、それはお前らか!?

──はい！　結論から申し上げます。私以外の乗組員は五人死亡、マイケル・ソウヤーが裏切りました。彼は今、〝ガーゴイル〟という名の全身鎧スーツアーマーで武装し、こちらに攻撃を仕掛けています！

──〝ガーゴイル〟……道理でＮＣＩＡが動くはずだ。しかし、裏切った？　こんな状況下で裏切るも何もあったものじゃないと思うが……。

──ともかく、こちらは攻撃されてます！　あなたを連れて、ここから逃げます！

──いや、戦う。この状況下で、更にややこしい事態には付き合ってられん。とっとと決着をつけるぞ！

──待ってください、ミスター。あなたが戦うということは、影を使う気ですか!?　全員に正体を明かすことに……！

次の瞬間、走っていたコゼットにホワイトビューが合流した。共

に凄すさまじい速度で、最後に残った二人━カレンとアーネストの元へ疾走する。

「赤子ベイビーたちの危機に、正体がバレるだのバレないだのと言ってられるかッ！」

　ホワイトビューが両手を交差クロスさせ、呼吸を溜める。ニヴェンに伝わる素手による武術に存在する独特の溜めだ。別段、〝原初の形プライマル・スタイル〟を行うのに決まった方法などないのだが、彼はこれが一番、やり易かった。

「ホゥ━━ハッ！」

　咆ほう哮こうというよりは、怪鳥音に近い声でホワイトビューが叫ぶ。

　パチンと、小気味いい音と共に彼の全身が奇妙に震えた。

　階段を駆け上るその途中で、ホワイトビューは奇妙な行動を取った。右手で階段の影を掴み、引き千切ったのである。そして、それを己の胸板に力いっぱい叩きつけた。

　魔法に近い技だが、彼のこれは魔法とは少し違う。

　なぜなら、この魔技ができるものは世界に一人しかいない。

「━では、ミスター・シャドウフィールド。参りましょうか」

「応おうよ！」

　リザードマン一族の〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟ブレイド・レイ・シャドウフィールド━。

　〝影〟は彼にとって、領地であり、要塞である。

◇

　先ほどのやりとりが功を奏したのか、ジニーはすっかりアーネストに懐なついてしまっていた。

「たっかーいっ！」

　きゃっきゃっと喜びながら、少女はアーネストの顔にまとわりついている。アーネストの方は何とも言い難い複雑な表情で、彼女を抱えていた。

「……ねえ、ジニー」

　カレンは少し、顔を引き締めた。ジニーもその雰ふん囲い気きに気付いたのか、たちまち怯えた様子でアーネストにしがみつく。

「その、変なことを聞くかもしれないけど。あのギリィという少年は何者なの？」

「……」

　ジニーは答えたくないとばかりに、アーネストの顔に回した腕の力を一層強くする。

「……ジニー……」

　アーネストは彼女の背中を優しく撫でた。震えているのは怖いからか、それとも哀しいからなのか、彼にはわからなかった。

「ジニー。大事な話なの、聞いて！　ギリィ、という男の子はあなたのお友達？」

　ジニーは背を向けたまま、こくりと頷いた。

「そう……いい、ジニー？　ギリィという男の子は……あなたのために、お友達を連れてきたのね？」

　ジニーはもう一度頷いた。

　カレンはため息をついた。ギリィの力に対する謎なぞ、ジニーそのものの謎は残っているが、この海域でなぜ船が沈没するかは理解できた。

　ジニーのために、ギリィが友達を連れてきたのだ。

　ジニーのために。

　ジニーのためだけに。

「……ジニー。ギリィはね」

「イヤ！」

　聞きたくないとばかりに、ジニーは両耳を押さえた。その仕草で、カレンは理解した。

「……ジニー、話を聞きなさい」

「イヤ！　何もききたくない、ききたくなんかない！　ギリィはわたしの一番大事な友達！　わたしのお願いをかなえてくれただけな

の！」

「あなたの、お願い？　お友達が欲しいっていうお願い？」

　ジニーは泣きながら、こくりと首を縦に振った。

「お友達が、もっと欲しいなって……そう、言ったの。ギリィはだいじな友達で、一番大好きだけど、みんなで遊びたいなって。みんなで遊べばもっと楽しいかなって……そう思ったの」

「そうしたら、ギリィはお願いをかなえてくれた！　このお船を連れてきてくれたの……！　このお船の人が、きっと友達になってくれるからって……！　わたし、その時はすごく喜んだの……やっぱりギリィは何でもできるんだって！」

「で、でも。でも、来た人たちはみんなわたしのこと見てくれないの。カレンやアーネストみたいに、わたしのこと抱きしめてくれないし、温かくなかったし……！」

「ジニー、ジニー！　もういい、分かった。分かったわ、だから……」

「さびしかったの……ずっと、さびしかったの……！　カレン、アーネスト……わたしの、やったことって、いけない、ことだったの？」

「……ジニー」

　カレンは迷った。ジニーの願いは子供なら誰でも持つ、他愛たわいのないものだ。殺意があった訳でもない、敵意や悪意すらない。彼女はただ、そう願っただけだ。

「いけないことなんかじゃ、ない……」

「……アーネスト？」

「いけないなんて事はないよ、ジニー」

　アーネストは少女に、優しい声を投げかけた。

　アーネストはジニーを降ろし、自身も床に膝を突くと真正面に彼女の瞳を見据えた。

　ジニーの泣き濡れた瞳に、アーネストは心が切り刻まれるようだった。

「友達が欲しいなんて、願いが……駄目なはずない」

「本当……？」

　アーネストは首を大きく縦に振った。振って、大粒の涙を零こぼす。

「いけないはずがない。ジニーは悪くない……悪くないんだよ」

　その言葉に、ジニーはしゃくりあげながらアーネストの首に両腕を回した。

「わ、わたし、の、ともだちで、まだ、いて、くれる？」

「当たり前じゃないか……」

「そうよ、ジニー。あなたは悪くない、本当よ。あなたの友達……ギリィも、悪くない。やり方がちょっと間違っていただけ」

「……ギリィは……」

「確かに、ギリィはあなたの為にやったのかもしれない。でも、それはもう止めなきゃいけない。ギリィがあなたに友達を作ろうとするたび……色んな人が悲しむの。友達の友達が、パパが、ママが、お兄ちゃんが、お姉ちゃんが……」

「……わた、し……もう、友達が欲しいなんて言わない」

「ジニー。……俺と、君は友達だ。お嬢様も、君の友達だ。他にも……他にも、友達になれる人がいるかもしれない」

「ほん、と……？」

「俺を信じてくれ、ジニー。絶対、絶対だ」

「……うん。信じる……」

　ジニーが泣き止んだのを見計らい、カレンがそっと彼女の肩に手を置いて言った。

「いい、ジニー？　ギリィがまた友達を作ろうとしていたら、止めなきゃならないの」

　ジニーはごくりと唾つばを飲み、目を伏せ、しばらくしてから微かに頷いた。

「よし、行きましょう。ギリィに会わなきゃ！　アーネスト！　命令します、ジニーを守りなさい。命を懸かけて！」

　アーネストはその言葉にゆっくりと首を横に振った。

「お嬢様……その命令は受け付けません。私は、私自身の意思を以もつてジニーと、お嬢様をお守りするつもりです、命を懸けてです」

「アーネスト……」

　カレンはしばし彼の強い意思表示に驚いたが、やがて満足げにこくりと頷いた。

「よし！　それでいいわ。しっかりね、アーネスト！」

「ジニー。俺に、しっかり摑つかまっていてくれ」

「うん！」

　アーネストが差し出した手を、ジニーはしっかりと握り締めた。

　三人でブティックを出たが、ホワイトビューは未だ姿を見せなかった。

「遅いわね、ホワイトビューはまだ来ないのかしら？」

「どうしようか、洗面室に向かって合流…………ッ!?」

　聴覚の鋭いアーネストが、まず最初に気付いた。微かに耳に響く、風を切り裂く音──その後、すぐに何かを打ち砕く、あるいは金属製の物質に撥はね返る音。

　──音源は……この近く！

「……お嬢様、銃声です……！」

　アーネストの警告と同時にブティックの扉が粉々に破壊され、中から何者かが乱入してきた。

「な──」

「あ、あう……」

「……ッ!!」

　その姿の異い形ぎようさに、カレンやアーネストも言葉を失った。黒色の全身鎧スーツアーマーに身を固め、踵かかとからは魔マカナが放出されている。どうやら、あれがわずかに浮遊している原因のようだ。

　黒いアーメットヘルムからは装着者の表情など窺うかがえるはずもない。

　敵か味方かだけは、簡単に判別できる――扉を破壊して乱入してくる武装した者は、間違っても味方と呼んでいいものではあるまい。

「何者なのッ！」

　カレンの叫びに、兜かぶとがわずかに傾いて彼女の方向へと向いた。

「お嬢様！」

　アーネストはカレンにジニーを託たくすと、二人の前に立ち塞がった。ナイフを店の外に置き忘れたことに気付き、わずかに後悔の念を抱いたが、どちらにしてもあの鎧よろいでは刃が欠けるだけだと諦あきらめることにする。

「アーネスト……！」

「私が時間を稼ぎます、お嬢様。その隙に、ジニーを連れて逃げて下さい！」

「駄目よ、そんなの……！」

「駄目でも何でもです！」

　怒鳴り返すアーネスト。黒騎士はゆったりとした速度で、機関銃の弾帯を交換していた。

　両足に爆発的なエネルギーを溜め、一気に飛び出す。

「行って下さい！　それから、私の封印を……！」

「オーケー、分かったわ！」

　カレンは決断した。

　彼の封印を解く。

　彼をもう一つの姿へと切り替える。

　アーネスト・ヒギンズ――ワータイガーと人間のハーフとして生まれた男。

　彼を完全なる〝人虎〟とするには〝キーワードによる解放〟が必要だった。

　ハーフ・ワータイガーであるアーネストが完全な人虎ワータイガーに変身するには、強い感情の爆発も必要だ。例えばそれは、憎悪や闘争心のような。

　だがそれではいざというときに変身ができず、逆に変身すべきでない状況で変身してしまう可能性がある。

　そんな彼らに、ワータイガーである精霊使いシャーマンがアドバイスを与えた。

　〝キーワードによる解放〟――言葉の暗示による条件付けである。

「より強固な束そく縛ばくを求めるならば、鍵かぎとなる言葉の一部を他者に譲ゆずるが良い。全てを己で抱え込むということは、己の慢心一つで束縛が緩ゆるむということだ。感情に揺れ動かされやすくもなろう。だが、他者が発するようにすればその戒めは強くなる」

　アーネストは選んだ。

　そのキーワードの前半部分を発するのは、己の主あるじであるグリムスター家の人間によるものでなければならない――と。

　己はカレンと、グリムスター家と共に在ることを選んだのだから。自分自身の意思による解放など必要ない。

　カレンが叫んだ。精霊使いが教えてくれた、虎の詩。その一節を――。

「〝無む垢くと経験の詩うたよ、赤々と燃えよ〟！」

　がちゃり。

　アーネスト・ヒギンズの内な部かで、施せ錠じようされていた扉の鍵が開く。

　黒騎士はわずかに反応が遅れた――予想以上の速度に、マイケルに残ったわずかな知性が愕がく然ぜんとする――飛び掛かられ、店の外まで後退させられた。

　咆ほう哮こうしながら、アーネストは拳を振り上げて鎧よろいの上へ叩きつけた。もちろん、鎧は何の掻そう痒ようも感じずにルベルチオンを振り上げようとする。

　咄とつ嗟さの判断でアーネストはそれを手伝って力の流れを変えさせ、銃口を天井へ向けさせた。

「キャァッ……！」

背後の悲鳴は、恐らく銃声に驚いたジニーのものだろう。そう判断して、アーネストは渾こん身しんの力を篭こめ、銃口を決して危険な方角━カレンとジニーに向けさせようとはしなかった。

当然、彼の手は過熱した銃身で火傷やけどを負うことになるが、それすらも今のアーネストには何の障害にもならなかった。

アーネストが叫ぶ。精霊使いシヤーマンが伝えてくれたワータイガーにのみ伝わりし古代言語。カレンが叫んだ詩うたと、その単語の響きをもって、彼は人から人虎への化身を完了する。

「〝我は虎なりベスター〟━！」

扉が、開いた。

瞬間、アーネストの瞳が本来の凶暴性を取り戻した。全身が震え、たちまちの内に全身が毛で覆おおわれる。黄色というより、最早黄金に近い高貴な色合いを持つ体毛は、その実、鋼鉄をも上回る強きよう靭じん性が存在する。

全身の血が熱く滾たぎり、流れる速度すら向上したような感覚を抱く。

背中が異常なまでに盛り上がる。人として成立するギリギリの線まで、体格が変化する。しかし、顔は既に人ではなく、猛たけ々だけしい〝虎〟の顔だ。

咆ほう哮こうは猛々しく、生命を心しん胆たん寒さむからしめるものだった。

最早マイケルは己の思考など存在しないも同然であったが、彼の脳内に巣食う男はアーネストが変へん貌ぼうしたことに喜びを抱いた。

━試させてもらおうか、人虎ワータイガー！

〝ガーゴイル〟が、急に力を弛し緩かんさせ、巧たくみに場所を入れ替えた。組み合っていたはずの相手が、突然消失し、アーネストはわずかな隙を作ってしまう。

振り向くと同時、〝ガーゴイル〟はルベルチオンを放り捨て、曲刀シヤムシールでアーネストの両腕を切り裂いた。

アーネストが右腕を振りかざし、鋼はがねを砕く一撃を〝ガーゴイル〟に叩きつける。

吹き荒れる破壊の嵐。アーネストは苦痛を感じることもなく、己に内在していた暴力性をフルに発はつ揮きして、拳を、爪を叩きつけ

る。



　だが、〝ガーゴイル〟に傷はない。内部にいるマイケルの体にも、損傷やそれに伴う衝撃はまったくない。鎧よろいに極めて強い〝要よう塞さい構築〟の魔法が付与エンチヤントされているのだろう。

　──ふむ。強きよう靭じん性と瞬発性は問題なしだ。

　男はマイケルの体を動かし、空を飛ひ翔しようさせる。追いすがるアーネスト。跳躍、空中で激突。二人が吹っ飛び、交互に体を入れ替えながら墜つい落らくしていく。アーネストは咄とつ嗟さの判断で壁を蹴りつけた、力のベクトルが方向を変えた。

　ずん、という衝撃。

　己の全体重を押し付けたまま、〝ガーゴイル〟を床にめり込ませる。

　既にアーネストは、鎧ごと砕くという方法は諦めていた。いかなる素材で出来ているのか、

傷一つつかない。ひょっとすると、〝イエスラス〟の外殻に匹ひつ敵てきする硬度かもしれない。

　だが、内部は別だ。内部の装着者は鎧よろいがどのように硬かろうと、一定以上の衝撃に耐え切れない。

　それを狙い、アーネストは打撃を加え続ける。両足を摑つかみ、思い切り床に叩きつけた。

　床が凹へこむほどの凄すさまじい一撃──それを、七回繰り返した。

　アーネストは体力の限界を感じて、わずかに動きを止めた。その瞬間、〝ガーゴイル〟はその恐るべき脚力を発動し、あっさりと解放される。曲刀シヤムシールがアーネストの脇を直撃した。

　アーネストは浮遊感を抱く──今の一撃で、持ち上げられ、壁に叩きつけられたことを知る。

「カ、ハッ……！」

　脇腹から血が噴き出る。獣性のせいか、己の血を嗅いで理性を失いかけるほど凶暴性が高まる。わずかに残った理性は、カレンとジニーはかなり遠くまで逃げ延びたから、それでいいと言っている。

　〝ガーゴイル〟はマイケルの手首がない状態で装着している曲刀シヤムシールでは斬きるのに時間が掛かると判断し、壁にその身を預けるアーネストの首を摑み、軽々と持ち上げた。

大きく振りかぶって――投げ飛ばした。天井に叩きつけられたアーネストは、落ちるより速く、飛翔した〝ガーゴイル〟の手に再び捕まえられ、今度は床に叩きつけられた。

全身に蟲ワームが湧くような痺しびれが走る。体のあちこちを強烈に叩きつけられたせいか、指が震えるだけで腕や足といった大事な部分が動かない。

〝ガーゴイル〟は先ほど放り捨てたルベルチオン重機関銃を構え、アーネストの胸に銃口を押し当てた。

虚うつろな瞳でアーネストは〝ガーゴイル〟のその行為を確認し、死を覚悟した。

銃ひき爪がねが引かれ、銃弾が立て続けに撃ち込まれた。

〝ガーゴイル〟は一旦、銃撃を止めて耳を澄ませる。

アーネストは、零ゼロ距離から十二発の銃弾を胴体に喰らったが、それでも生き続けていた。強きよう靭じんな毛をものともせず、肉を突き抉えぐった銃弾は、どうやら内臓器官を損傷させるレベルには達していなかったようだ。

だが、〝ガーゴイル〟はパニックにならずもう一度銃ひき爪がねに手を掛ける。

アーネストは動けない。次の銃弾は肉を食い破り、内臓をズタズタに切り裂くだろう。

だが、アーネストは動かない。何故なら――。

〝ガーゴイル〟の背後に現れたリザードマンから、目が離せなかったのだ。

「よ、元気？」

「……！」

軽く肩を叩かれた〝ガーゴイル〟は反射的に振り向いた。巨大な拳が兜かぶとに叩きつけられ、勢いよく吹き飛んでいく。

「アーネスト！」

ぼんやりした瞳で、アーネストは駆け寄ってくるコゼットを見つめていた。

黒いリザードマンを見ながら、コゼットに「彼は誰だ？」という質

問をほとんど無意識下のレベルで繰り返していた。コゼットはアーネストの傷を診みながら、ため息をついて答えた。

「……もう隠しても仕方ないわね。彼はホワイトビュー教官です」

「ホワイト……ビュー……？」

　テイル・ルー・ホワイトビュー──白色のリザードマン。

「もっとも、それはいくつかある偽名の一つ。彼の名はブレイド・レイ・シャドウフィールド。〝末裔たる者ミスティツク・ワン〟の一人なんです」

「な……!?」

　アーネストは呆ぼう然ぜんと、ホワイトビューという名だったリザードマンを見つめていた。

　──〝末裔たる者ミスティツク・ワン〟だと……！

　さすがに、マイケルの脳に居る彼も驚きよう愕がくに凍りついた。こきり、と首と拳と肘ひじを鳴らしてシャドウフィールドは〝ガーゴイル〟と対たい峙じする。

「さて、と。それでは〝ガーゴイル〟。色々と聞きたいことがある。何としてでも喋ってもらうぞ」

　彼の笑みに、〝ガーゴイル〟は反射的に後あと退ずさって用心深く曲刀シヤムシールを構えた。

　──ふむ。……この英雄に〝ガーゴイル〟の力がどこまで通じるか試したくもあるが……。

　〝ガーゴイル〟は曲刀シヤムシールを振りかぶろうとして、ビクリと全身を痙けい攣れんさせた。

「……？」

　ふらふらと頼りない足取りで、彼らから離れていく。シャドウフィールドは両拳を構えて踏み込もうとしたが、〝ガーゴイル〟の奇妙な様子に躊躇ためらいが生じていた。首を何度も振り、あらぬ方向を眺め、まるで眼前のシャドウフィールドを見ていないようだ。

　──何だと！　くそ、まさか！　……来い、戻って来い！　急げ、急ぐんだ！

　シャドウフィールドが意を決して踏み込むよりも、〝ガーゴイ

ル〟が命令を聞き届ける方がわずかばかり迅はやかった。彼は、再び踵かかとから魔マカナを放出して宙に浮き上がると窓があった部分（ガラスはとうの昔に破壊されている）から、一気に外へと飛び出した。

　その異常なまでの機動性は、さすがのシャドウフィールドも追跡を諦あきらめるほどのものであった。

「……むぅ。元に戻ったはいいが、いいとこ無しってどういう事かな、俺」

「無駄でしたね」

　うんざりした、という感じでコゼットがため息をついた。アーネストの体は、未だ戦闘態勢を解いていない。人虎ワータイガーの姿のまま、シャドウフィールドと向き合う。

　相変わらず、彼と面と向かうたびに脳が痺しびれるほどの敵意を感じ取った。彼はいつでも機会さえあれば、自分を殺そうとしている──そんな妄もう想そうが頭に粘ねばりついて離れない。

　だが、理性はそれを否定する。

　──彼は〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟だ。〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟が、どうして自分如きをそこまで気にかける？　世界に七人しか存在しない英雄が、自分を殺そうとしている？　下らない。妄もう想そうだ、単なる妄想に過ぎないんだ、アーネスト。

　アーネストは、一度その妄想をシャドウフィールドにブチまけるべきかと考えた──それを口に出そうとする。だが、やはりそれも理性が押し留めた。それどころではない、自分には守るべき者がいる。

「……私は、お嬢様とジニーを追っていきます。姿を見ませんでしたか？」

「いや……」

「俺もコゼットも、ベイビーは見てない。……待て、ジニーって誰だ？」

「実は……」

「アーネスト！」

　その呼び声に、慌あわててアーネストは声の方へと顔を向けた。カレンと、彼女の腕に抱えられたジニーがそこにいた。

「あなたと離れると、ジニーが泣き出しちゃって……それで、すぐそこのレストランに隠れていたの」

　カレンは苦笑しつつ、ジニーを己の腕から解放した。

「……こ、子供……？」

　コゼットの唖あ然ぜんとした表情。シャドウフィールドも、さすがに困惑した表情でジニーを眺めている。ジニーはパタパタと喜びの表情を浮かべてアーネストに駆け寄ったが、彼の姿形を見て、息を呑のんで立ち止まった。

「あ……」

　ジニーが怯えたようなため息を漏らす。アーネストは、自身の姿を酷ひどく恥じて、黙って顔を俯うつむかせた。

　仕方のないことだ、とアーネストは自分に言い聞かせる。ジニーにとって、今の自分は怪物みたいなものなのだから、彼女が泣かないだけまだマシだ……そんな事を考えた。

　アーネストは二人に背を向けた。胸が痛む。銃弾のせいだろう。血はもう止まっている。この姿である限り、回復能力は人の姿のときとは比較にならない。

　だから、出来ればこのままの姿でいるべきだろう。ジニーはカレンに任せればいい、とアーネストはできるだけ冷静に思考した。

　くいくいと袖そでを引っ張られて、アーネストは後ろを振り返る。

「……」

　ジニーが、じっと己の顔を見つめていた。恐ろしい形相の〝虎〟の顔を。

「……抱っこして」

　静かに彼女は告げた。アーネストはしばらく躊ちゆう躇ちよしていたが、ジニーはじっと彼の顔を見つめ続け、傍そばに寄ってきたカレンに肘を突っつかれたところで観念した。

　ジニーを抱え上げて、アーネストはようやく安あん堵どのため息をついた。

　階下へと降りながら、カレンはコゼットとシャドウフィールドに簡単に事情を説明した。コゼットもまた、ホワイトビューがシャドウフィールドであることと己の正体を明かした。

「私はフォルテンマイヤー家に仕えるメイドです」

「〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟のフォルテンマイヤーね」

「ええ、そうです。メイドといってもいささか複雑な事情がありまして……多少ですが、武術の心こころ得えがある訳です」

—あの〝ガーゴイル〟の攻撃を凌しのぎきって、『多少ですが』とは、謙けん遜そんにも程がある。

アーネストは驚嘆を通り越して呆あきれた、という気分だった。

カレンはコゼットに関してよりも、シャドウフィールドの方が遥はるかに疑問だった。

「それで、教官……シャドウフィールドの方はなぜディルビック海域へ？」

シャドウフィールドはふむ、と呟いてカレンを見て、悪いた戯ずら好きの小僧のような笑みを見せた。

「ラムズ・ルート・ブルーシーを知っているかね？」

カレンは両肩を竦すくめて答えた。

「知っています。冒険家アドベンチユラーブルーシー。私たちの間では、名の知れた男です。海洋を中心に活動しているので、できれば今回の冒険に加わって欲しかったのですけど、連絡してもなしのつぶてでして」

「そいつは俺だ」

その言葉の意味を解釈するのに、カレンはしばらく時間が掛かった。

「……待ってください。ブルーシーが、貴方あなた？」

「俺は体色を自在に変更できる特技を持っていてね。後は、他のリザードマンに露ろ呈ていしないよう、顔をちょちょいと変えれば問題ないのさ」

「……あ、貴方は〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟でしょう!?」

「聖せい紋もんを継承したからって、別に冒険家アドベンチユラーとして活動できない訳じゃないさ。ワイズマン以外の連中には渋い顔をされるがね」

「セルマ・フォルテンマイヤー様は今回の海域調査に、ミスター・ブレイドが向かうことを酷ひどく心配なさって──それで、私が選ばれたのです」

「そりゃ、心配もするわね」

　呆れたように、ため息をついた。

「……ねえ、アーネスト」

　ジニーが頬の毛を引っ張った。

「痛いよ、ジニー。どうした？」

「ミスティック・ワンって何？」

　コゼットとシャドウフィールド、そしてカレンが揃そろってジニーの顔を見つめた。

　その視線が気になるのか、少しアーネストの顔を掴つかむ力が強まる。

「ええと、ジニー。ミスティック・ワンっていうのはね……」

「うん」

　カレンは彼女に、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟についてどう説明すべきか迷った。伝説から説明するべきなのだろうか？　それとも、もう少し簡単に？　だが、簡単にといっても単に『偉い英雄』で済ませていいものか？

「……何でもないさ。単なるつまらない……そう、ニックネームだ。俺はあまり気に入ってない、ブレイドと呼んでくれればそれでいいぜ、ベイビー二号」

「わたしの名前はジニーだもん」

「オーケー、ジニー。ブレイドだ、よろしく」

　シャドウフィールドが手を差し出すと、ジニーは少しつんと澄ました表情で彼の手を握った。

「ジニーよ。……よろしく。せっかくだから、ブレイド。あなたと友達になってあげてもいいわよ」

「そりゃ光栄だ。ありがとう、ジニー」

　シャドウフィールドは握った手を二度、三度と振った。

「ところで、ジニー。ギリィ、という少年は今どこにいるか分かるか？」

　コゼットの問いに、ジニーは少し哀しげに顔を俯うつむかせた。

「……ええと、今は神殿の方にいると思う」

「神殿？」

「このお船の、もっともっと向こうにあるの。このお船のおしりの部分もそこにあったわ。そこで、その……ギリィは、わたしのお友達を作ってるの」

「……ジニー。話せばギリィは、お友達を作るのを止めてくれるかい？」

「ええ、もちろんよ！　いつだって、ギリィはわたしのお願いを叶えてくれたもの！」

「そう。じゃあ、まずギリィのところへ行きましょう。これ以上、海の上に手を出すのは止めないと……！」

「いや、待った！　その前に、ルイスに報告した方がいいだろう。逃げた〝ガーゴイル〟の事もあるだろうからな」

　ホワイトビュー――シャドウフィールドの言葉に、カレンは頷いた。

「分かりました、すぐに念話テレパスを繫つなぎます！」

「お嬢様。艦長への連絡は？」

「さっき、逃げて隠れたときに一度。ジニーを含む状況の報告と、支援要求をしたわ。フィールタン兄弟と、ジャン・ジャック・ルードを向かわせると言ってたけど……」

「ジャンは軍人組だったな。丁ちよう度どいい、あいつに〝ガーゴイル〟のことを聞いておこう」

　カレンは歩きながら目をつむり、精神を集中させた。だが、念話テレパスを行う際の、彼の魂とガチリと接続したような感覚がいつまで経っても訪れなかった。

　――艦長、艦長、聞こえますか？　カレンです。先ほどの危機的状況はどうにか脱しました。

□□……。

──艦長？

□□……。

「……」

「どうした、ベイビー？」

「通じません、すいません……精神の集中が乱れているのかも。もう一度やってみます」

雑念を払うために、両頰を叩いてもう一度彼女は呼びかけた。

だが、ルイスの返答はいつまで経っても訪れない。眠っているのか、それとも彼女の呼びかけに答えられないほどに、精神を集中して何事かに当たっているのか、あるいは──肉体的な滅びを迎えたのか。

「やっぱり通じません。コゼット、教官。向こうにいる誰かと念話テレパスが繫つながる人はいませんか？」

「俺は魔法が使えん」

シャドウフィールドは胸を張った。

「私も、あの〝イエスラス〟に残っている者とは、誰一人として契約を結んでいない。申し訳ない」

「いいわ。教官、一旦〝イエスラス〟に戻りましょう。どちらにせよ、情報の交換は必要だと思います」

「オーケー。どちらにせよ、君たちは一度休む必要があるだろうからな」

話し合いが終わり、彼らは船底まで降り切ると第一金庫室を通り過ぎようとしたが、コゼットが「少し待っていて欲しい」と告げて、中に入っていった。

五分経って戻ってきた彼女は、一つのスーツケースを抱えていた。

「〝ガーゴイル〟のデータファイルです。ＮＣＩＡが深海までエージェントを派は遣けんして追い求めていたのは、あの本体とこの書類のようですね」

「すまじき者は宮仕え、というところかね」

　パラパラと書類を捲めくりつつ、シャドウフィールドは皮肉な笑みを見せていたが、あるページのところで、少し顔をしかめた。

「……何だ、あの鎧よろい。どうにも欠けつ陥かん品ひんじゃないか」

「欠陥品？　……あれがですか？」

　コゼットが眉まゆをしかめ、アーネストは呆あつ気けに取られた。

「これを見てみろ。着装して、三十分以上もった被験者が存在しない」

「十三人が着装した内、十二人が死亡……？」

「最後の一人だけが三十分を越える着装に成功したらしい。タクピカルの研究所で、更に詳細に調査を行うためディルビック号に積んで運んでいる最中、この事件に巻き込まれた……という事のようだな」

「……」

　船底の断面から、一人一人地表へ──もっとも、海底１０００ｍモールの世界で地表というのもおかしな話だが──降り立つ。

　アーネストとジニーを除いた三人は、すぐに異変に気付いた。

「足跡だ……まずいな、多いぞ。進行方向は……〝イエスラス〟だ！」

「ジニー。しっかり掴つかまっていてくれ、少し揺れるかも」

「うん、分かった！」

　四人は一いつ斉せいに走り出した。

　双ふた子ごのゴブリンであり、奇き矯きような性格とそれに似つかわしくない優れた成果を上げることで名を馳はせていた冒険家アドベンチユラー、それがフィールタン兄弟である。

　兄のルイはややのんびりしていて、その性格は間延びした口調にもよく現れている。弟のベルベットは女性のような言葉遣いで喋しやべるが、正しよう真しん正しよう銘めいの男性であり、恋人も女性だ。

　そして釣り上がった目と拗すねたネズミのような顔をしたエルフのジャン・ジャック・ルード。彼ら三人は今、〝王国キングダム〟の乾いた大地をひた走りに走っていた。腐肉の建造物が立ち並び、白い靄もやが漂う中にゆらゆらと動く黒い影──屍兵ゾンビどもの群れ。

「こーのーっ！」

　ルイ・フィールタンが、よろよろとこちらに近づく屍兵ゾンビの足を取り、持ち上げて転ばした。ベルベットが素早く近づいて、愛用のハンマーで彼の頭を叩き割る。

　ビクリと痙けい攣れんして、男は動かなくなった。

「さ、早く逃げましょう。お兄様！」

「おうよーっ！」

　俊敏な動きで、彼らは屍しかばねの間を掻かい潜くぐり、逃げ回る。

「クソッ……おい、お前ら！　俺を置いていくなよ、チクショウ！」

　だが、エルフであるジャン・ジャック・ルードはそうはいかない。悲痛な声でそう叫びつつ、彼は二人の後を追った。

　思っていた以上に強い力でジャンの肩を摑つかむ屍兵ゾンビを払いのけ、ワイザー式短機関銃で、頭を撃ち抜いた。ジャンに躊躇ためらいはない。ただ、弾だん倉そうに残っている弾数だけは心配だった。

　三人は集団の屍兵ゾンビに挟まれていた。前方、後方、左右──全て取り囲まれている。とはいえ、その包囲網は極めて緩ゆるやかで、おまけに相手の鈍重な動きは突破を更に容易にさせることだろう。

　だが、三人の行く手にはおおよそ数百人の生きる屍が──全員、この一か月半の間に見るも無残に腐り果てている──待ち構えていた。

　口を開き、血を滴らせ、喉のどから聞こえるのは気持ちの悪い呻うめき声だけ。何を言っているかも分からない。だが、三人は確信を持って言えることが一つあった。

　──捕まったら、死ぬより酷い目に遭う。

　ルイス・マクレーンは、先せん遣けん隊たいであるカレンの念話テレパスによる報告を受けて、フィールタン兄弟とジャンを増ぞう援えんということで派遣した。

　だが増援である三人はディルビック号に辿たどり着く途中で、屍兵ゾンビに出くわした。腐った死体の群れは、彼らの姿を認めるなり──果たして視覚があるのかどうかははなはだ疑問ではあるが──襲い掛かってきた。

　慌あわてて引き返そうとしたが、いつの間にか背後にも彼らが回り

込んでいた。

　前後を挟まれ、思わず三人は先遣隊が〝家〟と呼んだ場所に逃げ込む──逃げ込んでしまったのだ。

　そこには窓が一つもなかった。仕方なしに、彼らは強引に腐臭を放つ壁を蹴破った。だが、そこは〝家〟に挟まれた狭苦しい路地であり、三人は次第に追い詰められていた。

　ワイザー式短機関銃が唸うなりをあげて、屍しかばねたちの胸板を吹き飛ばした。

　だが屍たちは銃弾をものともせず、斃たおれた者たちはむくりと起き上がると再びこちらにのろのろと歩き出す。

「頭を狙いなさいよ、頭を！」

「うるさい！　集中できないだろ！」

　ジョンは前進しつつ、自分たちの背を守るゴブリンたちに毒づいた。

　ゆっくりと呼吸を整え、恐怖に震える手を必死にコントロールしながらもう一度銃ひき爪がねを引いた。

　次の掃そう射しやは、見事に彼らの頭にヒットした。よろよろと二、三歩歩いたあと、頭の無くなった屍たちは崩れ落ちた。

　包囲網に穴が開いた、三人は一か八かとそこに飛び込む。次々とにじり寄ってくる屍兵ゾンビたち。

「あ、ぐっ……！」

　ジャンは突然、足を引っ張られて転倒した。先ほど頭を吹き飛ばした屍が彼の足首をしっかりと摑つかんでいた。

「お、おーい！」

「ちょっとあんた、ええいこのッ……！」

　フィールタン兄弟が、腕を強引にもぎ取って足首を解放した。だが、その瞬間に包囲網はさらに狭まり、無数の手が次々と伸びてくる。

「ひっ……！」

　堪こらえきれず悲鳴をあげ、ジャンは観念したかのように目をつむ

る。フィールタン兄弟も全身に屍の腕が絡まり、じたばたと暴れもがいたが数の暴力に圧殺されかけようとしていた。

　次の瞬間、彼らの周囲に集まっていた屍しかばねたちが宙空へ吹き飛んだ。

　ジャンやフィールタン兄弟はあっという間に解放されたが、突然のことで訳も分からずおろおろと周囲を見守るばかりだ。

「ハハハハハ！　暴力的な数で押し潰つぶそうって考えは嫌いじゃないぜ、ギリィ君。だが、申し訳ない。この数なら俺の方が上だ」

　ぼとぼとと、吹き飛んだ屍たちが熟れすぎた果実のように地面に落ちて砕け散る。

　シャドウフィールドが着地した。ズボンのポケットに手を差し込み、不敵な笑みを浮かべて周囲の屍兵ゾンビを見回す。

　屍の群れは地面に転がる三人より、彼の方に注意を向けた。

「早く、こっちへ！」

「え、あ、え……と、虎!?」

　その隙に、コゼットとアーネストが三人を安全な場所まで引きずっていった。アーネストの変へん貌ぼうにジャンは危うく卒倒しかけた。

　手を伸ばし、シャドウフィールドの周囲を取り囲む屍たち。屍に知性も理性もない、だから彼らはシャドウフィールドの影が膨れ上がったことに気付かない。

「……さて、と。ディルビック号の乗客たちよ！　ギリィ君の玩具おもちゃから解放してやる。もう、無茶な事態に付き合わされることもない。安心して逝いってくれ」

　影が平面から飛び出して拳を形作った。同時にシャドウフィールドもポケットから手を出し、拳を構える。

「――ハッ！」

　裂れつ帛ぱくの声と共に、シャドウフィールドの拳が屍兵ゾンビたちに襲い掛かった。一撃の拳で、彼らの顔が破裂した。

　シャドウフィールドの背中を守るのは影で作られた巨大な拳。

　襲い掛かる屍たちを、その圧倒的な拳の力で叩きのめし、押し潰つ

ぶしていく。

「──クソ。心が痛いぜ、まったく」

　屍となった少年たちを見て、彼はわずかに躊ちゅう躇ちょした。背後からコゼットが駆け寄ろうとした雰ふん囲い気きを察したのか、影の腕がそれを押し留めるような仕草をした。

「やめろ。これは英雄たらんとする者にとって、当然の代価だ。コゼットとアーネストは、そこでジニーとベイビーを守れ！」

　彼は再び拳を構え、銃弾のような速度で屍たちを叩きのめした。

　荒れ狂う嵐のような暴力は、そこに蠢うごめいていた者たちを残ざん酷こくなまでに打ちのめす。

「アーネスト！」

　コゼットの声に、アーネストはそっとジニーの目と耳を大きな腕で覆おおい、近づいてきた屍しかばねをその爪クロウの一撃で消滅させた。

　屍は女だった。子供がいておかしくない年齢であった。いや、多分いただろうなとアーネストは妙な確信を抱いた。

　気付いたカレンが言った。

「アーネスト。……あなたは立派なことをやったのよ。彼女にとって、今の一撃は救いになったはずなんだから」

「……はい。分かっています」

　理屈では分かっている。彼らを救い、カレンとジニーを守るには彼らを完全に殺す以外に方法はないと。それでも、アーネストは酷ひどく辛つらかった。辛くて、泣いてしまいそうだった。

　ジニーがアーネストの髭ひげをちょいちょいと引っ張り、下に降ろすようにせがむ。

　アーネストが膝を突いて降ろすと、彼女は最早ピクリとも動かない死体の前にしゃがんだ。

「……ごめんなさい……」

　そう言って、ジニーは静かに泣いた。

　アーネストやカレンが動くより先に、コゼットがそっと彼女の肩に

手を置いた。

「ジニー。君が謝ることはないよ」

「でも……」

「君が悲しむと、カレンやアーネストも悲しいんだ。心を痛めるんだ。その気持ちは忘れちゃいけないけど、今は我慢なさい」

「……」

　ジニーがアーネストとカレンの元へ駆け寄る。

「ごめんね」

「いいのよ、ジニー。いいの……。さ、終わったみたい。行きましょう」

　その言葉に、アーネストはシャドウフィールドを見た。〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟としての力を解放した黒い蜥蜴とかげの勇姿を。

　彼が打ち砕いた数百人の屍兵ゾンビはいずれも道の両端に吹き飛ばされていた。まるで、道を作ったかのように。

　ひょっとしたらそうなのかもしれない、とアーネストは思った。

　シャドウフィールドは、ジニーに哀しい思いを抱かせないために、死体を見えない場所まで吹き飛ばしたのかもしれない。

　カレンはジニーと手を繋つないだ。ジニーは少し迷った末、アーネストと空いた手を繋いだ。

「おや」

　コゼットはその光景を目にして、優しげに目を細める。

「そうしていると、仲の良い家族みたいですね……うん」

　彼女の表情から察するに、からかったのではなく、本心からそう言ったらしいとカレンは判断して、ひどく赤面した。

　アーネストは未だ人虎ワータイガーのままだが、人の姿ならばきっと赤面しただろう。

「かぞく……？」

　きょとんとした表情で、ジニーがコゼットに尋ねる。

「パパがアーネスト、ママがカレン。いいだろう？」

　コゼットが片目をつむる。

「もう、コゼット……やめてちょうだい」

　アーネストはぽりぽりと頭を掻かいた。もし、もしこの海域から脱出することができて、尚なお且かつジニーが望むのならば、グリムスター家の養よう子し……せめて、あの屋敷に置いてくれることはできないか、そう願うつもりだった。

　出会って一日も経ってはいないが、それくらいは願っても許される──そう思った。

「ねえ、アーネスト」

「うん」

「……アーネストがいるところって、どんなとこ？」

「そうだね……。花が沢たく山さん咲いている」

「花？」

「綺き麗れいなものだよ。自然に作られたんだ……いろんな色がある。青とか、緑とか、黄色とか、赤もある。どれもすごく鮮やかだ」

「……見てみたいなあ」

「大丈夫。すぐに見せてあげるよ」

「うん。……ギリィにはお願いしない。ギリィに無理ばっかり言わせてきたんだもの。自分の足で、ちゃんとほんとうのお花をみてみたい」

　自失していたフィールタン兄弟と、ジャンがようやく立ち上がった。

　それでも驚きよう愕がくは隠せず、特にアーネストの正体もシャドウフィールドについても分からないジャンは、おろおろと二人を交互に見つめている。

「あらあらあら、アーネスト……前々からただものじゃないとは思っていたけど」

「ワータイガーとはねー。おで、はじめてみたよー」

「ハーフじゃないの？　あたしと一緒で」

「いや、ベルベット。それ違う、それ意味が微妙に違うから」

　フィールタン兄弟は、アーネストについてはさほど驚いた様子を見せなかった。

「……隠していて、申し訳ありません。ルイ様、ベルベット様」

「いいってことよー。ワータイガーなんて、めずらしーもんねー」

「色々と事情があったんでしょ？　仕方ないわよ」

「そ、それより……おい、コゼット！　一体、一体アイツは何者なんだ!?」

　ジャンが怯えながら、短機関銃を振り回した。

「……言ってもいいんだが、心臓発作の気はあるか？　あるのなら、深呼吸してから話を聞いてくれ」

　コゼットはニヤリと笑う。意地悪い表情が、今まで被っていた料理人としての仮面の奥からチラリと姿を現していた。

「……い、いいとも。言え、早く言ってくれ」

　彼女はシャドウフィールドの正体を告げた。心臓発作こそ起こさなかったものの、ジャンは再び昏こん倒とうした。

◇

　新たに加わった三人──ただし、内一人は昏倒したままだが──を引き連れて、彼らはひたすら〝イエスラス〟を目指す。

「……」

　シャドウフィールドとアーネストの表情が厳しいものへと変わった。気付いたコゼットが声をかける。

「どうかしましたか？」

　アーネストは歯を食い縛しばるように告げた。

「血の匂い……！」

　全員が疾走する。〝イエスラス〟の姿が見えるより先に、無数の屍

兵ゾンビの姿が垣かい間ま見みえた。

「まずい……搭乗口が開いているぞッ!!」

　シャドウフィールドの絶叫に、全員が青ざめた。外殻がいくら頑がん丈じようでも、中に侵入されれば何にもならない。

　だが、そこに辿たどり着くまでにはシャドウフィールドの力を以もつてしてもかなりの困難が予想される。それに加えて、屍兵ゾンビ以上に恐ろしい存在がいる。

「あれは……」

　宙に浮いている。下で蠢うごめく屍しかばねたちとは、一線を画かくす存在だ。あどけない顔つき、大きく輝く瞳、わずかに唇を釣り上げる優雅な微笑ほほえみ。

　ジニーが二人から手を離し、叫んだ。

「ギリィ！」

　その声に振り向いた少年は、安あん堵どの笑顔を見せた。右腕がおざなりに掲げられる。それと同時に、屍しかばねたちのあらゆる行動が急に停止した。搭乗口から入り込もうとしていた屍兵ゾンビですら、途中で動きを止めた。その様子に、コゼットは少年……ギリィの命令に、彼らはよく従うのだ、ということを理解した。

「よかった。捜していたんだよ！　……む、変な人たちと一緒にいるね。よくないよ」

　ギリィの笑顔が、たちまち酷こく薄はくなものへと変わる。彼は、アーネスト、カレン、そしてコゼットやシャドウフィールドたちを順じゆん繰ぐりに睨にらみつけていった。

「……ジニー」

　ジニーは先ほど名付けられた己の名を呟いた。

「え……？」

　ギリィはきょとんとした表情で首を傾かしげる。

「ジニーっていうの。わたしの名前」

「え？　……嘘うそだろう？　だって、君は名前が分からないって言ってたじゃないか」

　ギリィは困惑した表情で言った。

「うん。……だから、ここにいるアーネストが名付けてくれたの」

「──何だって？」

　冷たい声と共に、ギリィはアーネストへ視線を移した。

「……」

　アーネストは無言で、ジニーの傍そばに寄り添った。

　あの少年には、まだあまりにも謎なぞが有りすぎる。戦闘能力も、そもそも彼自身の正体も。故に、迂う闊かつにジニーを接触させたくはなかった。

　それでも少年と相対して、何とはなしに理解できたことがある──と、アーネストは考える。

　ギリィという少年は、おおよそジニー以外の者をどうでもいいと思っている。

　目がそう物語っている。自分たちへ即座に攻撃に移って来ないのは、単にジニーが巻き込まれることを恐れているからだ。

　彼女が安全な位置に移動すれば、即座にこちらを踏み潰つぶす腹積もりだろう。

「だから、アーネストがわたしの名前をつけてくれたの、ジニーって。すてきな名前でしょ？」

「……ふぅん。別に、いいんじゃない？」

　少年は明らかに気分を害したようだった。アーネストには彼がどこか、傷ついたようにも見えた。

「…………それでね、ギリィ。お願いがあるの」

　お願い、という言葉にギリィがぱっと目を輝かせる。

「お願いなら、今叶えているよ！　ほら、もうちょっとでちゃんと君のことを見てくれるお友達が作れそうなんだ！」

　その言葉に、アーネストたちの表情がぎょっとしたものへと変わった。何故ならば、それは自分たちが対象であることは明らかだった。

「最初は君の言う通り、全然駄目だった！　動きものろのろだし、す

ぐ腐っちゃうし！　でもね、でも五百人あたりから、ようやくコツが分かりかけてきたんだよ！　ここに居るみんなは、もう喋しやべったり走ったりもできるんだ！　それに、ほらコイツも……！」

　ギリィが指差した先には━。

「な…………ッ！」

「何だ、あれは……メガロドン……!?」

　二頭のメガロドンが、体をくねらせつつこちらにやってきていた。一頭は地上を這はいまわり、もう一頭は驚くべきことに、肥ひ大だい化したヒレから魔力マナを放出させながらギリィの頭上を浮遊していた。

「━━━違うの、ギリィ。お願いは、そうじゃないの」

　ジニーの泣き出しそうな瞳に、ギリィも異常を感じたようだった。

「……どんな、お願い？」

「お願い、ギリィ。……もう、お友達はいいの。お友達は作らなくてもいいの。この人たちをはなしてあげて……ギリィ、それがわたしのお願いよ」

　ギリィは、呆あつ気けに取られたような薄ぼんやりとした表情でジニーの顔を眺めた。

　長い間沈黙した後、彼は猛烈に抗議し始めた。

「……だ、だって。だって、たくさん友達が欲しいって言ってたじゃないか！　友達と一緒に遊びたいって、一緒にここで住みたいって……！」

　彼の叫びには、悲哀以上の戸惑いが含まれていた。

「わ、わたしわかったの！　ここでお友達をつくるっていけないことなの！　お友達をつくるということは、ほかの人のお友達をなくすことだって……やっとわかったの！　みんなを、み、みんなをかなしませることなの！　だから、いらない！　いらないの、ギリィ！」

「酷ひどいよ！　僕、頑張ったのに！　すごくすごく頑張ったのに！　君の願いをかなえるために、僕は存在するのに……どうして！　いらないなんて、酷いよ！」

「……ごめん、なさい」

「だったら、願いを叶えさせて！」

「でも……でも、願いをかなえてギリィ！　今の願いは、お友達をつくらないことなの！」

　ギリィは顔を歪ませ、駄々をこねるかのように首を何度も横に振った。

「その願いは、この願いを全部無駄にしちゃうじゃないか！　嫌だ！　絶対に嫌だ！」

「だって……」

「君に友達を作ってあげるって決めたんだ！　君に友達を作って上げられるのは、僕しかいないんだ！」

「そ、そんなことない……もん……」

　自信なげに、ジニーはアーネストの顔を窺うかがった。

　アーネストは笑おうとして、自身が未だ〝虎〟であることを思い出し──彼女の頭に、恐る恐るといった感じで手を載せた。

「俺は──ジニーの友達だ」

　そうして、ギリィに向かってそう断言した。ギリィの顔が憎悪に歪ゆがむ。ジニーが彼の顔を見て傷ついていること、そしてそんな表情を浮かべるギリィに胸が痛んだ。

「キサマ……キサマ、キサマ、キサマキサマキサマキサマッ！　友達だって！　何を偉そうに！　お前らなんか、友達でもなんでもないくせに！　お前たちなんか、彼女に酷いことしかしなかったくせに！」

「違うわ、ギリィ君！　少なくとも、私たちはジニーを傷つけようなんて思ってない……！」

　カレンが割って入った瞬間、ギリィは激げつ昂こうした。

「嘘をつけェッ！」

　そう怒鳴った瞬間、周囲に炎のような魔マ力ナが叩きつけられる。

「……っ！」

　その余波を喰らって、屍兵ゾンビたちもばたばたと斃たおれ、吹き飛んだ。

「あうっ……！」

　アーネストはその巨きよ軀くを大いに活用し、カレンとジニーを防護した。焼け付くような感覚に顔をしかめる。だが、ジニーは恐怖のせいか、したたかに尻しり餅もちを打って転んでしまった。

「ここで……ずっとここで、平和に暮らしてきたんだ！　友達もたくさん作って！　もっともっと楽しく暮らしていけると思ったのに、どうして……くそ、くそ、くそ！」

「ギリィ……ねえ、聞いて！　ギリィ！」

「何だよ！」

　ジニーは震えながら立ち上がった。ギリィと目を合わせ、その願いを口に出すことに酷ひどく怯えつつも、その願いを口に出さなければ、自分はずっとこのままだという事実に気付き、彼に告げた。

「わ、たし……わたし、外の世界が、みてみたい」

「え――？」

　ギリィの表情が凍りついた。怒りすらもどこかへ消え、呆ぼう然ぜんとジニーを見つめている。

「色んなものがあるって、聞いたの……ここにはない、色んなものがあるって！」

「あ、く―」

「だから、だから……！」

「…………いやだ」

「ギリィ、ギリィもいっしょに行こうよ！　もう、こんなことやめよう！　やめて、お願いだからっ！　わ、わたしがわるかったの！　お友達が欲しいなんて、わがまま言ったわたしが悪かったの！　だから、もう……！」

「いやだ！　僕はここから出て行くもんか！　君も外の世界なんかへ連れて行かせるもんか！」

「ギリィ……」

「外の世界なんかない！　あったとしても、僕らはきっとそんな場所で住めないんだ。生まれてずっと、君も僕もここにいたんだから……う、くっ……」

　ギリィは両手で顔を覆おおった。その両手をゆっくりと開いたとき、彼の表情は悲嘆から憎悪へと切り替わっていた。

「……お前のせいだ、名前なんてつけて、彼女を騙だまして、友達だとか何とか言って……ッ！」

　狙いをアーネストに定めたギリィの両手に、炎が灯ともる。

「ギリィ！」

　ジニーの悲鳴じみた声

「逃げろ、アーネスト！」

　シャドウフィールドの声。

　アーネストは咄とつ嗟さに判断した。簡単な理屈だった、このままカレンとジニーの傍そばにいれば、彼女たちを巻き込む可能性が高い。

「……っ！」

　走り出し、ギリィに向かって接近する。

「お前の、せいだ」

　叫ぶのではなく、憎悪を振り絞しぼるような言葉。次の瞬間、ギリィの背中から無数の赤い蔦つたが飛び出した。

　脇腹に、腕に、背中に突き刺さる。

「アーネスト！」

「お兄ちゃん！」

「ぐ、む………………！」

　赤い蔦が体に突き刺さった瞬間、ぞっとする恐怖を抱いた。

　自分が自分ではない何かに変わっていくという極限の恐怖。突き刺さった苦痛など、それに比べればものの数ではなかった。

「この世界は、僕の世界だ！　誰にも邪魔はさせるもんかッ……！」

「ギリィ、やめて！　やめて！　アーネストを、傷つけないで！」

　ジニーが飛び出した。アーネストの体に突き刺さる赤い蔦を両手で引き抜こうとする。

「よせ、やめろジニー……！」

　蔦が防衛本能からか、暴れ狂った。

「え……」

　ジニーの胸に、赤い蔦つたが突き刺さった。

「ジニーッ！」

　カレンの悲鳴混じりの声。シャドウフィールドは疾しつ風ぷう迅じん雷らいの速度で二人のもとへ駆け寄り、ジニーに刺さった蔦を引き抜き、アーネストのものは残らず影を使って引き千切った。

「やだ……しっかり、ジニー！」

「あ、う……」

　ジニーの瞳が虚うつろだ。ガクガクと全身が痙けい攣れんしている。突き刺さった際のショック症状だろうか──とアーネストは青ざめた。

「あ、う、嘘うそ、嘘だ……嘘だ……」

「嘘じゃねぇ、ギリィ！」

　アーネストとジニーをコゼットたちに任せ、シャドウフィールドが宙空を睨にらむ。

「お前はジニーを傷つけた！　お前とジニーは友達なんだろうが、ええ!?　我わが侭ままを言って、無理難題突きつけて、心を傷つけるヤツぁ友達とは呼ばねぇよ！」

「違う！　僕は傷つけたりなんか……！」

「だったら、この蔦を収めやがれ！」

「……」

　グロテスクな蔦は一瞬で引き抜かれ、ギリィの背中に収まった。ギリィは相変わらず宙に浮いているが、その表情にはまったくといっていいほど精彩を欠いていた。

　先ほどまでの憎悪は、ジニーを傷つけた瞬間にどこかへ消えてしまったようだった。

「僕は、僕は、僕は、ただっ……」

「泣くなよ、ギリィ。……まず、ジニーに謝ってやれ」

「……」

「ミスター！　ジニーもアーネストも無事です。アーネストは少し出血が多いので、すぐに医務室へ……！」

「分かった。ギリィ、そんなとこに浮いてねぇでとっとと降りて来─」

　シャドウフィールドは目を見開いた。凄すさまじい速度で移動する黒い塊が、ギリィに向かって突進してくる─！

「よけろ、ギリィ……！」

　言葉を発するか発さないかの内に、〝ガーゴイル〟の曲刀シヤムシールがギリィの胴体を両断した。

「あ、が……！」

「貴様、〝ガーゴイル〟─！」

　胴体を両断されたギリィはしかし、空から落ちてくることもなく、両断された部分から血の一滴が流れることもなかった。

　胴体の断面は、白いぼんやりとした魔マカナが完全に覆おおい隠している。シャドウフィールドは魔法使いではないが、それでも胴体の断面から垣かい間ま見みえる莫ばく大だいな魔力マナを感じ取ることができた。

「何だ……!?」

　〝ガーゴイル〟もこれには戸惑ったようで、曲刀シヤムシールを構えつつ、さらに追い討ちをかけるべきかどうか、考えあぐねているようだった。

　─殺してやる。お前なんかいらない！

　呆ぼう然ぜんと見開かれていたギリィの瞳に輝きが戻り、ハッキリと〝ガーゴイル〟を捕捉した。

「……！」

　〝ガーゴイル〟は踵かかとから魔マカナを逆噴射して逃げようとしたが、それより早く、ギリィの赤い蔦つたが彼の足を捕らえた。

「─消えろ」

〝ガーゴイル〟は空の遥か彼方かなたまで放り上げられ──さらに、凄すさまじい勢いで地面に叩きつけられた。

「……」

禍まがが々まがしい黒の男はぐしゃりと潰つぶれ、沈黙した。ギリィは尚も憎悪の感情を、周囲に叩きつける。

「覚えていろ……殺してやる！　お前ら、みんな殺してやる！」

だが、それでも胴体を両断されたという事が大きいのか、あるいは──自身の混乱を鎮しずめたいのか、ギリィは忌いまいましげに周囲を見回すと、右手を掲げて屍兵ゾンビたちに指示を出し、撤てつ退たいしていった。

シャドウフィールドは追わなかった。深追いするよりも、状況を見定める方が先決だと判断した。

「アーネストは俺が運ぶ！　カレンはジニーを！」

「わ、分かりました……！」

カレンは一瞬、苦痛に震えるアーネストを見た。涙を零こぼしそうになるのを我慢した。

そうして、ジニーを抱え上げた。血が止まっていることに安あん堵どしたが、その後……カレンは奇妙な違和感を抱いた。

だが、その理わ由けをゆっくりと考えている余裕はなく、怒ど濤とうの如く押し寄せる事態に対処するため、一旦その違和感を忘却の彼方かなたへと押しやった。

第五章

──一つの哀しくも、他愛たわいない物語を語らなければならない。

まずこれは一千年以上前の話である。従って、当時の憎むべき存在は全て死んでいる。そのほとんどは悲惨な死に方をしたが、中には幸福に生しよう涯がいを過ごした者もいるかもしれない。今となっては歴史の砂に埋もれ、正確な事は誰にも分からない。

ジニーと呼ばれている少女に、本来の名前などというものはない。

彼女はそもそも名付けられなかった。幼い頃、気付けば船に乗せられていた。足には鎖ががっちりと嵌はめ込まれている──櫂かいを漕げ、と言われて言われるがままに漕こいだ。疲れて休むと、鞭むちで打たれた。

一般に、ガレー船の漕ぎ手は奴ど隷れい商人によって集められる。もちろん、船としては体力のある成人男性が望ましい。否、普通は彼らしか望まない。



だがしかし、奴ど隷れい商人のほとんどはいい加減で、粗そ野やな存在だった。彼らは、船乗りが人数さえ揃っていればそれだけの報ほう酬しゅうをくれることに着目し、子供を大人と誤ご魔ま化かし、果ては死体すら酔っ払いだと言い張って人数を掻かき集めた。

彼女もその中の一人だった。

だが、引き返そうにも既に港を離れている。やむを得ず、彼は大人に混じって働かされることとなった。奴隷の人生には人生と呼べるものなど何もない。

飯を喰い、ひたすら櫂かいを漕こぐ──ただそれだけ、それだけなのだ。子供だから、女だから、などという理由は通じない。

死ぬまで漕ぎ続ける。死ぬまで、死ぬまで、死ぬまで──。ただ、少女は幸いなことに何も学ばなかった、故に自身の境遇を悲惨だと認識することもできなかった。獣のように生き続けるしかなかった。

ある日、少女は死んだ。

理由はない、単に疲れただけだろう。

少女は腐って病気を蔓延はびこらせるよりも先に鎖から外され、海に放り捨てられた。

彼女を悼いたむ者はいなかったし、彼女を弔とむらう者もいなかった。

強いて言うのならば、死んだ彼女を羨うらやむ者は何人かいたかもしれない──永えい劫ごうとも思える苦行から解放されたのだから。

これで、少女の物語は終わりだ。彼女が死んだことを心に刻む者はいなかった。否いな、そもそも彼女を認識していた者すらもロクに存在しなかった。海に放り投げた一時間後には、奴ど隷れい頭がしらは彼女の存在を忘れていた。

次は少年の物語だ。

暗い暗い海の底。少年が目覚めたのは少女が死ぬよりかなり以前の話だ。

自分は何な故ぜここにいるのか、少年はまずそれを考えた。教えてくれるものは、誰もいなかったし、学ぶものは何もなかった。

ただ、本能だけは存在した。周囲の魚を赤い蔦つたで絡め取り、喰らった。

本来の彼がどういう存在かを考えると、自立行動を執っているのは異常とも言えたが、彼は魚以外に見たことがなかったので、特にそれを不思議だとは感じなかった。

強いて言うのであれば、彼は自分では一度も見たことがないはずのものを記憶していることが不思議で仕方なかった。

例えばこんな暗い場所ではなく、光り輝く太陽と大地。そしてそこに暮らす、色々な容姿の人々。美しい草花、青い空、清涼な風──。

そういうものを、少年は知っていた。

それが、ここにないことも知っていた。

どれだけ手を伸ばそうとも、届かない。赤い蔦つたをいくら伸ばそうとも、自分自身がこの海域から出る術すべはない。

そして、『出るべきではない』と感じてもいた。自分はここに居たのだから、ここに居るべきだと思っていた。

それは単純に、外への恐怖があったのかもしれないが。

そうして何百年か過ぎた後に、少年は少女と出会った。少年の赤い蔦つたが、彼女の死体を拾い上げた。少年は勇気を出して、少女の魂に触れた。

──何かをしてあげたい。

少年はそう思った。亡くなった少女の境遇は悲惨極まりないもので、人生の楽しみを一切知らずに死んでいたのだ。

少年は楽しい、という感情をどうにか覚えていたので、それを彼女に分け与えたいと、そう願った。

──何でも、してあげたい。

少女の体は深海の水圧に耐えられない。だから、溜め込んだ膨ぼう大だいな魔マ力ナで、まず深海に世界を作った。

天に昇ろうとする魂を強引に少女の体へ閉じ込めた。肉体の保持に己の全てを注いだ。それでも腐敗は止められはしない。そして、少女も目覚めることはなかった。呆ぼう然ぜんと目を見開き、じっと虚空を見つめているだけだ。

少年は彼女に縋すがった。両手を握り締め、涙ながらに叫んだ。

──お願い。何か君に願いはないの？　何でもいいよ、何でも。僕のそばにいてくれるなら、何だってかなえてあげるから……！

　寂しかった。

　初めて一緒に居てくれる存在が、いつまでも自分を見てくれないのは本当に寂しかった。

　だから、祈った。

　誰に祈ればいいのか分からないままに祈った。そのあまりにも強い想いは、少女に一つの奇蹟をもたらした。彼女の周囲に居た者たちが、口々に吐き出したその無念の言葉。おぼろげながら、その言葉の意味だけは理解できた。なぜなら、自分もそうだったから。

　──〝助けて〟。

　その瞬間、少年と少女の間に契約が結ばれた。

　契約は少女に意思を与え、思考を与えた。

　だがしかし──ここで重要なことが一つ存在する。

　少年が契約を認識していなかった。

　少年は知らなかったのだ。自己の正体を知らず、契約も知らなかった。

　だから、単純に少年は喜んだ──祈りが通じたのだと。

　少女に乞こわれるまま、色々な話をした。少年は、自身の名前も伝えた。

　ギリィ・メディスレンテ──なぜか、この名前だけは深く深く刻み込まれていた。

「ねえ、ギリィ」

「うん」

「ここはまっくらね、あなたの姿があんまり見えないわ」

「僕の姿、変かもしれない」

「そうかな？　……そんなことないと思うよ、わたし」

「……分かった。じゃあ、灯りをつけるのが君の願いなんだね？」

「うん。……灯りをつけて、ギリィ！」

　灯りをつけた、照らし出された世界は広く、自由がそこにあった。

　そして、やはりギリィは自分と何ら変わりはない、そう思った。

　ギリィと少女は、他愛たわいもない遊びをした。少年が少女を追いかけ、少女が少年を追いかけた。

　ごろりと転がって、途方もなく広がる空を眺めていたりもした。

「ねえ、ギリィ。こういうの、幸せっていうのかしら？」

「……そうだね。たぶん、そういうんじゃないかって思う」

　はにかみながら、少女はギリィの手を握った。

「ありがとう、ギリィ」

「ううん、礼を言うのは……僕の方なんだよ」

　──ずっとずっと寂しかった。

　──ずっと一人じゃないかって思ってた。

「だから、一人じゃなくなってとても嬉うれしい」

「うん、ふふ。ねえ、ここは広いだけで少しさびしいかもしれないわ。わたしのお願い、聞いてくれる？」

「ああ、もちろんだよ！　僕はそのためにいるんだから！」

　少女の笑顔──少年はこの感覚がどういう風に言語として解釈されるのか、知らなかった。

　それは恋、と呼ばれるものに近かったが、恋と呼ぶにはあまりに幼く拙つたないものだった。

　家を作った。最初に作ったものは、腐臭を放つ魚の家で、あっさりと廃はい棄きした。

　ギリィは上う手まくいかないことに悩みながらも、どんどんと家を作り続けた。沈んでいる船を回収し、家に役立てたこともある。

　魚の骨を使わず、木と鉄で作った家が一番出来が良かったので、二人はそこに住むことにした。ベッドやテーブル、椅い子すといったものも作った──ベッドは何に使うか、よく分からなかった。長くて低い

テーブルにしか見えなかった。そして、ギリィたちは知らなかったが、ベッドにするべき柔らかい布はここにはなかったし、そもそも睡眠欲求が存在しなかった。

　日々何かを願い、日々何かを作った。

　時間という概がい念ねんが彼らにはない。

　目をつむり、三年過ごしたこともあった。目を開き、五十年過ごしたこともあった。

　ある時、少女は少年を追いかけながらふと思った。少し前も、まったく同じ事をしていた気がする、と。

　そして、少し下らないことを考えた。違う友達がいれば、違う楽しみがあるのではないだろうか。二人ではなく、もっと沢たく山さんの人数で遊べば、もっと楽しいのではないか？

「ねえ、ギリィ！」

　少女は願いを告げた。

　少し困った顔をしたあと、不安そうな少女にギリィ・メディスレンテは告げた。

「うん。君の願いを叶えるよ」

　少年は優しかったが、それを叶えるためには途方もない努力が必要だということも知っていた。さてさて、どうやって友達を作るべきだろうか──？

　百年後。

　そんな彼の元へ、ディルビック号がやってきた。

──〝王国キングダム〟神殿

　少年は、自分の傷を押さえながら考える。

　なぜ？　どうして？　自分はジニーを傷つけてしまったのだろう。なぜ自分は傷つけられたのだろう。

「僕は悪くない」

　呟く。周囲の屍兵ゾンビたちは、彼の言葉に耳を傾ける。だが、答えはしない。問われたことのみ答えられるだけの知能しか残っていないのだ。

「僕は悪くない！　僕は悪くない！　悪いのはあいつらじゃないか……！」

　目尻から熱い涙が流れた。自分にも涙が流れるものなのだと、生まれて初めて知った。

　少女が自分のそばにいない。

　長い間抱くことのなかった感情──寂しさがこみ上げる。そして、寂しさに加えてもう一つ、濁流のように押し寄せる感情があった。先ほど、彼らと相対しているときに剝むき出しになった感情。

「あいつらが………………憎いよ………………」

　血を吐くような恨うらみを篭こめて、ギリィは言葉を搾しぼり出した。

　そう、憎い、あまりにも憎たらしい。

　あんな連中の下に、いつまでも彼女を置いていけない。もし、彼女が自分のそばを離れるなどと言い出したらどうする？

　あの乗り物は水がないと動けないことは分かっている。だが、生き残った人間たちが何らかの手段ですぐそばの海に向かって突っ込んだら？

　……彼女は二度と戻ってこないだろう。

「嫌だ……そんなの、嫌だ……絶対嫌だ！」

　──友達はこれからだって何とかなる、何とかしてみせる。でも、逃げてしまう友達なんて駄目だ。そんな奴はちゃんと教えてあげなきゃ。ここがどんなに素晴らしい世界かって、教えてあげなきゃならないんだ！

　だがギリィは少女を傷つける訳にもいかなかった。どうすればいいのだろうと悩み、悶もだえ苦しみ、そうして、どうにか結論を出した。

　彼らを諦める──あんな奴ら、こちらから願い下げさ、とギリィは強がった。

「そうだ。その代わり、ここから出るのを手伝ってやってもいい。彼らが望むのならば、そうしてあげよう。ただし、彼女はこちらに帰してもらう」

　頷きつつ、彼は一人で呟いた。

「……おい、お前！」

　言われて、筋肉質の男が進み出た。少年は男の名前などこれっぽっちも知らなかったし関心もなかったが、彼はかつてバイル・ホロウスキーと呼ばれていた男だった。

「あの乗り物に行って、ええと何だっけ……そう、メッセージを伝えるんだ。彼女を僕のところに連れて来い。そうしたら、あの乗り物を海の中に入れてやる。もうお前たちは追わない。二度とここに来るなって伝えろ、いいな？」

「あア……分かリマシタ。ちャンと。伝えマス」

「うん。お前なら、向こうもちゃんと話くらいは聞いてくれそうだしね」

　ギリィは気軽にホロウスキーを送り出した。ホロウスキーを選出したのは、単純に彼があの乗り物の中にいた人間だからという理由だが、その行為が彼らにとってどういう意味を持つのか、ギリィには理解できていなかった。

―― 〝イエスラス〟司令室

　〝イエスラス〟の生き残りはわずか三名。医務室にいたサティ・モントルフとユウマ・ササキ、そしてどうにか抵抗していたルイス・マクレーンだった。

「他は皆殺しにされた。すまない、〝イエスラス〟の破壊を恐れて、外に迎げい撃げきに出させた私の判断ミスだった」

　肩を落とすルイスをカレンが慰めた。

「異常極まりない状況です。仕方ありません、艦長」

「ああ……」

　ルイスは沈ちん痛つうな表情を浮かべつつ、周囲の好奇の視線に怯えるジニーを見て言った。彼女の怪け我がはかすり傷程度、ということらしい。刺さった部分も、治療魔法ヒーリングを使うまでもなく問題はなかったようだ。

「彼女が、その……ギリィ、という少年の……」

「おともだち……」

「ええ。そういう事になります」

露ろ骨こつな舌打ちにカレンが振り返った。

卒倒していたジャン・ジャック・ルードが、不ふ貞て腐くされた表情でジニーを眺めていた。

「あの触手野郎の友達だって？　だったらアイツに言え！　俺たちをここから出せ、今すぐにってな！」

「……っ！」

アーネストはジャンを睨にらみつけた、既に彼は人虎ワータイガーから、普通の人間の姿を取り戻している。とはいえ、先ほどまで変身していたのだから彼のもう一つの姿を知らぬはずもなく、怯ひるんでしまった彼にカレンがつかつかと近寄って追い討ちを掛ける。

「あなた、大の大人が子供に八つ当たりしてみっともないと思わない訳!!」

「何だと、誰に口を利いていると思ってる！」

「□□ＮＣＩＡの上級工作員、偽名がジャン・ジャック・ルードという男にだが？」

コゼットが割って入った。冷たい視線に、ジャンは身を竦すくませる。

「あなた達の事情はもう分かっているわ。これね」

カレンが指差した先には、倒れ伏した〝ガーゴイル〟がいた。彼はもう、ピクリとも動いていない。

「……信じられないわ。あれほどの衝撃を受けて、鎧よろいに傷一つついてないなんて！　いえ、違うわ。さっきまでがらくたジヤンク同然だったのに！」

カレンの言葉に、サティが呟いた。

「〝自己修復防御リジエバリア〟」

「失礼、いま何ですって？」

サティはため息をついて、〝ガーゴイル〟の外殻にそっと手を触れた。

「この鎧には自己修復の魔法が付与されているの。ちょうど、ユニコーンが自分の傷を自分の角つので癒いやすように、この鎧は外界の魔力を適度に吸収し、瞬間的に修復するのよ。同時に、その修復能力

を生かして防御にも活用しているわ」

「あれほど拳を振るっても傷つかなかったのは、それか」

　シャドウフィールドが渋い表情で呟いた。

「一定以上の損傷を瞬間的に与えない限り、絶対に倒せない。そして、放置しておくと……やはり、復活するの。こんな風にね」

　先ほどまで壊れていたはずの部分は、既にほぼ修復が終わりかけていた。

「では、なぜソウヤーは死んだのかね？　鎧は無事だったのだろう？　確かにダメージは負ったかもしれないが、ササキによると外傷は微々たるものだそうだ」

　ルイスの問いかけ。生き残った一人であるササキが彼を検死した……外傷は上腕骨が一本折れた程度。打撃もかなりの部分が吸収されたらしく、内臓の損傷もほとんどなかった。

　ジャンは彼女が口を開こうとするのを目で制止したが、サティは首を横に振った。

「我々にも分かってはいません。この〝ガーゴイル〟には、我々にも知らされていない部分があまりに多すぎて……」

「だが、彼は現にこうして死んでいる」

「分かっています」

　ジャンが告げた。

「研究員の突然死や、書類の紛失事故もあったせいで、工作員スパイの存在が疑われていたのさ。それで実験は陸軍が行い、搬はん送そうは我々俺たちＮＣＩＡが極ごく秘ひ裏りに行うことになっていた」

「だけど信じられないわ。彼が他の皆を殺したなんて」

「真実だ。私はこの目ではっきりと目撃した。加えて、あの第一金庫室の死体を見てくれれば、絶対に分かる」

　サティはため息をついて、恨みがましい瞳でコゼットを見た。

「あなたがフォルテンマイヤー家に仕えてなければ、絶対に嘘うそだと思ったわ。そして、英雄であるシャドウフィールドのブレイド様がそれを保証しなければ」

シャドウフィールドは全員の視線が集まったのを感じて、肩を竦すくめた。

「これを嘘だと思いたいのなら、相手になるぜ」

そう言いつつ、肩に刻まれた聖せい紋もんを見せた。聖紋は青白い光を放ち、その存在をはっきりと示している。この聖紋に関しては、魔法で再現や捏ねつ造ぞうが可能なものではなかった。

「誰も嘘だとは言っていません」

「まあいい。ともかく、この〝ガーゴイル〟は危険すぎる。前部クレーン室に運ぼう。あそこなら空いているし、この司令室を通らない限りは盗み出すことも不可能だ」

ルイスの提案は、全員一致で賛同を見た。

「艦長が盗みたくなったら別だがね」

シャドウフィールドの言葉に、ルイスは「まさか」と肩を竦すくめた。

「さて、問題は――彼女だな」

ルイスの言葉に、ジニーがアーネストの太ふと股ももをしっかりと抱きしめた。

「大だい丈じよう夫ぶだよ、ジニー」

「君にギリィをもう一度説得して欲しいね、できれば」

ルイスの言葉に、少女の体が震えた。

「……」

「友達なのだろう？」

「……向こうは、わたしのこと嫌いになったのかも」

「そんな事はないさ、ジニー」

アーネストは頭をくしゃくしゃと撫でた。この娘を見ていると、どうにも父性愛がこみ上げて、自分ではどうにもならないほど甘くなってしまった。

「そうだな。とりあえず、全員十二時間の休息に入ろう。ギリィに交こう渉しように行くにせよ、ある程度の時間を置いておいた方がいい

だろう」

「同意する。あの〝ガーゴイル〟の一撃で、せっかくまとまりかけていた話がご破算になっていたからな」

「それから、ジニーの望みだが──」

　ジニーはルイスと目を合わせ、キッパリと言った。

「アーネストと、カレンと、いっしょにいたい。外の世界をみにいきたい」

「ギリィ君はどうするね？」

　シャドウフィールドが問い掛けると、ジニーはしょんぼりと肩を落とした。

「……わかんない。いっしょにいたいけど、でも……」

　泣き出しそうな顔で、肩を震わせた。

「でも、ギリィは……わたしがここにいたら、またお友達をつくりそうな気がする。ギリィと別れたくない、ずっといっしょにいたい、だけど……」

　伏せた顔を上げて、言った。

「やっぱり、だめだと思うの……」

　カレンは切なさを漂わせる表情で、しっかりとジニーを抱きしめた。

「歓迎するわ。……きっと、ギリィも分かってくれる」

　根拠のない、そして可能性の少ない慰なぐさめだった。

「うん……」

「では休きゆう憩けいだ。といっても人数は少ない、フィールタン兄弟は機関室に行ってくれ。アーネストとササキは医務室へ。ジニーとカレンは個室に戻りなさい。ジャン、サティ、お前らは前部クレーン室で留守番だ。コゼットは食堂へ。シャドウフィールド様。〝ガーゴイル〟を運ぶのを、どうか手伝って下さい」

　テキパキと指示を下すルイスに、シャドウフィールドが肩を竦すくめて言った。

「オーケー、艦長。しかしやれやれ、とんだ初うい陣じんになったな、君も」

「冒険には、失敗がつきものですよ。さあ、行動だ！」

◇

　医務室で、アーネストはササキに傷を診察されていた。

「大だい丈じよう夫ぶ。銃弾で撃たれた傷の割りにはどうしてどうして、ショボいものだ」

「現場復帰は可能ですか？」

「ちょうど十二時間後に許可をしてやるってとこだな。鎮ちん痛つう剤ざいを打っておこう」

　ササキはそう言いつつ、まじまじとアーネストの上半身を見つめた。

「なるほど、惚ほれ惚ぼれするような体格だと思ったが……ハーフ・ワータイガーだったとは。俺も長い人生、一度も出会ったことがない種族だぜ」

「……ワーウルフはともかく、タイガー、それもハーフとなると、俺以外に存在しているのかどうか……」

　アーネストはため息をつきつつ、そう言った。

「まったくだ。興きように乗った連中なら、お前さんをペットとして飼いたいっつー申し出もあるだろうさ」

　その言葉に、アーネストは身を竦すくませた。

「冗談だ、そう怖がるなって」

　ササキが笑いながら背中を叩いた。ほんの少し胸がむず痒がゆく、そして痛かった。

――　〝イエスラス〟個室

「すてき！　きれいな本！」

　ぱらぱらと本を逆さに捲めくるジニーに、カレンは苦笑した。

「ジニー。違うわよ、この本は……」

　ひょいと取り上げて逆さにすると、カレンはジニーに覆おおいかぶさった。

「こうして読むのよ」

「おおー……」

　その声に、カレンは思わず噴出しかけた。

「でも、この本は少し難しいわね。……参ったな、絵本を持ってくるなんて自体は想定していなかったわ」

「絵本？」

「絵が沢たく山さんある、ジニーみたいな子に向けた本よ」

「見たい！」

　ぐるりとジニーがカレンに体を向けた。

「ごめんね、ここには無いの。本当はもっとたくさん本を持っているんだけど」

　そう言いつつ、カレンはジニーの頬にそっと手を当てた。

「だから、お話ししましょうか、ジニー」

「うん！」

「素直でよろしい」

　カレンはそう言って、さて何の話をしようかと考えた。

「アーネストは、いまどこにいるの？」

「ああ、医務室に行ってるわよ。ちょっと怪け我がをしたみたい」

「アーネストは……その、おとらさんなの？」

　その奇妙な言葉遣いに、くすぐったくなるような微笑ほほえましさを感じながらカレンは答えた。

「半分だけ、おとらさんね。普段は、最初のアーネストみたいな……ええと、人間さんなのよ」

「どうして、おとらさんなの？」

「アーネストは、おとらさんになると人間さんより強くなれるの」

「……でも」

　カレンは俯うつむいた。

「アーネストは、おとらさんになったとき、少し哀しそうだったわ。どうして？」

「……」

　カレンは少し驚いて、ジニーの顔を見つめた。

　──よく見ているわね、この子。

　ご褒ほう美びという訳ではないのだが、ジニーの頭をくしゃりと撫なでた。

「あの姿を見て、あなたはどう思った？」

「……ちょっと、こわかった」

「そうね。気にすることないわ、ジニー。あの姿は誰だって怖いって感じるもの」

　──巨人ジヤイアント以外のあらゆる種族を凌りよう駕がする巨きよ軀く。一撃で対象の頭を消し飛ばす鋭い剃かみ刀そりのような爪。丸太のように太く、鋼はがねのように強きよう靭じんな腕。低く響くような咆ほう哮こうは、全ての生物の魂を凍こごえさせる。

　──黄金色の凶獣。それが、ワータイガーであるアーネストのもう一つの姿だ。

「でもね、ジニー。あの後、あなたはちゃんとアーネストのそばに来てくれたでしょう？　それは、アーネストにとってすごく嬉うれしいことだったのよ。えらいわ、ジニー」

「……へへー」

　向日葵ひまわりのような笑顔。

「それでね、アーネストはあの姿になるとすっごく強くなるの」

「すっごく？」

「ええ、すっごくよ。でも、あの姿になったアーネストは……そうね、ちょっと怒っちゃうの」

　ジニーに分かりやすいよう、彼女は凶暴性という言葉を怒りに入れ

替えた。

「おこるの？」

「ええ。怒るわ、怒って怒って怒って……みんなに怒っちゃうの。私や、ジニーにも怒っちゃうかもしれない。アーネストは、それが嫌なのね。彼は、ケンカとか嫌いだから」

「でも……だったら、どうしてアーネストはおとらさんになるの？」

　カレンは悲しそうに顔を伏せた。

「──ケンカが嫌いでも、怒るのが嫌いでも、戦わないといけないから」

　その理由はたった一つ、守るためだ。

「アーネストにとって、大事な人たちを守るために」

　自分で言うのは、どうにも気恥ずかしく……そして、陰いん鬱うつなものがあった。改めて突きつけられた事実に、カレンは自嘲的な笑みを浮かべて言った。

「戦いたくないのに、戦わせているの。私は、駄目な子なのよ」

「……カレン……」

「うー……この話、おしまいにしましょう。ごめんね、変な話しちゃって」

「ううん、いいよ」

「それよりジニー。ちょっと狭いけど、一緒に寝よっか」

「……ねる？」

「うん、ここで」

　ぽんぽんとベッドを叩くカレンに、ジニーは不思議そうに首を傾かしげる。

「寝るって、どういう事？」

「もしかして、眠ったことがないの……？」

　ジニーが頷いたのを見て、カレンの心が痛んだ。カレンは薄々だが感づき始めていた。彼女の存在は、きっと自然に造られたとても脆も

ろい宝石のようなもので、触れるだけで穢けがれ、壊れてしまうようなものなのだ。

　理屈は分からない、恐らく少女にも分からないのではないだろうか。彼女の正体を知っているのは恐らくギリィだけで、彼は決して明かさないとカレンは思った。

「じゃ、ここに来て」

「うん……」

　おっかなびっくり、ジニーがカレンに寄り添って寝転がる。

　ひょっとすると、意味のない行為かもしれなかった。彼女が眠ってくれるかどうか自信が無い。

　それでも、カレンはこうして寄り添う事に意味がないとは思えなかった。冷たい体を抱き寄せ、しっかりと自分の存在を感じさせる。

「あったかい」

　そう言ってくすくすと笑うジニーが、カレンは心底愛しかった。自分の職業が冒険家アドベンチユラーということをふと思い出し、苦笑する。

「ジニー……」

「うん」

「あなたは今回の冒険で見つけた、一番の宝物トレジヤーよ」

　カレンは目をつむった。瞬間、怒ど濤とうの如くこれまでの肉体的、精神的疲労が押し寄せて何も考えられなくなった。

「ジニー」

　深く穏やかな眠りについた。

　ジニーの手をしっかりと握りしめ、彼女の冷たい体を温めながら。

「……ただいま戻りまし……」

　アーネストは慌あわてて途中で口をつぐんだ。カレンがベッドに横たわり、体を丸めて眠っている。そして、そのかたわらにジニーがいた。

「ジニー？」

　そっと声を潜ひそめると、ジニーはこちらに首を向けた。

「アーネスト、よかった帰ってきたんだ！」

　ジニーが大声を出したので、慌あわてて口に指を一本当てて「静かに」と伝えた。

　幸い彼女にはそのジェスチャーが理解できたようで、こくりと頷いてから声を潜めた。

「おかえり、アーネスト」

「ジニー……その、眠れないのか？」

「……うん、目をつむってみたけど、何ともなかった」

　アーネストは「そうか」と呟いて、二人のそばに腰を下ろした。

「でも…………カレンってあったかいね」

「良かったな」

「うん。……とっても幸せ」

「まだまだ、こんなもんじゃないさ。世界には、きっと楽しいものが待ち受けているんだから」

「カレン、目をつむるまえに言ってた。あなたが、いちばんの〝トレジャー〟だって」

　その言葉に、アーネストはくすりと笑ってカレンの髪を撫なでた。

　彼女は深く寝入っている。今までの疲労が、どっと押し寄せたのだろう。

「ねえ、アーネスト。アーネストって、カレンはお友達なの？」

「……」

　首を横に振り、いとおしげに髪を梳といた。

「ある意味では友達より、深い関係かもしれない」

「……わかんない」

「いずれ、ジニーにも分かる日が来るさ。本当だ」

「カレン、アーネストはケンカがきらいだって言ってたけど……」

「そうだな……うん、正直に言って嫌いだ」

「じゃあ、どうして戦うの？」

「ケンカは嫌いだけど、それでも戦わなきゃいけないことがあるんだ、ジニー」

「……だいじな人をまもるため？」

　その言葉に、アーネストはしっかりと頷いた。

「ああ、そうだ。そうだよ……ジニー。俺はお嬢様を守りたいんだ。ケンカが嫌いだとか、そういうのを越えたところに、俺の意思があるんだよ」

　━だから、それに対して気を咎とがめる必要はこれっぽっちもない。

「でも、カレンはごめんなさいって思っているの。ケンカが嫌いなアーネストに、ケンカをさせてるからって」

「そうか……」

「アーネストもカレンも、なかよくしなきゃダメなんだから」

　その言葉に、思わず顔を緩ゆるませた。

「ああ、そうだな……」

「わたしも、またギリィと仲良くできるかしら？」

「今だって君とギリィは仲がいいと思う」

「ケンカ……あんまり、したことなかった。ギリィはいつも、わたしのワガママを聞いてくれてたから」

「大だい丈じよう夫ぶ。きっと、仲直りできるよ」

　根拠のない慰めに、心の中で自己を責める。ギリィの出方次第では、彼を敵に回さねばならないというのに。

　ジニーは……ギリィを敵に回すことを、分かっているのだろうか？　アーネストは少し悩み、それを口に出すのはやめた方がいいだろうと思った。

　ノックの音に立ち上がる。

「はい……？」

「私だ、アーネスト。カレンと一緒に来てくれんか？　すぐにだ」

　ルイスの声に、アーネストは扉を開いた。彼の表情は非常に渋く、何かが起きたことを示していた。

「お嬢様。申し訳ありませんが、緊急事態です」

　如い何かなる状況下であれ、カレンは即座に覚かく醒せいする。

「どうしたの、何かあった？」

「私も詳しくは……」

　頷いて、カレンは身を起こした。

　扉の前にいたルイスは「詳しいことは、見てもらった方がいい」と言った。

　カレンは振り返り、ベッドでシーツに包まるジニーに目線を送った。

「ジニー」

「うん……」

「君はここにいてくれ」

「すぐに戻ってくるから、ね？」

　カレンと、アーネストの言葉にジニーは浮かぬ顔のまま頷いた。

「うん……」

　そんな彼女を見て目を細めつつ、カレンたちは部屋を後にした。

　航海艦かん橋きょうに辿たどり着き、下を覗のぞき込むと、死んだバイル・ホロウスキーが〝イエスラス〟の外殻付近に立っていた。

「……」

　サティやジャンは短機関銃を構え、コゼットも戦輪チャクラムを握り締めながら慎重に様子を窺うかがっている。

　ホロウスキーは、真っ青な顔で腕の一部が抉えぐられていた。だが、そこから血は流れていない。既に固まり始めているのだろう。

　死んでいることは明めい瞭りようであり、だからこそ立ち続けているのは道理にそぐわない。

「屍兵ゾンビ……？」

「だろうな」

　だが、彼の他に姿は見えなかった。気配もない。

　そして、ホロウスキーはパクパクと口を開いていた。ここからでは、よく聞き取れないがどうやら先ほどからずっと何かを訴え続けているようだ。

「少し待ってろ」

　シャドウフィールドが、右手を少し動かした。たちまちホロウスキーの足下に黒い影が浮かび上がり、ホロウスキーの胴体を摑つかむと艦橋まで持ち上げた。黒い巨大な手が彼の胴体を摑んでいる様は、どうにも非現実的な光景だった。

「……じょを、かエせ」

「──何だって？　おい、ホロウスキー。もう一度初めから言え」

「かノジょヲ、かエセ。そおスレば、かエラセてやル」

　たどたどしい言葉遣いで、ホロウスキーは何度もその言葉を繰り返した。

　──彼女を返せ。そうすれば、帰らせてやる。

「チジょうニ、カえらせテヤる」

　繰り返されるその言葉に、一同は沈黙した。

「……私たちを帰らせたあと、あなたたちはどうする訳？」

「……」

「どうするのよ、答えなさい！　答えなさいよ！　まだ……まだ続ける気なの!?」

「よせ、カレン！」

　ホロウスキーに摑みかかろうとする彼女を、ルイスが押し留めた。

「……」

　そして、ホロウスキーはその言葉に対して何ら関心を持っていないようだった。ひたすらに、先ほどの言葉を繰り返す。

「こいつは蓄音機みたいなものだ。指定された言葉以外は、何も喋しやべれないのだろう」

　シャドウフィールドの言葉に、カレンは俯うつむいて沈黙した。

「ギリィの言いたいことは理解した。こちら側から言うと、ジニーは人質という訳か」

「いい交換条件じゃねえか、ええ？」

　ジャンの言葉に、カレンは首を横に振った。

「……そんなの、認めないわ。絶対に！」

　分かっている、というように頷きつつルイスは手に持っていた護身用の拳銃を握り締めた。

「いずれにせよ彼の役割は、もう終わりだろう。……これ以上、ギリィに彼を弄もてあそぶ権利はない」

　その言葉と同時に、ルイスは銃ひき爪がねを引いた。

　銃弾は過たず彼の脳を完全に破壊し、同時にシャドウフィールドの影腕が彼をゆっくりと下ろし、地面の中に沈みこませた。残された者は一様に沈黙。

　カレンですら認めている事実があった。

　ギリィの言葉に従わないということは、ホロウスキーと同じ運命を覚悟せねばならないということを。

「文句ないじゃないか、あの子供を引き渡せばそれで済む」

「ふざけないで、　ジニーをこの深海に置き去りにするつもり!?」

「置き去り？　元々、あいつはここに住んでいたんだぞ！　いいじゃないか、ハッキリ言って俺たちがあいつを保護する義務はこれっぽっちもないね！」

「あんた……ッ！」

「お、お嬢様！」

　アーネストが激げつ昂こうするカレンを押さえ込んだ。

　シャドウフィールドは肩を竦すくめて言った、苦渋に満ちた表情で告げる。

「悪いが、俺は意見を差し挟めない。俺が強権を発動したら、何もかもが一発で決まっちまうからな。……お前らの意見に、俺は従うことにする」

「英雄ならではの苦悩ですな」

　ルイスは同情しつつ、全員の顔を見回した。

「私は賛成する。重要なのは、我々が生きて帰ることだ。生き残れば、必ず救いに来ることもできるだろう」

　サティは手を掲げた。

「私も賛成します。……あの子供はイレギュラーです。救う必要性を見み出いだせません」

　フィールタン兄弟は顔を見合わせ、肩を竦すくめた。

「あたしたちは、断固として反対するわ」

　弟のベルベットの言葉に、ルイも頷いた。

「ジニー、かわいいもんねー」

「俺は……どちらでも正しい気がする。大英雄と同じだな、出た意見に従う」

　ササキはそう言って肩を竦すくめた。中立派ということだろう。

「アーネストは聞くまでもないな」

　ルイスの言葉に、アーネストは頷いた。彼女を裏切ることなど、アーネストには考えられないし、置き去りにする光景を考えたくもない。

「コゼット、君は？」

「……私は反対だ。彼女を置いていくのは、私自身の倫りん理りに反しますから。加えて、ギリィの言葉が正しければ、彼はまた友達を作り出そうとすると思います」

　その言葉に、部屋の気温が瞬間的に下がったように思えた。

「皆さん、彼が叫んだ言葉を覚えていますか？　ギリィはジニーの言

うことに耳を貸しませんでした。あれは恐らく、彼女の望みが完全に叶えられていないからです。彼はジニーが満足できるお友達を造るまで、決して自分の暴挙を止めようとはしないでしょう」

「……」

「そして──ジニーは、もう分かっています。あの方法で造られた友達は、決して友達ではないと。ですから……ギリィを止めなくては、話になりません。第二のディルビック号を作りかねません」

「だったら、あの子供に賛成する連中だけでどうにかしろよ。あのバケモノをよ！　死体をゾンビに改造して、ディルビック号を沈めることができるバケモノをな！」

「よさんか！」

　ルイスが厳しい瞳でジャンを睨にらみつけた。

「艦長として、それ以上の不ふ埒らちな言動は許さんぞ。賛成にせよ、反対にせよ、全員一致が最低条件だ」

「だけど、これでは埒らちが明あきません」

　カレンの言う通りだった。どちらも、断固として意見を変える気がないことは間違いない。

「……幸いギリィも今すぐ返答をしろ、という訳ではないようだ。しばらく考えさせてもらおうじゃないか。二時間後、もう一度話し合おう」

　ルイスの言葉で、全員が一旦解散することに同意した。ルイスとアーネストはジニーが待つ個室へ、コゼットとシャドウフィールドは食堂へ、ササキは医務室へ、フィールタン兄弟は機関室へと戻っていく。

　残ったのは賛成派であるジャン、サティ、ルイスの三人だ。

「くそ、まったく……！」

　苛いら立だちを隠せず、ジャンが近くの鋼板を蹴った。

「こちらの命が危ないんだぜ？　あんなガキなど知ったことか！」

「やめなさい、ジャン。ともかく、彼女にご執しゆう心しんのカレンはともかくフィールタン兄弟くらいは引き入れることが可能なはずよ」

「──無駄だな、彼らは意見を変えんよ」

　サティの言葉に、ルイスは首を横に振った。

「艦長、あんたにとってフィールタンとカレンは教え子だろう？　そのへんでどうにか……」

「なるようならば、さっき説得しているさ。三人とも頑がん固こさは折り紙つきだ。ササキくらいならば、何とかなりそうだがね」

「くそ！」

　ルイスは宙を見やりながら、しばし考えて結論を出した。

「搦からめ手ても説得も無駄だ。となると──」

「なると？」

「強硬手段しかないな。奪還、そして逃亡、交渉の後に帰還だ。その時、我々は何らかの攻撃を受ける可能性はあるが……それは、全面降伏することでどうにかなるはずだ」

「全面降伏、だって？」

「君、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟に戦いを挑む気かね？」

「……っ」

「心配するな。我々に落ち度はない。少女はこの世ならざる存在であり、ディルビック号沈没事件の間接的加害者であるんだぞ？　シャドウフィールドも手は出せないはずだ」

「そうか……」

「一時間後に作戦を決行しよう。ジャン、君は私と共に交こう渉しように向かう。サティ、君は残ってくれ。艦かん橋きよう昇しよう降こう筒づつを押さえてくれれば、追いかけられることはあるまい」

「私一人でですか!?」

「時間を稼かせぐだけだ。無理だと思ったら降伏してくれればいい」

「けれど……」

「この作戦の前提として必要なものが一つある、時間だ。対象を略取し、走って艦橋昇降筒から出てギリィの元まで辿たどり着く時間が絶対的に必要となる」

「私一人で、それほど時間が稼げるとは思えませんが」

　確かに、とルイスは頷く。

「〝眠りの砂〟を使う。蒔まかれた砂に触れたものを、強制的な睡眠状態に陥おとしいれるマジックアイテムだ」

「〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟に効果があると思いますか？」

「分からんが、やってみるしかない」

「了解。では一時間後に」

「サティ。お前は機関室と医務室、そして食堂を回ってくれ。三人で集まっていると、不信に思われかねん。説得のポーズを見せておいてこい」

「分かりました」

「待て待て、解毒剤を持っていけ。眠りの砂は甘い香りがする、嗅かいだらすぐに飲め」

　ルイスは丸がん薬やくを手渡して、サティを送り出した。

「俺は……」

「おいおい、前部クレーン室に〝ガーゴイル〟が安置されていることを忘れんでくれたまえ」

　そうだったな、と言って二人が立ち去ったことを確認すると、ルイスはパイプにガスライターで火をつけた。

「さてさて。どう転ぶかな。問題はギリィ……彼の説得如何いかんというところだな」

　脳が痺しびれるような快感と共に、煙が吐き出された。

　狭苦しい廊ろう下かをカレン・グリムスターが険しい顔で歩いていた。

　確かに、ルイスの言う事にも一いち分ぶの理りはある。自分たちが生き残る──それがもっとも大事なことであることはよく分かっている。

　改めてこの深海を訪れればいい、ルイスはそうも言った。ルイスやジャンのジニーを引き渡し、撤てつ退たいするという意見を全否定できないのは、やり直しがきく点だ。

　そう、改めてこの海域に戻ってくればいい。そして今度こそ、ジニーを奪還すればいい。

　ギリィがジニーを傷つける事はたぶん、ない。これに関してはカレンも確信を抱いている。

　だが──だが、それでいいのか。

　彼女を裏切ることを、己は許せるのか。許せるものか。

　外の世界を見たい、と望んだジニーを裏切るのか。

「……絶対に認めないわよ、たとえ〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟の命令が下ったとしてもね」

　アーネストは頷いた。ジニーをここに残らせるのはあまりに辛つらく、あまりに怖かった。

　彼女に孤独ではない楽しさを教えてしまった。その責任がアーネストにはある。カレンも、恐らくそれを分かっている。分かっているからこそ、頑がんとして撥はねつけているのだ。

「ジニー、戻ったわよ」

　そう言いつつ、個室の扉を開いた。両足を抱えたまま、ベッドに座るジニーがそこにいた。

「どうしたの？　ジニー」

「……」

　蹲うずくまり、一言も返さないジニーにカレンが優しく声をかけた。

「ねえ、ジニー。気分でも悪いの？」

「ギリィのこと、考えていたの……」

　その言葉に、カレンとアーネストがはっとして体を硬直させた。

「わたし、今までずっとギリィにお願いしてたわ。あれがほしい、これがほしい、なになにをしてくれって……」

「……うん、それで？」

「でも。わたしはギリィに何にもしてあげられなかったなって。ひどいよね、それって。一番だいじな、だいすきなお友達なのに……」

「ギリィに……会いたい？」

　ジニーは小さく頷いた。

「でも。きっと会っちゃいけない、会っちゃいけないの。会ったら、きっとまたわたしの願いをかなえようとするから……会っちゃいけないの……」

「…………そう」

　苦しそうに薄い胸を手で押さえて呟く。

「いたい……胸がぎゅっとして、すごく、いたい……」

　カレンがその手を握り、彼女の背中を摩こすった。心の痛みが、少しでも緩かん和わできるようにと。

「ジャン」

「何ですか、艦長？」

「この〝ガーゴイル〟だが……結局、実用レベルには適していないのかね？」

「原因不明の死亡が解決できれば、一気に実用レベルに到達できるかもしれませんが……」

　不審そうに眉まゆを顰ひそめるジャンに、ルイスはなるほどと頷きつつ〝ガーゴイル〟に手を当てた。

「……これを製造したのは、確か陸軍だったね？　テストに参加したのも、その陸軍が選抜した者か？」

「はい、そうです。そうですが……これ以上は国家機密だ。たとえあなたといえども、明かす理由はない」

「では、その陸軍の選抜メンバーと結果を教えてくれ」

　ルイスの声に、一瞬ジャンは脳が痺しびれるのを感じた。

（そんな事を答えられる訳がない）

「ええと……クーリー・マーシャル……十一分二十三秒後に死亡……ジョバンニ・バット……六分十八秒で死亡……」

（おい、何を考えているんだ俺は!?　答えるな、答えるな！）

　喉のどが異常に渇かわき、体は動けなくなった、目玉をぎょろぎょろと動かせるだけだ。

　だが、ジャンはそのままテストに参加したメンバーの名前をことごとく伝え続けた。

「ふむ。……そして、三十分以上の着装に成功したという男は、一体何者かね？」

「ア……アア……」

　抵抗するように舌を噛かもうとするジャンだが、満身の力を篭こめようともその歯が舌を食いちぎることはなく、震えながら舌をしまいこみ、口を開いた。

「答えろ」

「……アーリマン・クロケット」

　その名前を聞いた瞬間、ルイス・マクレーンの頭に『なるほど』という言葉が浮かんだ。同時に、ここまで〝ガーゴイル〟の的確な情報が伝わってきたことに納得もした。

「貴様……なぜ、どうして……何をやって……!?」

　ジャンの呪うような言葉に、ルイスは肩を竦すくめた。

「うん？　ああ、答えは簡単だ。一か月ほど前……つまり訓練中のことだが、君たちの食事に蟲ワームを混ぜておいた」

「蟲ワーム……？」

「正確にはブシトリモビルスという名の回虫でね。君の胃壁を通り抜けて血管を昇り、脳の中に入り込む。そしてこの虫は私の意思を君の脳に伝えるという訳だ。つまり――」

　そう言いつつ、ルイスがジャンに手を差し出した。まるでキャンディーをねだる子供のように、手のひらを開けている。

「お手」

　ジャンの右腕が、本人の意思に逆らってルイスの手に載せられる。

「面白いだろう？」

　まったくもって面白くない、とジャンはかすかに思った。もっとも、それよりはこれから先の己の運命を思って恐怖する方が遥はるか

に大きかったが。

「さて、と。そろそろ一時間が経つ。ジャン、お前は〝ガーゴイル〟を着て出撃準備だ」

「……！」

　──何てことだ、畜生！　この鎧を着せるつもりだったのか！

「〝ガーゴイル〟の解放キーワードはもちろん知っているな？　そら、やれよ！」

　ジャンは全身全霊で逆らおうとした。唇から血が滲にじみ出るのは、歯で噛かんでいるからだ。だが、いかなる苦痛をもってしても、脳に湧いた蟲ワームの支配から逃のがれることはできない。

「お、おお……おおお……！」

「黙って着てくれ」

　そう言いながら、ルイスは革袋を取り出して、紐ひもを緩ゆるめた。中には黄金色の砂がきらきらと輝いている。

「さてと、では疲れている皆を休ませてやる、か……」

　その言葉からは、些いささかの躊ちゅう躇ちょも窺うかがえなかった。ジャンは思った、この男はもっとずっと邪悪なことを考えている気がする、と。

　だが、ジャン・ジャック・ルードとしての思考もそこまでだった。

　のろのろと〝ガーゴイル〟の装着を始めた彼の瞳に、人間らしい光はとうに失われていた。

「ねえ、カレン」

「うん、どうしたの？」

「それ、何飲んでるの？」

「ああ、これ？　紅茶っていうの……飲んでみる？」

　こくりと頷いたジニーに、カレンは金属製のカップを差し出した。揺れた際に火傷やけどしないよう、かなり温ぬるめに淹いれているので彼女の舌でも大だい丈じよう夫ぶだろう。

「いいにおい…………」

　味を確かめるために、ちろりと舌を出した。舐なめた途端に、ぱっと表情が輝く。

「おいしい？」

「よく分からないけど……なんか、いい」

「そういう時は、甘くて美お味いしいって言うの」

「うん。あまくて、おいしい」

「あ、そっか。ジニーにはミルクと、それからもっと砂糖が欲しいところね」

「取ってきましょう」

　アーネストが立ち上がった。

「そうね。ついでだから、私にもおかわりちょうだいな」

「はい」

　アーネストは個室を出ると、食堂へ向かった。

　食堂へと近づく内、アーネストは甘い香りが漂っていることに気付いた。嗅いだ当初は何かの香料かと思ったが、近づくに連れてどうもそれとは別種のものに思えてきた。

　わずかに嫌な予感──嗅ぐのを止めて、ハンカチで口を塞ふさぐ。

「……コゼット？」

　食堂に辿たどり着いて、予感が的中したことに愕がく然ぜんとする。コゼットが倒れている。うつぶせで倒れ、そばには鍋とコップが転がっている。

「……！」

　慌あわてて駆け寄り、コゼットを抱き起こす。

「しっかり……！」

　首筋に手を当て、それが正しく定期的に脈打っているのを感じ取って安あん堵どしたが、どちらにせよ異常な事態であることにかわりはない。

「コゼット！」

……わずかに、自身も気が遠くなった。最初は彼女の異変に対する衝撃からか、と思ったがすぐにそれとは異なるものであることを理解した。

甘い香り。

凄すさまじく、甘い香り。

人を夢見心地にさせる香りだ。

慌あわてて呼吸を停止させて、コゼットを揺さぶる。彼女がわずかに目を開けた。

「……」

「コゼット……！」

苦く悶もんした表情で目を開け、どうにか言葉を搾しぼり出した。

「……ルイス、だ……！」

その言葉の意味するところを理解したアーネストは、立ち上がって慌てて走り出す。

だが、足が鎖を繋つながれたように重い。眠い、というよりはむしろ全身が痺しびれている。

「う、く……！」

息苦しいが、呼吸をするわけにはいかない。先ほど嗅かいだ香りが原因であることは明らかだ。呼吸もロクにできないまま、走り続ける。

「お嬢様！」

個室に辿たどり着く、最後に残った気力でどうにかそう叫んだ。だが、個室で見たのは倒れ伏したカレンと──。

「すれ違いか、やれやれ」

ジニーを抱えたルイスだった。

「はなして……はなしてよばかぁっ！」

「ジニー！」

「やれやれ──解げせんな。この子供は君が命を懸かけるべき宝物トレ

ジヤーではないというのに」

　ため息をつきつつ、ルイスがアーネストに拳銃を突きつけた。八年の間、一度たりとも見たことのない、酷こく薄はくな表情だった。

　彼がこんな顔を持っていると、アーネストは初めて知った。

「やめ、ろ……」

「それは私の台詞せりふだ。それ以上動くことはない、呼吸すれば楽になれるさ。私に撃たせるな。こういうのはどうにも苦手でね」

「やめろと、言っている……！」

　叫んで飛び掛かろうとするアーネストをルイスは退屈そうに見やり、

「言うことを聞きたまえ」

　そう言った。

　言われた瞬間、脳内で蟲が暴れ狂った。

　脳を絞しぼるような途方もない頭痛──〝従え〟と言われている。囁ささやかれている。

「ぎ、ぐ……！」

　睨にらむ。殺意を抱く。そうしないと、眼前の男にはいつくばってしまいそうだった。

　ルイスは肩を竦すくめた。彼の殺意など、涼しい風のようにしか感じていない。

　銃口が心臓に密着する。

「我慢強いね、君は」

　銃ひき爪がねを引いた、心臓に直撃した銃弾が絶大なる力をもって弱ったアーネストを床に叩きつける。

「これでお別れかもしれんな、アーネスト。正直、私もこういうのは嫌いなんだ。つまり何だ、一か八かのギャンブルでね。私もそれなりに鉄てつ火か場ばを潜くぐり抜けなきゃならないってことさ。何しろ、英雄と明確に敵対するのだからね」

　──何を言っているのか、さっぱり分からない。

　アーネストは苦く悶もんしつつ、そんな事をぼんやりと考えた。

「しかし……もし私が死んだら。君が生き残るよう祈っているよ」

　ますます意味不明な発言だった。

　だが、アーネスト・ヒギンズは眠かった。



　酷ひどく眠かった。体が痺しびれるくらいに、心臓の痛みも忘れるくらいに。

　そして、睡すい魔まの波はやがてアーネストに全てを忘ぼう却きやくさせた。

「行くぞ、ジャン──いや、〝ガーゴイル〟君」

　〝ガーゴイル〟と呼ばれたジャンはゆっくりと頷いた。仮面に覆おおわれて見えないが、既に双そう眸ぼうは虚うつろで、最も早はや、彼が人ならざる者であることは明確な事実だった。ルイスは暴れるジニーを彼に手渡し、まだ甘い香りが残る廊ろう下かをゆったりと進んでいく。

　昇しよう降こう筒づつに行くと、既にサティが待機していた。だが、ルイスの後を追う〝ガーゴイル〟を見て驚きよう愕がくに目を見開く。

「ジャン、貴方あなた──」

「これくらいの用心はせんと、ギリィに会えぬよ」

　そうキッパリと言って、サティを退ける。

「サティ。いいか、全力で守れ。分かったな？」

　ビクリとサティの体が震え、瞳から光が消え失せた。

「……はい、分かりました」

　その言葉に、サティの意思は介かい在ざいしていなかった。

　ルイス・マクレーンがマグダラに与えられた力──〝蟲ワーム〟はジャンや既に死んだマイケルだけでなく、サティや他の乗組員にも入り込んでいた。

　しかしルイスが自身の体内で培ばい養ようできた蟲ワームの数はわずかに八匹、乗組員の数にはとても足りなかった。悩んだ末、ルイスはＮＣＩＡの軍人たちを中心に蟲ワームをばら蒔まいた。マイケルがあの時殺したのは、全て蟲ワームが入っていないメンバーだった。

　カレンたち教え子には基本的に、問題視していなかった──ただし、アーネストは除いた。

　アーネストだけは例外だ。危険極まりない存在だ。だから、念のために蟲ワームを入れておいた。

だが教え子はともかくとして、教官を対象から外していたのはまったくもって誤った判断だった──ルイスは酷く悔やんだ。あんな手の届く場所に憎むべき仇きゆう敵てき〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟が存在したとは、迂う闊かつにも程がある。

艦かん橋きように出ると、〝ガーゴイル〟と共にルイスは走り出した。魔法で強化した脚力でも、全力の〝ガーゴイル〟には及ばないため、彼には力をセーブしてもらっている。

「カレン！　カレンッ！」

ジニーが騒がしかったが、これはむしろ好都合だった。彼女の悲鳴を聞けば、ギリィはこちらに憎悪を剝むき出すだろうが、決して屍兵ゾンビを襲い掛からせたりなどしないはずだ。

軍人たちに蟲ワームを植え付けたのは、結果としては失敗だったかもしれない──ルイスはそんなことを考えた。カレンたち教え子はどうとでもなる、だが軍人たちは〝ガーゴイル〟奪取のために抑えておかなければならない存在だと認識していたのが間違いだった。

──それともあるいは、教師としての情が残っていたのだろうか。

「フン、馬鹿な……」

いっそのこと、取って返して皆殺しにするべきか。そうも思ったが、すぐにその下らない考えを捨てた。それは、自分に情が存在すると認めたくないが故ゆえの行動だ。

どちらにせよ、交こう渉しようが上う手まくいけば彼らは〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟も含めて全員が死ぬ。

交渉が上手くいかず、力押しで物事を進めなくてはならなくなったとしても、負けなければそれで済む話だ。

交渉が上手くいかず、負けてしまえば──。

「負ければ、ただ此こ処こで朽くち果てるだけ」

それだけの事、それだけの事なのだ。

聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいに所属するルイス・マクレーンにとって、自己の死は救いである。ただし、それは全力を尽くした末での死だ。

怠たい惰だな死を不死の王ノーライフキングは決して許さない。故にルイスは全力を尽くす、まさに死ぬ気で彼に奉仕する。

目的は三つ。

〝ガーゴイル〟を手に入れる。

そして、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟を殺害する──残念ながら、直接的な行動は失敗に終わってしまったが。

そして──もう一つ。

ルイスは全てが上手くいけば、自身の手柄は世界に散らばるあらゆる同志を凌りよう駕がするに足るものだということを確信して、我知らず笑みを浮かべた。

シャドウフィールドは痺しびれる足に愛用の登山ナイフを突き刺した。立ち上がり、フィールタン兄弟の頬を叩く。

「起きろ……おい、起きろ！」

だが、兄弟は完全に沈黙。目をつむり、ぐったりとその身を横たえている。

「くそ……」

意識は未だ混こん濁だくしている。複雑に絡まったエンジンパイプの奥に逃げ込まなかったら、殺されていたかもしれない。まさか、向こうがここまで直接的な行動に出るとは思わなかった！

しかもＮＣＩＡを導いていたのはルイス・マクレーンだった。あの慎重な男が、これほど大胆な行動に出るなどシャドウフィールドにとっては意外すぎた。

意識がまた薄れる──人一倍この手の毒物には耐性がある己に対して、これほどの威力を有するならば、他の者は抵抗もできないかもしれない。

エンジンの起動チェック中だったことを思い出した──傍にあるパイプは、かなりの蒸気を発している。思い切って、それを素手で掴つかんだ。

「ぐ、ぬ……！」

その瞬間、気の遠くなるほどの激痛が全身に襲い掛かった。麻ま痺ひの心ここ地ちよさなど、吹き飛ぶほどの痛みに歯を食い縛しばる。

ハンカチで口を押さえつつ、歩き出す。

少し迷った末、自分のようにある程度の意識が残っている者を探す

ことにした。医務室に行く──ユウマ・ササキが倒れていた。フィールタン兄弟と同じく、完全に昏こん倒とうしている。

　食堂にはコゼットが倒れていた。わずかに痙けい攣れんしている、水を飲ませると虚うつろながら目を開いた。

「……ミスター……ご無事、ですか……」

「ああ、心配すんじゃねぇ。無事だよ」

「よかっ、た……。アーネストと、カレンの元へ……いき、ましょう……」

「しばらくじっとしていろ」

　コゼットはいいえ、と首を横に振って立ち上がった。よろよろとしつつも、その瞳には固い決意が秘められている。

「──分かった、先に行く」

　シャドウフィールドは歩き出した。コゼットは一歩歩き出して、よろめき倒れかかった。派手な音と共にテーブルに置いてあったコップが落下する──だが、シャドウフィールドはまったくそれに頓とん着ちゃくしない。

　コゼットは戦輪チヤクラムを召喚すると、それで躊躇ためらいなく自身の左腕を斬りつけた。鮮烈な痛みが、意識をわずかながら聡そう明めいにしてくれた。

　彼女は一歩を踏み出す、今度はよろけたりなどしなかった。

　アーネストは深海に漂っていた。濃緑色の海が視界を覆おおい尽くしている。あまりに重くて手足を動かすこともできない。ぼんやりとした意識で、自分がゆっくりと沈んでいることに気付いた。

　それはいけない、と思いつつ抵抗する気力がなかった。

　手を伸ばす──あるはずのない救いを探そうとする。カレンやジニーのことを考える、両足を力強く掻かき出す。

　届かない、届かない自分にふつふつと怒りが湧いてくる。

　アーネストを現世に立ち戻らせたのは、カレンやジニーに対する想いではなかった。もっと強い、狂うほどの想いが彼の頭に叩きこまれたのだ。

眼前に薄ぼんやりと広がる男の顔。憎悪と怒りで一気に脳が覚かく醒せいする。拳を握り締める。

咆ほう哮こうする。気付けば鉛なまりのように重かった両手は凄すさまじい勢いで海を掻かいていた。

海が割れる、眼前の景色が移り変わる。ニヤリと嗤わらうシャドウフィールド。

憎たらしい、と思った。

殺したい、と思った。

殺してやる、と思った。

だが、シャドウフィールドの醒さめた声が殺意を消した。

「──起きたか、アーネスト。ジニーが攫さらわれた、おい、聞こえているか、おい！」

「……！」

そうだ、ジニーだ！

跳ね起きる、慌あわてて周囲を見回してコゼットが自身の主を介かい抱ほうしている。カレンはまだ目覚めないようだ──自分と違って、あの香りをより強烈に嗅いだのかもしれない。

「お嬢様！」

「大だい丈じよう夫ぶ、アーネスト。カレン様はもうすぐ目を覚ますと思います」

「アーネスト、モタモタするな。……行くぞ、ジニーを奪い返しに行く」

その言葉に、全身の力が沸きあがるのを感じた──怒りと決意で震えた。心も、そして体も。

胸に喰らった銃弾の痛み？　そんなもの、憤ふん怒ぬが掻かき消してしまった。

ルイス・マクレーン、あの男は自分を殺そうとした。

あの男はただ、ジニーを連れて行っただけではない。その先に何かを企たくらんでいる。

　おぞましい何か──この八年間に培つちかった全てを裏切るものを。

　止めなくてはならない。

　先を行こうとするシャドウフィールドについていくために、一歩足を踏み出したとき、背後から苦しそうな声が聞こえた。

「アーネスト……待って……アーネスト……！」

　慌あわてて振り返る。カレンがよろよろとこちらに手を差し出していた。

「お嬢様！」

　カレンに待て、と言われれば待つ。アーネストは直ちに彼女のそばまで寄って跪ひざまずいた。

「封印を……解くわ。もう一度。だから、お願い、ジニーを……救って」

　カレンの指先が震えながら、アーネストの額に当てられる。

「はい……！」

「〝無む垢くと経験の詩うたよ、赤々と…………燃えよ〟」

「〝我は虎なりベスター〟──！」

　背中が隆起する。猛たけ々だけしい〝虎〟が蘇よみがえる。全身を黄金の体毛が覆おおっていく。

　咆ほう哮こう。

　走り出す、シャドウフィールドは既に昇しよう降こう筒づつに到着している。銃声が鳴り響く、二人ともにまったく頓とん着ちやくせず、凄すさまじい勢いで梯はし子ごを昇る。

　途中でこちらを迎げい撃げきしようとしていたサティを二撃で黙らせる。

　一撃で彼女の武器を破壊し二撃で黙らせた。殺してはいないので問題ないと結論付ける。

　彼女に何かを問い掛ける必要はなかった。彼女はこちらに向けて銃を撃ってきた。それだけで理由は充分だった。

　二人は無言で、昇降筒から艦かん橋きようへと出た。

「……暗いな」

「ええ」

　あれほど明るかった空が、今は暗雲立ちこめる空のようにおどろおどろしいものへと変わっていた。

　この世界にも、とうとう夜が訪れたらしい。

　気が滅め入いるような暗い夜が。

第六章

　ギリィは屍兵ゾンビの中でも出来損ないのものを、二、三体選出して改造を行っていた。背中の赤い蔦つたが彼らを切断し、接着し、融ゆう合ごうし、修復し、ときに何かを加えていく。

　それは単なる骨、臓器の類たぐいであったが、彼の気分次第で脳天に大だい腿たい骨こつを削って角つのにしたものを接続したりもした。

　ギリィはそれがおぞましい悪徳の行為であるとは欠片かけらも感じてはいない。

　彼はただ単に、同じような体格、同じような顔立ちの者だけではつまらないと感じただけなのだ。リザードマンとエルフ、そしてハーピィをぐちゃぐちゃに融合した一体は、動作面では単純な行為しかできない面白みのないものだったが、視覚面ではギリィの好奇心を満足するに足るものだった。

　──これを見れば、彼女も喜ぶかもしれない。

　彼はジニー以外に比較する存在対象がない。それ故ゆえに、自分自身の異常性や残ざん酷こくさにも全く気付いていないのだ。

「……誰かきた！」

　ギリィは人の気配を感じて、慌あわてて〝神殿〟を飛び出した。

　──人の気配……複数だ、しかも一人は異常に速い。もう一人は……もう一人は、いや、一人じゃない！

「──誰だ！」

　叫びながら、背中の赤い蔦を攻撃態勢に構えた。

　最初に現れたのは、自分に一撃を与えた忌いま々いましい黒い塊だった。

「お前は……！」

「彼は無害です。どうか手をお引き下さい、ギリィ様」

「……？」

　黒騎士──〝ガーゴイル〟は沈黙を守る。彼はルイスの命令に従うだけだ、彼が命じない限り、殺されても抵抗はしない。

「お約束通り、彼女を連れてきました」

　ルイスは慎重に──間違っても彼女をジニーなどと呼ばないようにした。

「……っ！」

「はなしてよ……ばかぁっ、ばかぁっ！」

「おい、放せよ！」

「そうはいきません。ご安心を、彼女を傷つける気は毛頭ありません」

「……っ」

　赤い蔦つたを伸ばそうとするギリィの前に、〝ガーゴイル〟が立ちはだかった。

「まあ、お待ちください。ギリィ様。差し出がましいことですが、あなたは──あなたは、ご自分の正体を知りたいとは思いませんか？」

　ルイスは穏やかに、言葉の刃やいばをギリィの胸に突きたてた。

「あ──僕、の？」

「……ギリィの……？」

　呆ぼう然ぜんとする二人。ジニーは暴れるのをやめて、自分を抱え上げるルイスの顔をまじまじと見つめている。

　ルイスは笑みを崩さず、もう一度念を押すように告げた。

「あなたがどこで生まれどこで育ち、そして何故ここにいるのか──それをお教えしようと言うのです」

「嘘うそだ！」

「なぜ？」

「僕が分からないものを、お前が分かるはずないだろうが！」

「分かるのですよ、ギリィ様。何故なら、私は貴方と同じ存在を知っている」

「え───？」

　その言葉は、ギリィの心を高ぶらせた。もし彼に心臓があれば、

きっと高鳴っていたことだろう。

「その上で、私を殺したいというのであれば。お好きにどうぞ。ただし、私のようなものはこれから先、同じだけの年月を経ても、決して現れることはないでしょう。二千年では足りませんね、三千年でしょうか？　さあ、どうなさいます？」

「……」

「見つかったとしても、次は私のように教えるかどうか分かりません」

「僕と……同じ、存在……」

「はい。……どうなさいますか？」

　返答する代わりに、ギリィは赤い蔦を突きつけるのを止めた。

　満足げに笑みを浮かべ、ルイスは語り出す。

「ギリィ様は〝不死の王ノーライフキング〟の伝説をご存知でしょうか？」

「ノー……ライフ、キング？」

「我々の世界に二千年前から存在する伝説です。世界中で知らない者はおりません」

「……僕は知らない」

「……」

　ジニーもまた、そんなルイスの話に引き込まれていく。

　ギリィの正体。

　ジニーも知りたかった。だが──ギリィの正体を知ることが、必然自分の正体も知ることとなるのが、少し怖かった。

　ルイスは語った。

　二千年前の世界──ゴルトロックに堕おちてきた神を。

　彼らに対抗すべく集められた英雄を。

　二者の激闘と──その結末を。

　しかしジニーには、ルイスの語り口調は英雄ではなく堕ちた神に感

情を入れ込んでいるように思えた。

「そして、英雄は今でもなお語り継がれ──不死の王ノーライフキングもまた、語り継がれている訳です」

「それがどうかしたのか？　……下らない、単なるお話じゃないか」

「いいえ、英雄の末まつ裔えいは未だ生きており、不死の王ノーライフキングもまた、別の形で生きております」

　ルイスはすっと、ギリィを指差して告げた。

「不死の王ノーライフキングの体は、粉々に散らばり、どこへともなく消失してしまいました。体のあらゆる部分があらゆる場所に──ですね。さて、本題はここからです」

「堕ちた神の体は、それでもなお生きていました。自己の生を求め、他者の死を求め、その為に生き延びる術を身につけました」

「生き延びる──術？」

「欠片かけらはそれぞれが独立した意思を持ち始めました。たとえば指の部分は生き延びるために、人と契約して武器となる道を選んだのです。我々はそれを──〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟と呼んでいます」

「朽ち果てし神のエメス……戦器トラブラム？」

「そうです。大抵の欠片パーツは武器となる道を選びました。魂を搾さく取しゅするために、もっとも効率の良い手段がそれだったからです。彼らはそれぞれが不死の王ノーライフキングとして復活する日のために、我々人の魂を喰らい続けるのです」

「……僕、は……ああ、そんな、まさか、僕は！」

「改めまして──下の名前はメディスレンテでしたかな。良いお名前です、その名前だけは刻み込まれていたのですね」

　ジニーは一人の笑顔が、これほど不気味だと思ったことはなかった。

「〝臓腑要塞ギリイ・メデイスレンテ〟。あなたは偉大なる不死の王ノーライフキングの臓はらわたです」

　ギリィが跪ひざまずいた。

　今の言葉が彼が封じ込めていた記憶を刺激し、解放する。

　ギリィがえずき、胃の中のものを吐き出そうとした。

　今の言葉を嘘うそだとは欠片かけらも思えなかった。

　今の言葉は全て真実だ。まやかしではない。彼は洗いざらい、真実をぶちまけたのだ。

　ギリィは悲痛のあまり、絶叫した。

「ギリィ……ギリィ、ギリィ……しっかりして、しっかりして！」

「……くそ、くそ、くそ、くそ！　チクショウ！」

「ギリィ様」

　声を掛けてきたルイスを、ギリィが殺意を篭こめて睨にらんだ。

「黙れ、うるさい、僕を一人にしてくれ！」

　だが、ルイスは平然と応じた。

「よろしいのですかな？」

「え――？」

「私が去ると、あなたは今度こそ一人ですぞ？」

「え、あ、う、それ、は……」

　穏やかな顔で、ルイスはその右手を優しくギリィに差し出した。その笑顔は、かつてカレンやアーネストたちに見せていた顔だ。

　彼の笑顔は、人を信じさせてしまう。

「私と共に参りませんか？　この王国を失うのは惜しいかもしれません。ですが……地上で次の王国を作ればいいじゃありませんか」

「次の……王国？」

「そうです、あなたの次の王国ネクストキングダムです。この海底と違って、地上にはあらゆる材料が存在しますよ？」

「僕の……王国」

「望めば、あなたと同じお仲間を紹介しますよ。〝惨劇の水晶体レビスタル・シエラ〟〝愚弄の脳髄グロノズ〟〝清冽な肋骨ゲール・フエツト〟……皆、あなたと同じように己の意思を持っています。そし

て、あなたと同じ出しゆつ自じなのです。そう、紛れもなくあなたと全く同じ、『仲間』なのです。もちろん……それぞれ、姿形はいささか異なりますがね」

「……僕の、仲間……」

　立ち上がる。瞳の絶望は急速に消えていった。

　未だ手は差し出されたままだ。

　ギリィはおろおろと戸惑いつつ、ルイスを見つめて言った。

「僕は……僕に、何をしろって言うんだ、君は？」

「私と共に来ていただきたいだけです」

「君の仲間と？」

「いいえ。私と、この〝ガーゴイル〟だけです」

　穏やかな笑顔のまま、ルイスは〝イエスラス〟の乗組員を切り捨てた。

「ここは海底１０００ｍモール──本来なら、私のような生物が住めるはずもない世界です。しかし、ギリィ様。あなたはこの世界を作り上げた。人が人のまま住めるこの世界を！　あなたの力は、神に限りなく近いのです！　お分かりですか、ギリィ様！」

「え、あ、僕は、そんな……」

「あなたはご自分の力が分かっておられない、あなたの『仲間』ですら、これほどの力を持ってはいないでしょう！」

「……僕は……ただ……ただ……」

「さあ、私と契約を結びましょう。そして、私たちをこのまま地上まで導いて下さい！」

「……」

　差し出された手を、おずおずとギリィが握ろうとしたその時──。

「まって、ギリィ！」

「……っ！」

　ジニーの叫びに、ギリィがビクリと体を震わせて動きを止めた。

　同時に、ルイスは不快そうに彼女を見やる。

「な……なに？」

　おずおずと尋ねるギリィに、ジニーは言った。

「ギリィ、その人についてっちゃダメ！　ぜったいダメ！　その人、わるいひとだよ！」

「……戯ざれ言ごとに耳を貸されますな、ギリィ様」

「……なんだよ、悪い人って……僕を、僕の仲間と会わせてくれるって言っているんだぞ！」

「ダメだよ！　ギリィ……ここにいる人たちを、地上でも作るつもり!?」

「それ、は……」

「それはダメだよ！　みんなが悲しむことなの！　よくないことなの！」

「……う、く……」

「だからっ……！」

「嘘うそだ！　嘘だ、嘘だ、嘘だ！　君は……自分だけが外の世界に行きたいから、そんな事を言っているんだ！」

「ちがう！　わたしは、できるならギリィといっしょにいきたいって思ってるもん！　でも、お友達はもう作らないで！　お願いだから……！」

「彼女は嘘を言っています、ギリィ様。彼女は、あなたのような仲間が存在しないから、ちょっと妬ねたんでいるのです」

「ルイスの言う通りだ！　僕に仲間を作らせたくないんだろう？　自分は……自分は名前なんて貰ったくせに！」

「それは……！」

「地上へ行きたいくせに！　一人で、僕を置いていこうとしたくせにっ！」

「ちがう……ちがうの……！」

　ルイスは舌打ちした。さらに言葉を巡らせようと身を屈かがめたと

き、ギリィがビクリと宙空を見た。

「誰か――来る。二人、やってくる！」

「……早いな、もう来たか……！」

　ルイスは苦い表情を一瞬浮かべたが、ギリィに向き直る際にはいかにもパニックに陥おちいったような表情に切り替えた。

「大変です、ギリィ様！　今からやってくる二人は、私を殺しに来たのです！　私が殺されれば、今までの話は全部無かったことになります！」

「え……そんな、そんな！」

「さらに、彼らは―彼女を取り戻しに来たのです。あなたを置き去りにするために！　あなたを一人にするために！」

「ど、どうしよう……!?」

「何を仰おつしやいますか。あなたにはあなたに従う部下がいるではありませんか！　彼らを使うのです！　彼らを使い、やっつけるのです！」

「ダメ、やめてギリィ！」

　だがギリィはジニーをきっと睨にらんでから、宙に浮いて遥か向こうを指差し、叫んだ。

「……みんな、みんな、助けて！　今から来る奴らをやっつけろ！　手加減するな！」

「そうです、ギリィ様！　それでこそ！」

「仲間になんかしてやるもんか！　そいつらは単なる材料にしてやる！」

「ギリィ、やめてえええええええええええっ！」

　ジニーの絶叫は届かず。

　周囲にいた二千人以上の屍兵ゾンビと、二頭のメガロドンが、直ちに進行を開始した。

「〝ガーゴイル〟！」

　ルイスの呼びかけに、〝ガーゴイル〟が反応した。

「お前も手伝え！　二人──恐らく、シャドウフィールドとアーネストだ。どちらも殺せ！」

「□□」

　軽く頷き、〝ガーゴイル〟は飛ひ翔しようした。

「これで安心……かな？」

　ギリィの自信なげな問いかけにルイスは頷きかけたが、ここは一つ不安がらせるのもよかろうと深刻な表情を崩くずさずに言った。

「いいえ。残念ですが、安心してはなりません。いまやってくる二人の内、一人はかつてあなたを倒した男の末裔です」

「え──何、だって？」

「〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟ブレイド・レイ・シャドウフィールド！　忌いま々いましい、我らの仇きゆう敵てきです！　絶対に！　確実に！　殺さなければなりません、ギリィ様！」

　遥はるか遠くで、凄すさまじい咆ほう哮こうが轟とどろいた。

　それは雷らい獣じゆうの闘志溢あふれる咆哮であり、全ての生物を畏い怖ふさせるものだった。

「やはり貴様か、アーネスト……！」

　ルイスは気付いてしまった。

　〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟シャドウフィールドよりもむしろ、アーネストのイレギュラー的なパワーをより恐れている自分に──。

◇

　迫り来るは二千を越える屍兵ゾンビたち。

　立ち向かうはただ二騎。

　一騎は大英雄シャドウフィールドの力を継ぎし最強の冒険家アドベンチユラー。

　彼は影を手た繰ぐる者。

　影は彼の分身であり、実在する力である。

「シャ━ハッ！」

　影が波打ち、拳を作った。

「間が悪いな、ギリィ。夜は俺の領域だ！」

　影が鞭むちのようにしなり、津波のように荒れ狂う。シャドウフィールド自身の拳もまた、一撃必殺。彼の拳を喰らった屍兵ゾンビは残らず肉の屑スクラツプにされた。

　咆哮と同時に白銀が煌きらめく。

　白銀は剣ではなく、アーネストの持つ巨大な爪クロウだ━。次々と屍兵ゾンビたちが彼の周囲に纏まとわりつく。ギリィの持つ殺意に煽あおられて、ひたすら殺しにかかってくる。

　だが、その全てをそよ風とばかりに彼の巨きよ軀くは受け流す。

　ミノタウロスやリザードマンといった、一般に力が強いと言われている種族ですら、彼の爪の前ではそれこそゴミ屑くずのように成り果てた。

　突進する、前方にいる百人以上の屍兵ゾンビが次々と吹っ飛んでいく。もし、彼らが何らかの形で恐怖を感じ取り、本能で動く術すべを未だ持っていたとしたら、彼らは迷わず逃げたであろう。

　二騎は百人をなぎ倒し、百人を吹き飛ばし、百人を刻み、雲くも霞かすみの如く押し寄せる彼らを片かたっ端ぱしから蹴散らしていく。

　だが、何しろ数が多い。たった二騎に対して二千人以上の屍兵ゾンビが襲い掛かる。彼らは人のように死を恐れず、苦痛を恐れない。

「アーネストッ！　お前より、俺の方がこの手の戦いには慣れている。先に━行け！」

「了解！」

　アーネストは走り━跳躍した。

　着地するなり前に進む、再び跳躍。負けじと跳躍する屍兵ゾンビはいかに足あ掻がこうとも彼の上を翔とぶことはない。

　駆ける、次第に屍しかばねたちの数が減っていく。彼の疾走は一層速度を増し、ついには屍の包囲網を突破せんとしたが、その直後に黒い塊がアーネストの懐ふところへと飛び込んできた。

「ぐっ……！」

　爪クロウと曲刀シヤムシールが激突し、火花が色鮮やかに散った。

　ほぼ同時に着地する二体。

「〝ガーゴイル〟……！」

「……」

　〝ガーゴイル〟は無言で、曲刀シヤムシールを構えた。殺意をもってこちらに立ち向かっているのは明確だ。

　前回戦ったときと、当然中身の人間は異なるが、だからといって油断はできないしするつもりもない。そもそも、一度は敗北を喫きつした身なのだから。

　じりじりと互いに近づいていく──数少ない屍兵ゾンビが群がろうとする──と、突然〝ガーゴイル〟はそばにいた死体を摑つかんで、こちらに投げ飛ばした。

　アーネストは投げ飛ばされた死体を弾いて、冷静に対処する。だが、その次に突撃してきたのは死体ではなく、〝ガーゴイル〟だった。

　虎もまた突進する、地上でぶつかり合う。互いの背中の筋肉がおこり、凄すさまじい暴力が吹き荒れた。

　シャドウフィールドは先ほどの宣言通り屍兵ゾンビの群れの中へと踏み止とどまった。周囲を十ひと重え二ふ十た重えと取り囲む屍たちを片っ端から吹き飛ばしていく。疲れを知らない蒸気機関車のように、彼の放つ拳は一切の衰えを見せなかった。

「……肉体的にはともかく、精神的には疲れるもんだな」

　シャドウフィールドは独りごちた。

　だがしかし、とすぐに思い直す。

「けどまあ、我らの始祖は十万人を相手に走り抜けたんだからな。たかだか二千人ちょっとくらい屁でもねぇ！」

　吹き飛ぶ、吹き飛ぶ、吹き飛んでいく。

　影が交こう錯さくし、影が貫き、実像が抉えぐり、影が守り、実像が蹴り飛ばす。

　数をおおよそ半分に減らしたところで、一旦息をつこうとしたシャドウフィールドに最悪の新あら手てがやってきた。

「……やれやれ、そう言えばこいつらもお仲間だったな」

　空を翔ぶ超々クラスの巨きよ大だい鮫ざめ、メガロドン。

　地を駆ける超々クラスの巨大鮫、メガロドン。

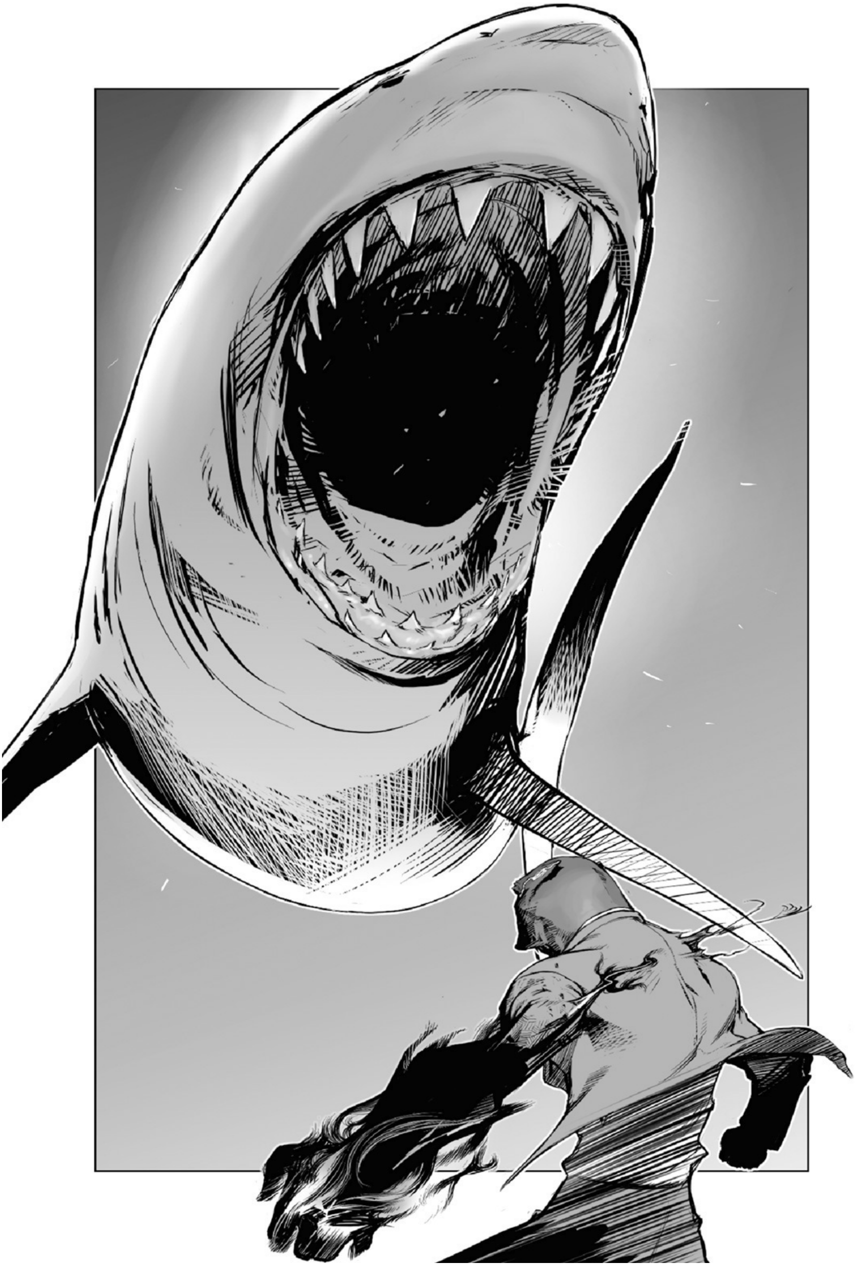
　共に、シャドウフィールドを一ひと呑のみして余りある存在である。

「だがまあ──」

　蹴りで吹き飛ばした屍しかばねがメガロドンの口の中に入り込んだ。スナック菓子を嚙かみ千切る程度の気安さで、屍はバラバラに分断された。

「やってやれないことは……ねぇっ」

　空を待っていたメガロドンが急速に下降した、狙いは言うまでもない。



腕が影を纏まとう、巨人の如き拳の一撃がメガロドンを殴なぐり飛ばす。

だが、わずかにタイミングが遅れて地を這はうメガロドンが躍りかかった──巨大な口がシャドウフィールドを飲み込む直前に影が彼の胴体を摑つかみ、投げ飛ばすように振り回した。

わずかに牙きばが掠かすめた──刃のような切り口。

着地して、嘆息する。

「──やってやれないことはないと思うが」

これは骨が折れそうだ──と、シャドウフィールドは考えた。

先ほど一撃を加えたメガロドンに、損傷はあまりない。外部からの衝撃には、とことんまで頑がん丈じように出来ている。

「となると、やはり狙いは──」

あの巨大な頭に納まった小さい脳のう味み噌そだ、とシャドウフィールドは見当をつけた。だが、そのためにはあの必殺の口から逃れつつも、一撃を食らわせねばならない。巨人腕では大おお雑ざつ把ぱすぎる、抉えぐることができるかどうか微妙なラインだった。

となれば、シャドウフィールドとして取るべき手段は一つしかない。

「ったく…………二十年やってるけど、未だにこれ苦手なんだよなァ、俺」

そう言いつつ、シャドウフィールドは意識を四つに切り離した。その意識一つ一つを影に投げ与えた──あくまで感覚の問題だが──そして、その度に影がシャドウフィールドと同じ形を伴って現れた。

〝影領〟──元はニヴェンに住む人間の技だったというこれは、影を己の分身として生み出し、同時に意識を分離してその人物が如き動きを行わせる、という〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟にしか為しえない荒あら業わざである。

始祖であるジル・レ・シャドウフィールドは最高で十三体の影を産み、操ったという。

ブレイド・レイ・シャドウフィールドは限界で七体──それも、術が終わったあとで確実に安全に休めるという保証がなくては不可能だ。

「まったく。……もう少し真ま面じ目めに修行しておくべきだったか」

　嘆息と同時に、影が薄ぼんやりと実体化した。同時に、意識が拡散する感覚をシャドウフィールドは抱く。

　拡散、分離、それぞれの実在化──シャドウフィールドは四人に増ぞう殖しよくした。

　空を舞うメガロドン。跳躍するシャドウフィールド。

　大きく開いた口にシャドウフィールドは至し極ごくあっさりと飲み込まれる。

　だが、メガロドンは飲み込んだものを嚙かみ砕くより先に、上うわ顎あご奥の部分に凄すさまじい違和感を抱いた。

　苦痛はない、それ故ゆえに暴れて彼を吐き出そうという考えがちらりとも思い浮かばなかった。

　シャドウフィールドの〝影〟は寸すん分ぶん違たがわず、喉こう内ないを貫いて脳を抉り出した。だが、次の瞬間、地を這はうメガロドンはシャドウフィールドに襲い掛かってきた──それもまっしぐらに本体へ！

「……っ！」

　なぜ一番奥にいた自分をまっしぐらに狙おうとしたのか、シャドウフィールドは一瞬の驚きよう愕がくの後、それに気付いた。

（血だ……！）

　メガロドンに限らず、鮫さめ類は数百ｍモール、ことによると数ｋｍセツト離れた場所の獲物の血を探知できるという。

　この場合、メガロドンは視覚によって獲物が四つに分裂したことを理解し、即座に血が出ているもののみが本物だと論理的に結論付けたのだ。

　影の拳で殴なぐり飛ばすが、メガロドンは気にも留めず魔マカナを秘めた鼻先でシャドウフィールドを突きあげた。

「が、あ……！」

　この世界にやってきて、初めてシャドウフィールドは苦く悶もんの叫びをあげた。軽く数十ｍモールは吹き飛び、屍兵ゾンビを巻き込みながら地面に転がる。

立ち上がろうとしたが、メガロドンの鼻の凄すさまじい硬度のせいか体が麻ま痺ひしており、わずか数秒だがまったく動けなかった。

その数秒を、メガロドンは見逃さない。凄まじい速度でシャドウフィールドの元に到達し、鯨くじらを呑み込めそうなほどの巨大な顎あぎとが開く。シャドウフィールドは影の腕を作り出して先ほどと同じように逃れようとする――だが彼は見切ってしまった、それでは間に合わないと。

メガロドンの黒い、無感情な瞳がわずかに残ざん酷こく味みを帯びたようにシャドウフィールドには思えた。そして――。

数時間前、〝ガーゴイル〟と相対したときは時間を稼かせぐことでカレンとジニーの安全を確保することがアーネストの役割だった。

そして、今回は立ち塞がる彼をいかに迅速に排除するかが問題だった。

よって、彼は極めて単純な破壊力を持つパワーに頼ることにした。

爪クロウを納める、あの鎧よろい相手では鋼はがねを切り裂く程度ではとても無駄だ。

内部の衝撃を一定以上にさせるための一撃必殺の技。

思い切り、弓を引くように拳を引いた。ぐいぐいと筋組織が引っ張られていく心ここ地ちよい感触。

技術を凌りよう駕がする純粋な暴力によって彼は〝ガーゴイル〟に立ち向かおうとしていた。

――自信を持て。

憤ふん怒ぬと決意を篭こめて、拳を作る。

〝ガーゴイル〟は曲刀シヤムシールを持って、こちらを斬きり伏せる手段に出たようだ。

アーネストは動かず、待ち構え続ける。

魔マ力ナを踵かかとから噴射して、凄すさまじい速度で疾走する〝ガーゴイル〟。

――我が拳は、銃弾bulletなり。

装そう塡てん完了、狙いを定めた、射しや程てい距離内に入り次第

の迎げい撃げき。

〝ガーゴイル〟が刀剣を振りかぶる、一撃で決着をつけようとする動きだった。

だが、それが振り下ろされるより遥はるかに早く、アーネストの拳が〝ガーゴイル〟を殴なぐり飛ばした。

魔法の緩かん和わも及ばぬ一撃──巨人の棍棒クラブを上回る衝撃を叩きこまれ、〝ガーゴイル〟の動きが停止した。

一度びくりと痙けい攣れんしたあと、〝ガーゴイル〟はゆっくりと地に伏した。

「……」

左手をそっと胸部に当てて、予あらかじめ知らされていたキーワードを告げた。

「〝朝焼けと共に梟ふくろうは飛び立つべし〟」

〝ガーゴイル〟が輝き、背部が開いたので中のジャン・ジャック・ルードを引きずり出す。彼は苦く悶もんの表情を浮かべつつ、死亡していた。

同情はしない。後悔もしない。ただ、一歩間違えていれば自分が彼の立場であったかもしれない。ルイス・マクレーンに師事していたカレンも含めてだ。

〝ガーゴイル〟をどうするべきか、とアーネストは考えてみたものの、いずれにせよ今の自分には必要がないものと判断せざるを得なかった、まさか持っていく訳にもいくまい。

その場から立ち去ろうとしたアーネストは、何気なくジャンの死体をもう一度見てぎょっとした。

──耳の付近で何かが蠢いている！

アーネストはもう一度、ジャンの死体のそばに屈かがみ込み、耳の穴からそれを取り出した。

虫だった。ミミズをさらに細くしたような感じの虫で、微かに赤い血が付着している。

ジャンの体内に入っていた寄生虫だろうか？　だが、耳の中から？　この海域の生物ではないことは確かだ。

一瞬、ギリィが使う赤い蔦つたとの関連性も疑ってみたが、すぐにありえないということに気付く。ジャンが赤い蔦に絡まったという記憶はない。

蠢うごめく虫に嫌悪感を抱き、反射的に握り潰つぶす。その瞬間、ワータイガーであるアーネストには微かだが感じ取れた。

潰れた虫から魔マカナが漏れ出したことを。つまり、これは断じてただの寄生虫ではない。

──この寄生虫が……彼やマイケル・ソウヤーを操っていた？

虫によって人を操る、という話は古代の伝説にしばしば記録されている邪じゃ法ほうである。大抵は、虫が脳の中にいて、それが主の命令によって魔マカナを使って脳を操作するというものだ。

そう考えていく内にルイスがジニーをさらったとき、彼に逆らえなかった自分を思い出す。

「まさか……俺も、か？」

ありえない話ではない、とアーネストは思った。いくらでも自分に虫を忍ばせる機会はあったはずだ。潜水艦でも、その前からでも。

だが──どうすればいいのだろう、とアーネストは思った。自分の手で脳の中の虫を除去する自信はない。そんな魔法があるかどうかも分からないし、そもそも魔法使いがいなかった。

結局、彼にできることは覚悟するだけだった。ルイスがこちらに命令したとき、己の意思を脳に刻み込むしかない。魔法を伴った力ならば、時に強固な意思によって打ち砕けることがあるはずだ。

──ジニーが言っていたことが正しければ、もうそろそろ神殿に辿たどり着けるはずだ。

自身に銃口を突きつけたルイス、一片の情愛も存在しなかった酷こく薄はくな表情を思い出しつつ、アーネストは再び走り出した。

ようやく立ち上がれるようになったカレンは骨の仮面をつけたコゼットに抱えられ、一路ディルビック号へ向けてひた走っていた。

「それにしても──なぜディルビック号へ!?　寄り道というほどではありませんが、目的地ではありませんよ！」

「分かってる。でも、ちょっと確認しなきゃいけないことがあるの！　もし、それがあればずっと早く辿たどり着けるわ！」

「どういう事です⁉」

「ディルビック号の地下には、乗客の自動車が搭とう載さいされているはずなのよ！」

「あ――！」

「この状況下で、ジニーを奪だつ還かんするためにはそういう物が必要だわ、急いで！」

「委い細さい承しよう知ち！」

　コゼットはさらに速度を増した。歩きのときはあれほど時間が掛かった道のりが、既に終端に辿り着いていた。

「場所はどこでしょうか、カレン様」

　カレンはその言葉に、しばし目を閉じてディルビック号の地図を思い描いた。

「ええと、確か……確か、地下七階だったと思う。第一金庫室がある倉庫区間の一階上ね」

　ディルビック号に辿り着くと、早さつ速そく船底から階段を駆け昇り、地下七階の駐車場へと向かった。その頃には足も回復していたカレンはコゼットと手分けをして手頃な車を探し始めた。

「見つけました！　魔法付与エンチヤント済みの車体です」

「鍵かぎはある？」

「大だい丈じよう夫ぶです、ダッシュボードに予備の鍵が差し込んでありました」

「……って、オープンカー？　屋根くらい無いと危なくない？」

「いえ。これなら、自分が動きやすいのです」

「オーケー、分かったわ。私が運転する」

　カレンは車に乗り込み、コゼットは後部座席に座った。キーをひねり、エンジンが景気の良い音を立てて動き出したのを見計らい、ハンドルを切って方向を変更させる。

　コゼットは自動車搬はん出しゆつ用のエレベーターを見て、青ざめた。

「カレン様！　エレベーターが……エレベーターが動いていません！」

「分かってるわ」

　コゼットの悲痛な叫びに、カレンは知っているとばかりに頷いた。もとより、そんなエレベーターに期待はしていない。

　さらにハンドルを切った。コゼットの顔が、少し困ったようなものに変わる。

「……あの、ちょっと？　カレン様、申し訳ありませんがその……自動車の方向が間違っていませんか？　エレベーターに入れて、どうにかして動かすべきだと思うのですが」

「無理よ。電源、真っ二つにされた後尾の方にあるはずなんだもの。こちらで動かすのは相当な時間がかかるわ」

「はぁ……でも、やっぱりその、方向が間違ってるのでは？」

　コゼットは恐る恐るといった様子で前方を眺めた。向こうには広大な空間が広がっている。端たん的てきに述べると、真っ二つになったディルビック号の断面に車を向けていた。

「コゼット、私は冒険家アドベンチユラーよ」

「だからって、ここから翔とぶなんて無茶、は――――っ!?」

　カレンはアクセルを勢いよく踏み込んだ。タイヤが擦こすれて甲かん高だかい悲鳴をあげる。車が弾丸のように走り出す。

　コゼットが悲鳴をあげる。喋しやべると舌を噛かむわよ、と叫びながらカレンが限界までアクセルを踏みつつ、大いなる神エル・アギアスと祝福の精霊ジニーリツプに祈る。

　飛び出した。高さは約10mモール、車が急速に下降していく。

「ひっ……！」

　車体は魔法である程度緩かん和わされていたために、動作不能になるほどの損傷はなかったが、運転していたカレンとコゼットの首に凄すさまじい衝撃がかかった。

「いったぁっ……！」

「無茶苦茶です……」

「いいのよ、走れるんだから。行くわよ！」

　アクセルを踏み込み、ギアを切り替えてさらに速度を増した。時速１３０ｋｍセツトに到達、すぐに屍しかばねの群れに到達する。

「……これ、あの二人がやったの？」

「そのようですね」

　呆あきれたようにコゼットは言った。屍はそのことごとくが薙なぎ倒され、切り裂かれ、大地に臥ふしている。残っているのはせいぜいが百人程度、微々たるものだった。

　そのまま、屍の道を走り続ける。斃たおれた屍し体たいをタイヤで踏み潰つぶし、カレンは不快な感覚に顔をしかめていたが、ライトに照らされた前方に三人の屍兵ゾンビが立ちはだかっているのを確認して、慌あわてて叫んだ。

「コゼット！」

「はい！　奴隷のabd□□月qamar！」

　コゼットが立ち上がる。くるくると戦輪チヤクラムを腕で回し始めた。

　屍兵ゾンビは屍とは思えないほどの異常な跳躍で、カレンたちを乗せた自動車に襲い掛かる。

「六枚投擲スイツタ・アル・ラミ！」

　コゼットが六枚の戦輪チヤクラムを投とう擲てきする、宙空の屍兵ゾンビはたちまち四散した。

「大だい丈じよう夫ぶ!?」

「まだ来ます！　速度落として！　死体にタイヤの足を取られないように注意してください！」

　立て続けに五人以上を跳ね飛ばした。ヘッドライトに赤い血がべとりと付着する。

「──カレン様！　気をつけてください、空から死体が落ちてきます！」

　その言葉に、カレンは慌ててハンドルを切った。右に、左に、ジグザグと移動する。死体が雨のように、次々と落ちてきた。

「何、何、これ、何が起こってるの!?」

「……分かった、あそこです。前方二時方向！」

　コゼットの言葉に、カレンがそちらへと首を傾けた。小山のように屍兵ゾンビが群れを成しており、その中央で、死体を片かたっ端ぱしから吹き飛ばしていく黒の男がいる。

「あれは……ミスター！」

「シャドウフィールドね！」

　さすが偉大なる英雄──と、カレンは素直に賞賛したが、彼女はすぐに屍兵ゾンビに混じって戦いを挑む最強の捕食者プレデターの存在に気付いた。

「……メガロドン……！」

　シャドウフィールドと地を這はうメガロドンが、激戦を繰り広げていた。

　影の拳がメガロドンを殴なぐり飛ばした。だが巨きよ大だい鮫ざめはまったく怯ひるんだ様子もなく、魔マ力ナを秘めた鼻を叩きつけた。

「まずい……！」

　吹き飛ばされたシャドウフィールドが苦しげに呻うめく。体が動かないらしい。

　そんな彼を狙ってメガロドンが突とつ貫かんする。

「……！」

　カレンは迷わずアクセルを踏み込んだ。

　メガロドンが顎あぎとを開く。この車がビスケットに見えるほどの大きさに、カレンの心臓がせりあがりそうなほど緊張する。だが、シャドウフィールドを死なせる訳にはいかない。

　カレンは叫んだ。

「教官！」

　シャドウフィールドがこちらを向いて、あんぐりと口を開けていた。〝末裔たる者ミステイック・ワン〟を驚かせた、というおぼろげな喜びを抱いた。

　メガロドンは排気ガスの臭いにすぐに気付いたものの、その臭いは餌えさのそれではなかったために、黙殺していた。それよりも、今は眼前で血を流す餌が全てだった。それ以外のものなど、どうでも良かった。

　もし、メガロドンが生きていれば、それでも近づいてくるそれに注意を払っただろうが、ギリィによって脳を弄いじられた彼は、命令に従うことを最優先と考えていた。

「カレン様、摑つかまって！」

　コゼットが叫び、手を差し出したカレンと共に車を脱出する。

　致命的なミスだった。車両重量２０００ｋｇダイラツトの鉄の塊かたまりは、時速80ｋｍセツトの速度でメガロドンの体に直撃した。

　車はその衝撃で跳ね返り、宙をくるりと回転して逆さになったまま地面に激突した。

　メガロドンが戸惑ったその隙を突き、シャドウフィールドが立ち上がる。

　影の二体が手刀でメガロドンの両目を貫く。

　いかに苦痛を知らぬ屍兵ゾンビといえども視覚が喪失した瞬間は、さすがに暴れ悶もだえた。

　シャドウフィールドが飛ひ翔しようした。暴れて首を左右に振り回すメガロドンの頭に着地し、バランスを取りつつ、右拳を握り締める。

「終わりだ、顎野郎ジヨーズ！」

　メガロドンの脳を抉えぐった。本能もギリィから与えられた命令も、全て掻かき消える。

　鮫さめは沈黙した。

「ミスター！　大だい丈じよう夫ぶですか？」

「まあ何とかな。それより――あまり無茶をやるなよカレン、心臓に悪い」

「あら、ベイビーは卒業ですか？」

「いいや、今のは助けてもらった礼だ」

「分かりました、教官。それともシャドウフィールド？　ブレイド？　ホワイトビュー？　あるいは──ブルーシーかしら？」

　シャドウフィールドは肩を竦すくめて言った。

「好きに呼んでくれ。ま、強しいて言うなら今回はホワイトビューとしてやってきたんで、教官かホワイトビュー。どちらでも構わない」

「分かったわ。行きましょう、教官」

「ミスター、力をお貸し下さい。車をひっくり返したいので」

　コゼットの願いに、シャドウフィールドは頷いた。

「アーネストが先行している。途中で拾えたら幸運だな」

「幸運じゃなかったら？」

「ギリィに手荒い歓迎を受けているだろうな」

──〝王国キングダム〟神殿前

　──辿たどり着いた。

　ジニーが以前、〝神殿〟と呼んだものが、眼前に広がっている。なるほど彼女の言う通り、鉄と木で作り上げられた幾本もの巨大な柱を持つその建築物は、まさに〝神殿〟の名が相応ふさわしいように思えた。

「ジニー！」

　アーネストの叫びに、膝を突いていたジニーがこちらを振り返った。

「アーネスト！」

　だが、その瞳は哀しげな涙に濡れている。

　現状を把は握あくしようとする。ルイスがギリィと共に立っている。ギリィはルイスに心細そうな表情を向けている。

　ルイスが肩を竦めた。

「〝ガーゴイル〟では、ワータイガーたるお前を止められなかったか。……怪物め」

　最後の言葉は、心底忌いま々いましそうではあった。

アーネストは真っ直ぐルイスの目を見て頷き、ゆっくりとジニーに近づいていく。

驚いたことに、二人はそれを止めなかった。

「アーネスト……」

よたよたと立ち上がったジニーが、彼の足にぴったりと張り付く。

「何が……あった？」

ジニーは戸惑うように、首を横に振る。

「あの人が、ギリィに……〝契約〟しろっていってる……」

ルイスはギリィに囁ささやく。

それはまさしく、聖人を堕だ落らくさせる悪魔の囁きそのものだった。

「さあ、このままでは貴方あなたの求めるものは何もかも失われてしまいます」

「う―ああ―」

―嫌だ。そんなの嫌だ。絶対に嫌だ。

ギリィは痛烈にそう思った。ずっとずっと大切に、守り続けてきたものが何もかも崩ほう壊かいしてしまう。

〝王国〟が。

彼女が。

何もかも――。

だから、新しいものを手に入れなければ。

泣き濡れる少女をギリィは見つめた。

虎顔の男の脚にぴったりと張り付く少女を見つめた。

この時、たぶん、生まれて初めて。

ギリィは強い憎悪を少女に抱いた。

「――――する」

ギリィは呟いた。

ルイスが穏やかな笑顔で言った。

「もう一度、はっきりとお言いなさいませ。……全てに訣けつ別べつするために」

「――契約する！　僕は！　君と契約する！　契約する！　材料が欲しいんだ！　一人は嫌なんだ！　僕は……僕は、仲間が欲しいんだ！　新しい王国が欲しいんだ！」

「ギリィ……！」

「うるさい！　仲間のいる君なんかに分かってたまるか！」

「それでは、契約いたしましょう」

ルイスは穏やかな笑顔のまま、右手の人差し指と中指でそっとギリィの額に触れた。

――偉大なる不死の王ノーライフキングよ！　此こ処こに契約を果たすは、空に放たれた汝なんじが分身、即ち〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟なり！

――古いにしえの誓せい約やくにより、汝が体は我のものとなり、我は汝によって敵を打倒する！

――魂に刻もう。汝の名前を！

「我が名は――〝臓腑要塞ギリイ・メデイスレンテ〟！　我は数あま多たの生命を用いて屍しかばねの王国を作りし、偉大なる王キングなり！」

ギリィがどろりと溶けた――いや、ルイスの方が溶けたのか。

アーネストはギリィが〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟であることを知って、あまりの衝撃に自失しかけていた。

ギリィとルイスが融ゆう合ごうし、巨人のように膨ふくれ上がった。

背中には醜みにくく汚れたドラゴンの翼、腹には鮫さめのように巨大な口、リザードマンのようにざらついた皮膚、赤い蔦つたが、腹の中から獲物を求めるように出て、からかうようにこちらに向けて蠢うごめいた。

「ギリィ――」

　ジニーの呟きに、アーネストは頭にそっと手を載せて言った。

「あれはもう、ギリィじゃない」

　アーネストも執事という職業柄、〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟については、人並み以上の知識を備えている。

　これは、ルイス・マクレーンがギリィを装備した状態なのだ。

　装備したものを怪物へと変へん貌ぼうさせる──それが、ギリィという戦器の力だ。



　唾つばを呑のみ、どう対処すればいいかを考えるアーネストだったが、地面が突然激しく揺れだしたために、即座に思考を打ち切った。

「……アーネスト！　地面が、揺れてる！」

　ジニーの怯えた表情。慌あわててアーネストも周囲を見回す。

　地面が揺れているだけではない、この世界全体が鳴めい動どうしている。地震という可能性は即座に打ち消した。

　──新しい王国が欲しいんだ。

　ギリィは確かにそう言った。逆に言うと──もうこの王国は必要ない。

「ジニー！　逃げるぞ！」

　深海１０００ｍモールの世界は自分やジニーが生きていられる場所ではない。今すぐ逃げなければ！

「──逃のがさんぞ、アーネスト！　殺してやる！　ここで殺してやる！」

　腹の口から赤い蔦が勢いよく吐き出され、走ろうとしたアーネストの踵かかとに絡みついた。

「ぐっ……！」

　無様に転げた。赤い蔦を引き千切ろうと満身の力を篭こめるが、蔦は後から後から絡みつく。

「アーネスト、アーネスト！」

　ジニーが必死に自分を引っ張ってくれるが、赤い蔦が絡みついたアーネストの脚はピクリとも動かない。

「ジニー、先に逃げろ！　シャドウフィールドと合流すれば助かる……！」

「いや！　アーネストと一緒じゃないといやだ……！」

　そう言いつつ、赤い蔦を力ない腕で叩く。その間も、地面の揺れはますます激しくなる。

「アーネスト！　貴様を喰らってやる！　ワータイガーはどんな味が

するのか試したい！」

　覚悟を決めてジニーを逃がそうとしたとき、あまりにも場違いなクラクションが鳴り響いた。

「え……なに……？」

「アーネスト、少しでいい。その場で耐えろ！」

　コゼットの言葉と同時に、巨大な戦輪チヤクラムが凄すさまじい勢いで射しや出しゆつされ、脚に絡んだ赤い蔦を途中で断ち切った。

「アーネスト、大だい丈じよう夫ぶ!?　ジニーも！」

　カレンだ、カレンがボコボコの車を運転している。クラクションを鳴らしながら、ぐるりと車をＵターンさせ、停車した。

「カレン……！」

　ジニーが喜び、飛び跳ねた。シャドウフィールドが素早く着地し、ジニーを抱えた。

「行くぞ！」

「行かせるものか……！」

　ルイスがこちらに摑つかみかかろうとした瞬間、影の腕がぐるりと彼を押さえつけた。

「ぐ、貴き様さま……！」

　その隙にジニー、シャドウフィールド、そしてアーネストは車に飛び乗った。

　カレンがアクセルを目一杯踏み込んで走り出す。

　後方で、ルイスの恐ろしい咆ほう哮こうが聞こえた。

「ジニー、大だい丈じよう夫ぶ!?」

「うん、カレ──」

　抱きつこうとしたジニーを、シャドウフィールドが優しく制止した。

「悪いな、ジニー。ベイビーに抱きつくのは少しの間、待ってくれ」

「はーい」

「アーネスト、脚の怪け我がは大丈夫か？」

　コゼットの問いかけに頷きつつも、アーネストは考えていた。果たして、ルイスをこのまま放置しておいていいものか──。

　──車を破壊しろ！

「ぐっ……！」

　脳が凄すさまじい勢いで、アーネストの肉体に命令コマンドを繰り返す。苦く悶もんの呻うめきをあげるアーネストに、コゼットたちは慌あわてた。

「おい、どうした⁉」

「アーネスト？　ちょっと、どうしたの。しっかりして！」

　──車を破壊し、彼らを止めるのだ！

　理性はその命令が、この場に居る全ての死をもたらすことを主張する。さらに、この命令に抗あらがい続けるのは、到底無理な相談であることも。

　──アーネスト！　アーネスト・ヒギンズ！　どうした、早く破壊しろ！

「アーネスト！　アーネスト・ヒギンズ！　どうしたの、答えなさい！」

　カレンの声。

　心に響く鈴のような彼女の声が、一瞬命令を遮しゃ断だんさせた。

　その一瞬で、アーネストは一か八かの賭かけに出ざるを得ないと判断した。

「お嬢様！　私がルイスを食い止めます！　〝イエスラス〟には皆さんだけで！」

「え……？　ちょ、ちょっと待ちなさい！」

「いいえ、間に合いません！」

　アーネストは車を飛び降りた。幸運なことに、自分が望んだ場所に限りなく近かった。

　背後で車が止まる。

「アーネスト！」

　カレンの悲鳴のような声。

　振り返る。

　虎の顔だ。だが、断固たる決意をもって見返した。

「ルイスとギリィ、二人とは──私が決着をつけます」

「……」

「大だい丈じよう夫ぶです。必ず、必ず生きて戻るとお約束します」

　アーネストは意地を張っている訳ではないと、カレンは思った。

　まして怒り、憎悪、悲しみを抱いている訳でもない。

　彼は──決意していた。その目には澄み切った爽さわやかさすら在った。

「分かった。……あなたを信じてる」

「カレン様!?」

「いいの。……行くわよ！」

　アクセルを踏み込み、走り出した。遠くへ去る車を見ている内に、ルイスの命令が意味のないものへと風化していくのが分かる。

「……さて」

　ルイスは影の腕の拘こう束そくを引き千切り、こちらに向かっているだろう。

　このままではルイスに勝てない。

　だが。

　ルイスに勝つ可能性が、この世界には存在する──。

　猛たけり狂うルイスは、竜人ドラゴニュートの翼を広げ、飛ひ翔しようしていた。

　アーネストに車を破壊させる命令は失敗した。

　ルイスはしばし考えた末、ギリィという戦器を装備しているが故ゆえの弊へい害がいであろうと見当をつけた。

今、この間にもルイスとギリィの心は限りなく合ごう一いつしている。

ギリィは、アーネストが殺したいほど憎かった。

その憎悪は、アーネストにとって蟲ワームの命令に逆らわせるに足るものだったのだろう。

だが、今の実力ならば恐れることはない……とルイスは考えた。万が一のときは、〝イエスラス〟を破壊すればいい。

深海１０００ｍモールで人に生きる術すべはない。

〝臟腑要塞ギリイ・メデイスレンテ〟を装備した、ルイス・マクレーン以外は。

車が見えた。人の目では視認できないほどの暗闇だが、今の彼には関係ない。

どこもかしこも昼間のように見渡せる。

彼らは真っ直ぐ〝イエスラス〟に向かっている。さて、どうしたものか。

〝イエスラス〟に先回りするか？　それとも、あの車を破壊するべきか？

「さて、どちらがいいかな──」

その嘲ちよう笑しよう混じりの呟きを、

「いいや、三つ目の選択肢。──お前はここで殺される」

弾だん劾がいする者がいた。

「……っ！」

慌あわてて後退する。先ほどまで自分の体があった場所が、曲刀シャムシールで一いつ閃せんされる。

「お前、は……」

暗闇に溶け込みつつも、踵かかとから噴出する魔マカナによって微かに光る巨きよ軀く。

色鮮やか、威い風ふ堂どう々どうとしたたてがみ。

　その姿は、最も早はや、人の形を模しながら限りなく人から遠ざかった──機械の騎士ナイト。

「〝ガーゴイル〟……！」

「ルイス・マクレーン、そしてギリィ。お前はあの車にも、そして〝イエスラス〟にも辿たどり着けはしない。お前は、ここで朽くち果てる」

　すなわち、〝ガーゴイル〟の中にいるのは──。

「アーネスト・ヒギンズ……！」

　その言葉に応じるかのように、彼は曲刀シヤムシールを構えた。

　背部には三十九式ルベルチオン重機関銃。

　本気で、ルイスとギリィに戦いを挑むつもりのようだった。

「クッ……愚かな奴だ。その鎧よろいがあったとて、深海で生きられると思うのか？」

「実験段階では、深海における活動記録は５００ｍモールだそうです。だが、想定ではその三倍はいける、と──」

「な、に──？」

「深海、超々高度の空における兵器も兼ねているのです。たとえば、潜水艦を打ち破るためにな」

　ルイスの目には当然見えなかったが、アーネストが笑ったように思えた。

　それを感じ取ったギリィは、激怒した。

　激怒はルイスに伝達される。ルイスの口が開く、憎悪に顔が歪ゆがむ。

「貴様───殺してやる！」

「ええ、お相手いたします。ルイス・マクレーン！」

　まるで御お伽とぎ噺ばなしのように。

　〝黒騎士〟と〝キマイラ〟が激突した。

　車は時折ガタガタと痙けい攣れんを起こし、今にも部品を吐き

出しそうな有様だった。最初の飛び出しと、次のメガロドンへの激突のダブルダメージが、尾を引いているのだろう。

「まだよ……もう少し、お願い、もう少しだけもってね……！」

　音が鳴るたびに、停止するかもしれないという恐怖に震えながらカレンは必死にステアリングをする。

　だが、その一方で耳は後部のジニーが語っていることに集中していた。

「エメス……エメス・トラブラム!?　ギリィが、それだと言ってたの!?」

「うん……あの、ルイスって人はそういってた」

「まあ何つーか、なるほどねぇって感じか。こんな世界を作り出せるなんて、並大抵の力じゃない。英雄としての力か、あるいは──」

「悪魔の力か、ということですか。教官」

「その通り。……だがそうなると。アーネストでは絶望的だ。くそ、やっぱり俺が戻って……」

「させません、ミスター・ブレイド」

　車を出ようとしたシャドウフィールドの腕を、コゼットが押さえ込んだ。

「私の命令は、『あなたをお守りする』ことです。……あなたがここに残る以上、私も残らずを得ません」

「クソ！」

「それに──それに、私にはどうもアーネストには勝算があるように思えるのです」

「私もそう思うわ。アーネストはきっと帰ってくる。そう思わない、ジニー？」

「うん、思うっ」

「でしょ？」

　カレンは誇らしげにそう言った。既にガタガタと車が震える音も気にならなくなっている。

　ディルビック号もとうに通り過ぎ、〝イエスラス〟まではあと一歩というところだ。

　だが、それでも油断はできない。

　カレンはちらりと上空を見た。

「空が──今にも、落ちてきそうね」

　唾つばを呑のむ。深海１０００ｍモールの世界は今、全てを呑み込み崩ほう壊かいしようとしていた。

第七章

　装着した瞬間、心ここ地ちよい感覚が身を包み込んだ。あらゆる外的要素からその身を遮しや断だんする黒色の全身鎧スーツアーマー。

　手には恐ろしいほど分厚い刃の曲刀シヤムシール。

　それを両手で構える。剣の成績は悪い方ではなかった。だが、この状況下においては、そういう技術よりもむしろ、自身の――即ち、ワータイガーとしての戦闘本能に賭かけた方がいいように思われた。

　――前に出よう。

　そう念じた瞬間、踵かかとの魔マカナが噴射された。

「……！」

　ルイスの爪クロウが伸び、迎げい撃げき態勢に入る。咆ほう哮こうと絶叫が入り混じり、剣と爪が交こう錯さくした。

　闇夜を切り裂き、〝ガーゴイル〟が翔とぶ。

　ルイスの手から、そして腹から赤い蔦つたが無数に飛び出し、〝ガーゴイル〟に襲い掛かる。

　わずか数ｃｍセルモールの差で蔦を躱かわす。

　しかも、その状況に置いて〝ガーゴイル〟は尚も加速する。完全に常じよう軌きを逸いつした凄すさまじい速度の〝ガーゴイル〟は、ルイスの懐ふところへ飛び込むまで残り一秒。

　その一秒で、ルイスは全てに対応した。

　膨ぼう大だいな魔マカナを保有するルイスは、コンマ五秒で障壁シールドを発動させた。

　しかし、それはルイスの過あやまちであるとアーネストは判断する。

　彼が手にする曲刀シヤムシールは、バターのようにその脆ぜい弱じやくな壁を切り裂いた。

　バターのように。

　剣速が鈍ったことは事実だった。

次の瞬間、ルイスは〝ガーゴイル〟の真横に移動していた。

振り向いた瞬間、脇腹に埋め込まれていた竜頭ドラゴンヘツドがブレスを吐いた。ギリィの魔力で強化されたそれは、大火球に匹ひつ敵てきする威力をもって、〝ガーゴイル〟を直撃する。

アーネストは受けた瞬間、危険だと感じて即座にその場から離脱した。ルイスから遠く、そして高い場所へ。

ブレスは鎧よろいの表面を舐なめる程度だ。既に修復は開始されている。とはいえ、ここで休きゆう憩けいという訳にもいかなかった。

距離が離れた。

アーネストは武器を交換した。

三十九式ルベルチオン重機関銃装着、掃そう射しやした。７・９２ｍｍミリの銃弾が数十発ルイスの体に食い込む。もちろん、その程度で死にはしない。だが、ルイスが不快な気分を味わっていることは確かだった。

弾幕で視界が遮さえぎられる。その隙を突いて突撃する。武装は再び曲刀シヤムシールへ。

曲刀シヤムシールに魔法を篭こめられることにようやく気付いた。

空を切って大気の魔力マナを吸収し、発動させる。

雷獣らいじゆうの如き光を纏まとい、爆走する。ルイスもまた、自身に対抗すべく呪文スペルを詠えい唱しようする。アーネストが雷光ならば、ルイスは血のように紅あかい炎だった。

光と炎が激突し、大気が割れた。

世界が爆走する。空が揺れる、世界を分わかつ壁も壊れ、とうとう海水が溢あふれ出した。

二合、三合と行うたびに世界が揺れて破壊されていく。

王国キングダムは終しゆう焉えんを迎えていた。

〝イエスラス〟に到着した四人は、最早、一刻の猶ゆう予よもないことを悟った。

直ちに潜水艦に乗り込み、サティに水をぶっかけて正気に戻らせた。残りの乗組員も正気に戻っていることを確認すると、シャドウフィールドは艦長席に座って告げた。

「総員、〝イエスラス〟起動準備！　エンジン始動！」

「アイ、アイ、サー！　エンジン始動！」

　エンジンが始動する。昇しよう降こう筒づつの出入り口は完全に閉じられている。後は、水が船体を横よこ殴なぐりしないように祈るだけだ。

　乗組員はあまりにも少ないが、彼らはどうにか潜水艦を始動させることはできた。だが、陸地に上がった状態では、エンジンを動かせてもどうにもならない。

「大波来ます！」

「全員、大波来るぞ。堪こらえろ！」

　ぐらりと潜水艦が揺れた。ジニーが悲鳴をあげそうになって口を押さえる。潜水艦はそのまま押し込められて、その身を海底に横たえるかに見えた──だが、ギリギリで踏み止とどまった。

「くそ！　早く海水が流れ込め……！」

　世界を海水が浸していく中、尚も〝ガーゴイル〟と〝キマイラ〟の戦いは続く。

　炎を纏まとったルイスの爪クロウは、溢れ出た海水に押し潰つぶされた。

　仕方なく、ルイスは代わりの爪クロウを出すことにする。

　今度の爪には、氷の魔法──振るうだけで、他者を凍らせる絶対的な存在に。

　〝ガーゴイル〟は踵かかとの飛行制御装置を絶妙な加減で操りながら、虚空をジグザグに動いた。

　ルイスは薙なぐ、此こ度たびもまた数ｃｍセルモール単位で躱かわせると踏んだアーネストはしかし、〝ガーゴイル〟の危険を知らせる警報アラートに気付くのがコンマ一秒遅れた。

　〝ガーゴイル〟の左腕を掠かすめた斬ざん撃げきは、同時に周囲の海水をも凍りつかせた。周囲の海水が凍りついたということは即ち、相手をその座標に固定したということだ。

　〝ガーゴイル〟は氷を引き千切ろうとした、そのために次の斬ざん撃げきを躱すタイミングがわずかにズレた。

そのズレは積み重なって致命的な隙を生んだ。

ルイスの腹から赤い蔦つたが放射された、右肩左肩左ひだり腿もも右みぎ腿ももに複雑な紋もん様ようのように絡みついた。

曲刀シヤムシールを持つ右手は固定されていて、振るうことも不可能だった。

紙縒こよりのように幾つも幾つも捻ねじられた赤い蔦が、鞭むちのようにしなり、アーネストの首筋を打った。

威力は、鞭というよりは鎚矛メイスだった。アーネストの顔が苦痛に歪む。鎧よろい越しといえども、衝撃は通過して彼にダメージを与えていた。

右腕右足に力を篭こめる、左腕左足に力を篭める、歯を食い縛しばり、必殺の一撃を喰らうより先に動かんとする。先ほどの一撃では苦痛を与えるだけだと判断したのか、赤い蔦はさらにその太さを倍化させていた。

速度は関係なく、質量で圧倒しようとする斬撃だった。

先ほどの一撃より鈍重だったが、威力では圧倒的に上回ることを予感する。

喰らっても死なないかもしれない。

喰らったら死ぬかもしれない。

そういう威力の一撃だった。

赤い蔦を引き千切って左足を解放した。右手に曲刀シヤムシールが握りっぱなしであることを思い出し、その刀身を左足で蹴り飛ばした。

右腕の蔦が断ち切られた。続けざまに全ての蔦を断ち切った。巨大な蔦の一撃が脳天に襲い掛かる。両手で曲刀シヤムシールを握り、受け止めた。

全身に数億の蟲ワームが這はい回るような衝撃。

だが〝ガーゴイル〟は凌しのぎきった。巨大な曲刀シヤムシールの刀身はひび割れることもなく、ギシギシと音を立てつつもどうにか受け止めきった。

ルイスの驚きよう愕がく──そして恐怖。恐怖は全身を巡ってギリィに伝わり、ギリィは契約者たるルイス・マクレーンの恐怖を解消する

ためにその力を発動させた。

　──ルイス・マクレーンが考える最強の幻獣とは何か？

　その問いかけにルイスは応じる。

　最強の幻獣は竜人ドラゴニユートが変身する〝古の竜フアーヴニル〟なり。

　だがルイス・マクレーンは竜にあらず。ギリィが屠ほふった者たちもまた、竜にあらず。

　やむなく、ギリィは通常の〝竜ドラゴン〟を選択した。

　ルイスの首が伸びる。顔が竜へと変わる。脇に存在した竜の首が移動した。

　翼が広がる。アーネストを打ち砕こうとしていた赤い蔦つたが、強きよう靭じんな尾へと変化する。

　ギリィの命令によって地面に転がった死体が浮き上がり、彼の下へと集まっていく。

　巨大化。

　翼はより広く、体はより大きく、そして全身は強靭に。されど、所しよ詮せん材料は屍しかばねの山だ。如い何かに大量の材料を使ったところで、やはり部分部分の腐敗は避けられない。

　現に竜の頭の片割れは、半ば頭ず蓋がい骨こつが露出していた。落ち窪くぼんだ眼がん窩かからは腐敗した眼球の残り滓かすが、白濁した液となって滴したたり落ちている。巨大な肋ろつ骨こつもその一部が剝むき出しだ。あらゆる種族から掻かき集めた肋骨が溶けて融ゆう合ごうし、一本の骨として成立している──させていることが見て取れた。

　アーネストはルイス・マクレーンが竜に化けたことに、驚きはない。

　それくらいのことはできる、と判断していた。判断したのは、アーネスト自身だろうか？　それとも〝ガーゴイル〟の秘めたる意思なのだろうか？　そこまでは判別できない。

　ともあれ。これこそが〝臓腑要塞ギリイ・メデイスレンテ〟の力であることは間違いない。

　喰らったものの力を己の力へと変える──しかもより強力な形で。

　たとえ材料が屍し骸がいであろうとも、膨ぼう大だいな魔マカナで練りあわされた強靭かつ強大な肉体は、生者以上だ。

　牙きばの隙間から唸うなりが漏れる。ミスリル合金を上回る耐久力を持つ黒い鱗うろこがざわめいた。

　ルイス・マクレーンの思うことは単純だった。

　──狩り尽くす、一つ残らず。

　それが〝イエスラス〟であろうが、眼前のアーネストであろうが必ず殺す。殺してやる。

　そして自分はこの体を保ったままこの海から空へと羽ばたくのだ。

　アーネストの思うことも単純だった。

　ルイス・マクレーンをあらゆる方法で打ち倒す。

　それだけが彼の望みだった。裏切られたという怒りではない、そんなものでアーネストの心は動かない。

　だが、カレンは別だ。カレンを悲しませ、カレンの命を脅おびやかす者──そんな男を断じて自分は許せない。許すものか。

　──殺してやる。この世から存在全てを消し去ってやる。

　アーネストの決意は固い。

　ルイス・マクレーンは最も早はや、人でもなく、獣でもなく、体長30mモールの巨竜だ。

　滅び行く王国に顕けん現げんせし〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟。

　それに対抗するのは──。

「──黒騎士ガーゴイル、か」

　妙に可お笑かしかった。これではまるで御伽噺フアンタジーだ。

　ならば結末も定められているだろうとせせら笑う。塵ちりは塵に、灰は灰に。

　両手の曲刀シヤムシールを握り直す。彼の憎悪に反応するように、刀身が低く唸うなるような感覚。

　咆ほう哮こうと共に、アーネストは勢いよく両腕を突き上げた。刀

身に尾が弾き飛ばされる。アーネストは踏み込もうとして、竜の顎あぎとが開いたことに気付いた。

　回避。

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟が炎を吐き出す。己の顔を焦こがしながらの一撃。

　〝ガーゴイル〟は紙かみ一ひと重えでそれを躱かわし、懐ふところに潜り込む。腹ふつ腔こうを抉えぐり出そうとした瞬間──大きくそれが開いた。

　腹から飛び出した鮫さめのような顎が、曲刀シヤムシールを噛かみ締める。ガチリと牙きばが食い込み、曲刀シヤムシールを強引に奪い取られた。

「……っ！」

　双頭が牽けん制せいするように激しく噛み付いてくる。〝ガーゴイル〟はやむなく、刀を手放したまま、その状態から離脱した。

　腹の口が曲刀シヤムシールを吐き捨てた。落下していく刀を、〝ガーゴイル〟は追うことができなかった。吐き出したと同時に、〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟は〝ガーゴイル〟へと突撃したからだ。

　〝ガーゴイル〟は背部のルベルチオン重機関銃を装備し、猛たけり狂う竜に向かって撃ち放った。

　凄すさまじい弾幕と共に、竜の巨きょ軀くが削られていく。

　だが、〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟は構わぬとばかりに竜の息ドラゴンブレスで炎と衝撃の嵐を巻き起こしていく。

　息ブレスが胸部に直撃した、超々高熱で炙あぶられたその部分は数秒耐え凌しのいだのち、溶解し始めた。

「ぐ、が……！」

　悶もだえ苦しみつつ、アーネストは全力で〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟の間合いから離脱した。だが、ダメージは深刻だった。意識が遠のき、踵かかとの魔マカナのコントロールが効かなくなり──ディルビック号後部甲板に激突した。

　転がるどころではなく、そのまま甲板を突き破った。

　爆音と激突音──アーネストは酷ひどい耳鳴りを感じた。

（──熱い）

　溶解した金属が、彼の胸板に少しずつ垂れていく。煙が上がり、滴したたり落ちるたびに激痛に悶え叫んだ。

　地獄のような、そして永えい劫ごうに続いているように思われた時間は実のところ、わずか三十秒程度だった。

　〝ガーゴイル〟は自動的に修復活動を行い始めた。胸板に滴った分も含めて全てが巻き戻っていく。金属の軋きしむ音が終わる頃には、〝ガーゴイル〟は従来の外観を取り戻していた。

　ただし、内部のアーネストはそうはいかない。原因となった金属の雫しずくは取り払われたが、全身を閃せん光こうのように貫いた激痛は、そうは簡単に治まるものではない。

　呼吸をする。眩暈めまいを振り払うように、必死に思考を取り戻そうとする。自分が激痛に苦しんでいる三十秒、あの〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟はどこで何をやっていただろうか？

──決まっている。自分にとどめを刺していないということは、もう一方を優先したということだ。

　即ち、彼は一目散に〝イエスラス〟の元へと向かったのは明らかだった。

　ならば立ち上がらなければ。

　両手に力を入れて、床に叩きつけるようにして己の上半身を持ち上げる。精神が壊れそうなほどの激痛はのろのろと和らぎつつあった。

　それでも、常人ならば気を失うどころかショック死してもおかしくない痛みだ。それを堪こらえ、アーネストは立ち上がる。しかしアーネストの焦あせる思考とは裏腹に、〝ガーゴイル〟は二つの場所を彼の脳裏に浮かび上がらせた。一方は甲板に転がっているルベルチオン重機関銃。もう一方は──。

　アーネストは甲板へと飛び出した。すぐさまルベルチオンを拾い上げ、踵から魔マカナを猛烈に噴出させながら、目当ての場所へと飛び立った。即ち、曲刀シヤムシールを。

「……っ！　教官、急速に接近してくる物体感知！」

　カレンの叫び。

「アーネストか!?」

シャドウフィールドの言葉に、カレンは首を横に振った。

「ドラゴン……屍し骸がいのドラゴンです！　体長30mモール前後！　こちらに真っ直ぐ向かってきます！」

シャドウフィールドはその言葉に一瞬、唖あ然ぜんとした──が、立ち直ってすぐに叫んだ。

「コゼット！　魚雷発射準備！」

「了解しました！」

コゼットが司令室を飛び出した。魚雷発射管室に駆け込み、魚雷が装そう塡てん済みなのを確認してから機関室へと連絡し、魔マカナを魚雷に充じゆう塡てんさせる。

「発射準備完了！」

「カレン、ドラゴンは──？」

「ドラゴンは真っ直ぐこちらに向かってきます、我々と並行に低空を飛ひ翔しようしています。到達まで約十秒──」

カレンの焦しよう燥そうを滲にじませるような声。シャドウフィールドは決断した。

「魚雷発射！」

応じたコゼットは、発射弁を冷静に開いた。

圧縮された魔マカナとの混合空気が解放され、音速で魚雷が発射される。蒼い雷光を伴いつつ、魚雷は真っ直ぐに〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟へと向かう。

だが双頭の顎あぎとが開くと同時、白色の炎が魚雷を覆おおった。凄すさまじい高熱に炙あぶられた魚雷はたちまち誘爆し、ドラゴンに届くより先に灰かい燼じんとなって消えた。

「魚雷、迎げい撃げきされました。ドラゴンに損傷ありません！」

ドラゴンの腹部から、赤あか蔦つたがーいつ斉せいに飛び出した。たちまち〝イエスラス〟に蔦が絡み、がくりと艦体が揺れる。魚雷発射管から巧たくみに体を躱かわし、〝イエスラス〟を両腕で抱え込む。

「〝イエスラス〟捕ほ縛ばくされました！」

ギシギシと艦体が締め付けられる音。乗組員は信じられない、という思いでぼんやりと見えるはずもない空を見た。アダマンタイトの外殻が、悲鳴をあげている。あの、メガロドンの激突に耐え凌しのいだはずの——！

数千ｔアガラットの重さがある艦体が、ゆっくりと持ち上がる。カレンは目を見開いた。〝遠えん視し〟で見るドラゴンの顔は、どうしようもなく嗤っていた。

「持ち上げ……られています……」

「……まずいな……」

シャドウフィールドが苦渋の顔で、その報告を聞いていた。〝イエスラス〟はまさに世界最硬の頑強さを誇る。だが、そんな艦にも弱点はある。

—空から叩き落とされれば、内部にダメージが及ぶ。

〝イエスラス〟内側で乗組員たちは艦のあらゆる部分に激突し、ぐしゃぐしゃに砕け散るだろう。

ドラゴンはそれを狙っている。ドラゴン—ルイス・マクレーンはこの無敵の潜水艦唯一の弱点が、内側の脆弱な乗組員や必要な機関にあることをよく見抜いている。

「海水の状況はどうだ？」

「浸水は始まっていますが、まだ〝イエスラス〟が航行できるほどではありません。……我々は動けません。……教官」

「くそ！」

シャドウフィールドはどん、と椅い子すの肘ひじ掛かけを殴なぐりつけて苦渋と共に呟いた。

「俺たちの……負けか」

〝イエスラス〟が激突した場合でも、シャドウフィールドは生き延びる自信はある。だが、それだけだ。他の乗組員は負傷か、打ち所が悪ければ死亡する。潜水艦をたった一人で動かすことはできない。この海域に取り残されれば—死ぬ。

「……くそ。セルマの嬢ちゃんに恨まれそうだ。泣いてはくれんだろうな」

その言葉を耳にしたらしいジニーが、怯えたようにカレンの手を

握った。カレンは外を見つめつつ、その手を強く握り返す。

「教官。まだです。まだアーネストがいます！」

　カレンは〝遠えん視し〟で必死に彼の行方ゆくえを捜した。居るはずだ。あの執事は必ず、どこかにいるはずだ。死ぬはずがないではないか、あの無敵の執事が、朽くち果てることなどあっていいはずがない、私の執事が死ぬ訳がない……！

「お願い、アーネスト。お願いばっかりだけど、お願い……助けて……！」

　自分が死ぬことは覚悟の上だ。シャドウフィールドもそうだろう。誰も彼も、死ぬ覚悟をした上でここに来たはずだ。だから、それだけならばカレンは期待をしても願うことはない。

　だが。

　ジニーは違う。

「生きて、ジニーに……色々なものを見せてあげたいの！　だから、助けて！」

「カレン……」

　だが、ルイス・マクレーンにはカレンの言葉が耳に届くはずもなく、届いたとしてもそれほど情のある人物ではなかった。

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟は宙空で〝イエスラス〟を放り捨てた。

「ドラゴン、〝イエスラス〟を投とう棄きしました……！」

「全員、衝撃に備えろ！　ジニー、来い！」

「ジニー、行って！」

　二人の言葉に、ジニーはこくんと頷いてシャドウフィールドの元へ駆け寄った。彼はしっかりとジニーを包むように抱きしめた。

　がくがくと揺れる艦。誰も彼もが、必死になってしがみついている。時間にすればわずか五秒もないはずのそれはしかし、一時間以上にも感じられるような刻だった。

「……」

　カレンはぐんぐんと迫る大地を見て、恐怖で気を失いそうになるのを必死に堪こらえた。この状況に至っても、まだ彼女は心のどこかで

信じていた──アーネスト・ヒギンズがやってくることを。

　──馬鹿ね、カレン。こんな状況、いくらアーネストでも覆くつがえせるはずないじゃない。

　心のどこかに、そんな醒さめた諦てい観かんの思いがある。

　正論すぎて、それを跳ね返すこともできない。ああ、だがしかしそれでも───。

「……あれ？」

　カレンは、気付いた。

　とうに大地に激突していてもおかしくないはずの〝イエスラス〟が、今もなお落ち続けていることに。

「……まさ、か」

　慌あわててカレンは〝遠視〟で、正確に艦の周囲を捜索サーチした。

　すぐに発見、そして理解した。艦底前方付近に凄すさまじい魔マカナを放出する何かがいる。その〝何か〟は人間よりわずかに大きい程度のサイズでしかない。全長80mモールという〝イエスラス〟からすると、塵ちりに等しい存在だ。

　だが。

　その塵が、たった一人で、たった一騎で、叩き落された〝イエスラス〟を支えている！

「教官！　アーネストが……アーネストが支えてくれています！〝ガーゴイル〟を装備して、たった一人で……！」

　両腕を高々と掲げ、膨ぼう大だいな魔マカナを噴出させながらアーネストは〝イエスラス〟を支えていた。

「…………」

　噴射、というよりは最も早はや、翼に近いまでに広がった白い爆炎。全身にかかる重圧は凄すさまじく、ほんの少し気を緩ゆるめると、全身の骨が粉々に砕け散りそうだった。

「……ぐ、む」

　支えた、とはいえその重さ全てを耐えきれるはずもない。少しずつ

〝ガーゴイル〟は下り続ける。だが、それでいい。彼は噴射の向きをコントロールしながら移動する。

　艦底から、少しずつ艦首近くへと滑るように。

　当然の如く、艦尾は垂れ下がる。ここで、〝ガーゴイル〟は更なる力を振り絞しぼった。

　カレンが気付く。

「教官！　アーネストは〝イエスラス〟を海中へ突っ込ませるつもりです！」

「了解！　機関室！　エンジンを動かせ、すぐだ！」

「アイ、アイ、サー！」

「なーのーよーねー！」

「艦体が突っ込むと同時に、スクリューを逆回転させて全速で後進させる。海中に入ればこちらのものだ。全力で浮上する」

「教官。アーネストは──」

「心配するな。〝ガーゴイル〟の想定限界深度は１５００ｍモールらしい。あの鎧よろいを装備しているなら、耐えられるはずだ……！」

「でも……！」

「分かっている。海中なら、あのドラゴンの動きも鈍るだろう。狙いを定め、ありったけの魚雷を撃ち込むぞ。ルイス・マクレーンと──ギリィ・メディスレンテを、断じて外に出す訳にはいかん！」

「……」

　ジニーがぎゅっと、シャドウフィールドの服を摑つかんだ。シャドウフィールドの言葉に抗議したかった訳ではない。ただ、無性に悲しかっただけだ。

　シャドウフィールドは彼女を省かえりみない。彼女の一時の悲しみは、カレンやアーネストが塞いでくれるはずだと信じている。

　ジニーにとっての英雄は己ではない、カレンとアーネストだ。だからこそ、ジニーにとっては非情とも思える決断を、あえて宣言した。

「〝イエスラス〟動き始めました！」

空そら翔とぶ黒騎士は爆走する。〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟が自分の後方、かつ上空から襲い掛かるのが理解できた━だが、自分が〝イエスラス〟を海中へと押し込む方がわずかに早い、とアーネストは、否いな、〝ガーゴイル〟が計算した。

海中の結界は崩れかかっている。恐らく、ある程度の速度でもって〝イエスラス〟を突っ込ませれば、必ず海中に侵入することができるはずだ。〝ガーゴイル〟は泡あわ立だつ黒い海面の壁を見て、そう判断した。

勢いあまって自身が海中に突撃してしまった場合に備え、鎧よろいの隙間のあらゆる部分を魔マナで遮しゃ断だんする。この状態で深海に潜もぐった場合、戦えて二十分━と〝ガーゴイル〟は計算した。恐らくそれ以上を越えると圧あつ潰かいが始まる。

「……お嬢様」

名を呟く。恐らくは自分の姿を捉えてくれているはずのカレン・グリムスター。

できれば、自分を見守っていて欲しいと思う。

それだけで構わない、それ以上は望まない。━なぜ？　そう問われることもある。現に今、心の中で誰かが問い掛けている。なぜ、命を懸かけてまで彼女を守ろうとしているのか。

それが執事としての矜きよう持じだからか、あるいは自分に過去が無いせいで他に縋すがるものがないためか。

あるいは━あるいは、自分がカレン・グリムスターという少女に好意を抱いているからか。

いや。単なる好意というだけではない、それを越えた何かを。

尊敬のような、愛情のような、忠誠のような、それら全てとも異なる何かだ。

だが、一つだけ確実なことがあった。

アーネスト・ヒギンズはこういう生き方、こういう状況あらゆるもの全てをまったく後悔していない━それだけは、確かな真実だった。

〝イエスラス〟の艦尾が徐々に下がっていく。〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟は背後から迫ってくる。だが、アーネストは〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟に背中を向けつつ、片手を艦から離して、ルベルチオンを手

に取った。

　二つの頭部、それも眼球に狙いを定め、銃ひき爪がねを引き続ける。３６０度の視界は、装着した当初はどうにも混乱したが、すぐに慣れた。まさに背後に目がついているかのような精密射撃は、ドラゴンの速度を鈍らせるには充分だった。

「──イエスラス、海中に突入します！」

「全員、衝撃に備えろ！」

　ギリィが編み出した結界による抵抗は、強化魔法が付与されたスクリューによって容易たやすく引き千切られていく。

　白い泡を吐き出しながら、〝イエスラス〟は次第に海面へと飲み込まれていく。それと同時に、〝ガーゴイル〟に今までかかっていた兇きよう悪あくな重量が、次第に軽減されていった。

「突入したな？　スクリューを逆回転、全力で後退する！」

　〝ガーゴイル〟と逆回転したスクリューが〝イエスラス〟を海中へと引き戻していく。

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟は思考する。

　アーネストと雌し雄ゆうを決するのは後でもいい。それより重要なことは、一刻も早くあの潜水艦を打ち倒すことだ。完全に水中へと没する前に……！

　その前に〝ガーゴイル〟が立ちはだかった。

　手にはルベルチオン重機関銃。たとえどこへ向かおうとも、それで迎げい撃げきする。アーネストはそうはっきりと彼に向かって伝えた。

　言葉は必要なかった。行動が何よりの雄弁だった。

「ここは通さない」

　アーネストの断固たる意志。〝イエスラス〟はゆっくりと海中へと入り込んでいく。

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟は世界全てを憎悪するかのような咆ほう哮こうで、愚かな騎士の挑戦に応じた。

「海中への突入完了。機関室、どうだ⁉」

　機関室から慌あわてた声が響く。フィールタン兄弟の弟、ベルベットの甲かん高だかい悲鳴だ。

「こちら機関室。精霊の魔力排出用パイプが折れちゃったの！　雷がそこら中で発生して手がつけられないわ、応援をよこしてちょうだいな！」

　その言葉にジニー以外の全員が青ざめた。現在、全速で後退しているのだ。万が一、海中の山に激突すれば、それこそ只ただではすまない。

「……よし、分かった。機関室、カレン！　そのまま〝遠えん視し〟を続行。方向転換と魚雷発射のタイミングはお前が計ってコゼットに指示しろ！　コゼット、俺は兄弟と交代で機関室に行く！　カレンの命令に従え！」

「こちら魚雷発射管室、了解！」

「教官！」

「力仕事だ、俺に任せておけ。一通りのことは習っているはずだ、そうだろう？」

　シャドウフィールドは立ち上がろうとするカレンを押し留める。

「……分かり、ました」

「ジニー、カレンのそばにいろ。邪魔しちゃダメだぞ、分かってるな？」

「うん」

　あっという間にシャドウフィールドが司令室から消えた。カレンが代わりに、手近にあったマイクを掴つかんだ。

「ジニー。右から三番目のスイッチを入れてみて。分かる？」

「わかった！」

　ジニーは正確に、そのスイッチを入れた。

「後部操そう舵だ室しつ！　準備できてる？」

　ルイが応じた。

「あいあいまーむ。準備おーけー」

「教官！　そちらはどうですか!?」

　カレンがそう言って耳を澄ますと、雷の暴れ狂うパチパチという音が漏れていた。

　それに負けないよう、シャドウフィールドが声を張り上げている。

「何とかなりそうだ、どこまで落とせばいい!?」

「微速でお願いします。出力は20％！」

「オーケー、ベイビー！」

　すぐに最速で後退していた潜水艦の動きがガクリと鈍った。先ほどに比べれば、亀同然だ。

「ユウマ、スクリューを逆転させて！」

「アイ、アイ、マム！　スクリュー回転戻すぞ！」

　〝イエスラス〟がわずかに震動した。同時にゆったりとした速度で、艦はあの〝王国キングダム〟へと向かっていく。

　カレンは〝遠えん視し〟で、縮小していくその世界を見つめた。そこで対決する、一人の黒騎士と、一頭の竜も。

　魚雷の狙いを定めるために必要なポジションを思考する――先ほどのように魚雷を迎げい撃げきされたり、あるいは魚雷を察さつ知ちされて、躱かわされたりしたらたまらない。

　――カレンは、突拍子もないことを思いついた。

「……ベルベットはまだ!?」

　その声に応えたかのように、ベルベットが司令室へと駆け込んできた。

「お待たせっ！　ベルベット、到着したわよ！」

「ベルベット、取とり舵かじ三十度！」

　座席に滑り込んだベルベットが、ぐるりと舵を回した。

「アイアイマム！　取舵三十度！」

「深度７００ｍモールまで浮上します！　浮上角度二十！」

「アイアイマム！」

「あーい、まーむ！　深度７００ｍモールまで浮上するよ～！」

　〝イエスラス〟が浮上しつつ、左へと曲がっていく。

「ジニー！」

「な、なに？」

「お願い、私とアーネストのために祈って。どうか、うまくいきますようにって！」

◇

　世界は半分以上が水没している。地表で蠢うごめいていた屍兵ゾンビも、砕けて藻も屑くずとなって消えていく。骨と腐肉で創製された〝家〟も次々と海水に押し潰つぶされていった。

　残るはディルビック号の巨大な船体だけだ。

　ルイスとアーネストの周囲のみ、未だ大気が存在する──だが、この状況も時間の問題だろう。〝王国〟は崩ほう壊かいし、このディルビック海域は只ただの深海となる。

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟──ルイスは〝イエスラス〟を諦あきらめた。

　否いな、諦めたというよりはとうとう優先順位を変化させたのだ。

　〝イエスラス〟より、そしてブレイド・レイ・シャドウフィールドよりもなお優先すべき存在。アーネスト・ヒギンズを最優先抹殺対象にする。

　──目先の利益に心を奪われた結果が、これだ。

　ルイスは深く心に刻み込んだ。

　牙きばを蠢かし、キリキリと音を立てた。憎悪に汚れた脳で、己のダメージを解かい析せきする。片方の頭は先ほどからの激闘と腐乱のせいで、かなり状態が悪化している。

　放ほう棄きするか、修復するか──修復の材料は、既に失われている。何もかもが海に沈んでしまったのだ。だが、この頭はまだ焔の息ブレスを吐き出すことができる。やむなく、彼は背部から尾部にかけての肉をそこに移動させた。

　装そう甲こう状態は良好だ。特にメガロドンの頑がん丈じような軀からだ──皮、肉、骨に至るまで──を使用した部分はあのルベルチオン

重機関銃の弾丸すら通すまい。

　息をさっと噴き出す。白く輝く高熱度の炎が空間を這はい回り、しばらくして掻かき消えた。

　よし。

　完かん壁ぺきすぎるほどに完璧だ。今の己は、古の竜ファーヴニルと比較しても遜そん色しよくあるまい。しかも、腐った屍しかばねを材料にしてこのレベルなのだ。地上のあらゆる物体を取り込めば、一体どうなるのか、想像もつかない。

　あらゆる兵器を打ち倒し、全ての〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟を凌りよう駕がし、国家を揺るがす存在となるだろう。世界は全て、聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいの──。

「否、私のものだ！　世界の何もかも、世界のあらゆる財宝が、謎なぞが、全て私のものだ！」

　身震いするほどの歓喜を以もつて、ルイスは再び〝ガーゴイル〟に襲い掛かった。

　〝ガーゴイル〟──襲撃察知。

　眼前の敵は完全に己を敵と狙い定めている。今度こそ、相手は本気だ。自分を完全に滅するまで、決して手を休めぬだろう。

　だが、それでいい。

　喉のどが唸うなる。牙きばが軋きしむ。黄金色の体毛が鎧よろいの内部でざわついている。

　既に〝イエスラス〟は海中に沈み込んでいる。すぐに浮上すれば、竜の手が届かぬ地点まで離脱することも可能だろう。そうして欲しい──アーネストはそう願った。

　後は、この〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟を打ち倒すだけだ。

　全身の筋肉を震わせつつ、虎頭の男は銃を背部に装着し、曲刀シャムシールを引き抜いた。無む銘めいの魔剣、その刀身は先ほどからの激闘を思わせないほどに刃こぼれ一つなく、光り輝いている。

「あ──あ、ああ──ああ」

　筋肉が震える、アドレナリンが全身を循環する、牙を噛かみ砕かんばかりに力を篭こめる。

〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟が襲い掛かってくる。

　顎あぎとが開く。白炎が煌きらめき竜巻ツイスターのように吹き荒れる。〝ガーゴイル〟は残像が見えるほどの速度でそれを躱かわす、躱す、躱し続ける。両手で握り締めた曲刀シヤムシールに魔マ力ナを篭こめつつ、振りかざした。

　弧を描く黒の刃。吼ほえながら回転し、首筋に一撃を叩き込む。

　硬い装そう甲こうを破壊しながら、喉のど笛ぶえを叩き斬った。しかし、次の瞬間に丸太のような竜の腕が腹部を直撃する。ディルビック号の船体近くまで吹き飛んだ〝ガーゴイル〟はしかし、瞬間的に態勢を立て直した。

　逆噴射しつつ、ディルビック号の壁面に両足から着地。次の瞬間、壁面を歪ゆがませるほどの爆発力で〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟へと飛ひ翔しようした。

　憎悪と憤怒が激突する──大気が歪み、震動した。神雷の如き一撃に、竜が無意識に怯ひるんだ。軀からだを捻ひねり、思い切り曲刀シヤムシールを振りかざす。

　双頭のうち、半ば腐乱している方の頭を斬り飛ばした。

　ドロリとした黒い血液が四方八方に飛び散る。竜はその一撃に怯んだ──慌あわてて再生、修復を図る。だが、完全に攻守は入れ替わっていた。

　一撃一撃が重く、鋭く、そして精密だった。黒く輝く刃が、削さく岩がん機きのような勢いで屍の軀を斬り続ける。一撃ごとに、再生の速度が鈍っていった。一撃ごとに、屍し骸がいの装甲が削られていった。

「どうだ、どうだ、どうだ……！」

　戦闘の狂気がアーネストの頭を支配する。息もつかぬ、息もできなくなるほどの重い一撃。

　胸板に深々と突き刺さったそれはしかし、〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟の反撃の狼煙のろしでもあった。心臓を貫いたはずの一撃を気にすることもなく、竜は両腕で〝ガーゴイル〟の外装を殴なぐり続ける。一撃一撃の衝撃がアーネストの肉体に浸透し、精神が崩ほう壊かいするほどの激痛が全身を蝕むしばんでいく。

　口から血を吐き出す、肋ろっ骨こつが折れたのが分かる、内臓がくたびれて言うことを利かない。

目が霞かすむ。クリアだった視界がひずみ、ゆがみ、雑像ゴーストが混じる。

絶え間の無い激痛と地獄のような苦く悶もん。

「オォォォォォォォォー！」

正気を失ったように、アーネストは握り締めた曲刀シヤムシールを更に深く、柄つかの部分に至るまで喰い込ませ、渾こん身しんの力を篭こめて動かし始めた。

ゆっくりと引き裂かれていく巨きよ軀く。〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟はとうとう苦痛の悲鳴をあげ始めた。

ドラゴンが〝ガーゴイル〟に牙きばを剝むいた。炎を吐き出すのかと思ったが、それでは収まらないのか、あるいは倒しきれないとでも思ったのか、彼はその鋼はがねの杭くいのような牙で直じかに嚙かみ付いてきた。

鎧よろいが軋きしむ、〝ガーゴイル〟はアーネストに危機的状況下であることを知らせる。貫通まで残り時間二十秒。脳にその情報を叩きこまれたアーネストは吠え立てながら、曲刀シヤムシールで肉体を引き裂き続けた。

二十秒後—〝ガーゴイル〟の外装部を、牙が貫いた。

今度こそ、アーネストは悲鳴をあげた。激痛が閃せん光こうのように全身を走り抜け、脳がごそりと欠落したような感覚を抱き、絶叫し身み悶もだえた。

だが、驚きよう愕がくしていたのはルイスだった。外装部を貫いたにも関かかわらず、内部に詰まっていたのは鋼のような体毛と筋肉だった。

これでは、嚙かみ千切ることもできない。

すぐにルイスは的確な作戦を思いついた。このまま、竜の息ドラゴンブレスを噴出するのだ。アーネストは俊敏に躱かわすこともできず、溶けたバターのようになるに違いない。

ニヤリと、ルイスの目が嗤わらったのをアーネストは確かに見た。

彼が思いついた作戦は、〝ガーゴイル〟がひっきりなしに警告を続けているものだった。躱かわす手段はただ一つ、この顎をこじ開けるしかなかった。両手を曲刀シヤムシールから離して、あらん限りの力を振り絞しぼった。

　強烈な苦痛が、その作業を阻そ害がいする。全身全霊の力を篭めたとアーネストが思っているそれは、実のところ真の力のせいぜい半分という有様だった。

　喉元から高熱反応━━〝ガーゴイル〟が感知する。

　絶望的な状況下で、アーネストはなおも足あ掻がき続ける。

　〝ガーゴイル〟が警告する。信じ難い警告に、一瞬力が弱まった。それを、ルイスは諦あきらめたものと勘違いして、笑い出したくなった。

　だが、そうではなかった。

　力を入れられなくなったのではなく━━━力を入れる必要がなくなったのだ。

「コゼット！　魚雷は準備できてる!?」

「万ばん端たんです、四門とも即座に発射できます！」

　コゼットの応答に、カレンは〝遠えん視し〟でルイスとアーネストを見定めた。

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟に立ち向かう勇ましい黒騎士。

　だが黒騎士は今、窮きゅう地ちに陥おちいっている。

　満まん身しん創そう痍いであり、打つ手がほとんどないのが見て取れる。

　故ゆえに。

　━━それを覆くつがえす。この〝イエスラス〟で。

「天そらから鉄てつ槌ついを下してあげるわ。ルイス・アーネスト……！」

　かつては教師であった。

　かつては仲間であった。

　かつては指導者であった。

　だが、それらは全てこの裏切りで帳消しにしなければならない。

　未練を振り切り、カレンは叫んだ。

「前部バラストタンク注水！　ダウントリム。角度60！」

「アイ、マム！　角度六十！」

　〝イエスラス〟がゆっくりと、艦かん首しゅの角度を下げていく。斜め下を向いたその先には、巨大な〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟が存在する。

　上方からの攻撃──それも、至近距離の。

　今、〝ガーゴイル〟に全神経を集中しているらしいルイスは〝イエスラス〟に気付かない。とうに逃げ出したものと思っているのだろう。

　それはそうだ、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟たるシャドウフィールドが艦に乗っている以上、最優先すべきは彼の保護だ。

　だが、カレンはそれを覆す。そして、シャドウフィールド自身がそれを望んでいた。

「コゼット、魚雷は一番二番をまず発射。その二秒後に三番四番を発射して」

「アイ、マム！　魚雷、一番二番…………発射！」

　コゼットが発射弁を開いた。二本の魚雷が飛び出し、凄すさまじい勢いで海中を引き裂きながらまっしぐらに〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟へと向かっていく。

　だが海面に到達した直後、未だ残存する結界によって魚雷は破壊された。爆音が起こり、滝のような海水が二者に降り注ぐ。

　反射的に竜の頭が動き、じろりと海面を覗のぞき込んだ。丸めていた背中を逸そらして、訝いぶかしげな視線を移す。驚きよう愕がく──口元が緩ゆるみ、その瞬間に〝ガーゴイル〟は凄まじい勢いで鋼はがねの杭くいを体から引き剝はがし、離脱する。

〝イエスラス〟の艦かん首しゅから、二本の魚雷が立て続けに放たれた。

　竜は彼らの断固たる決意と、シャドウフィールドの英雄たる誇りを思い知る。

　既に脆ぜい弱じやくだった結界を二本の魚雷が突き破り、蒼そう光こうを帯びながら竜の顔面に直撃した。爆裂、四散、双頭が破壊される。

悲鳴と絶叫、憤ふん怒ぬよりも激痛が勝り、激痛よりも驚愕が勝る。己の絶対的な力への過信──それ故ゆえに生まれた隙。

離脱した〝ガーゴイル〟は、自身の体の修復を優先させようとした。だが、アーネストは修復よりも眼前の敵を仕留めることをさらに優先させる。

〝ガーゴイル〟が抗議するかのような意思を見せる、それをアーネストは鋼のように強きよう靭じんな意思を以もつてねじ伏せた。

外装はぼろぼろだ。鎧よろいに孔あなが開きっぱなし。そこからはちきれそうな黄金の肉体が覗のぞいている。海水が注ぎ込まれれば、たちどころに水圧で押し潰つぶされて死ぬ。

だが。

この瞬間を見逃しては、ルイスを、そしてギリィを仕留め切れない。

咆ほう哮こうする。

憤怒、闘志、悲哀、決意、勇気──それらをありったけ篭こめた咆哮だ。〝ガーゴイル〟が装着者の感情を敏感に察知し、外界に向けてその咆哮を響かせた。曲刀シヤムシールに魔マカナを注ぎ込む。

──世界に轟とどろく雄おたけびをあげる虎──

──苦く悶もんに蠢うごめく〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟──

──そして蒼光に輝く曲刀シヤムシール──

間かん髪はついれず、踵かかとから魔マカナを全開に噴出する。〝ガーゴイル〟は一本の突撃槍ランスとなり、直進する。



噴出される魔マカナは花びらのように舞い、雪のように消えていった。

〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟は躱かわそうとする、躱そうとした――躱せると確信していたのかもしれない。

だが、それより先に。それより遥か先んじて。

神速で、弾丸のごとく。

切先が空気を引き裂き、勝利への凱がい歌かを高らかに謳うたいあげながら――。

〈ガー…………ゴイルゥゥゥゥゥ！〉

〝ガーゴイル〟という名の必殺の弾丸が〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟を貫いた。

「ア、ギ――――！」

腹を貫き、全身を引き裂く。〝ガーゴイル〟は即座に方向転換、返す刀で竜の股またから脳天までを真っ二つに斬った。

――致命的な一撃クリティカルヒット――

〝ガーゴイル〟はディルビック号の船体に再び突っ込むと動作を強制的に停止させた。着地というよりは、衝突したといった方がいいかもしれなかった。ともあれ、ここに至って、ようやくアーネストは外装の修復を優先させることにした。

この〝王国キングダム〟が水没するまで、あと五分もない。

その五分で、外装をどうにか繋つなぎ直さなければならない。〝ガーゴイル〟はたちまち破損した部分の再生を開始した。そのまま動かずにいたアーネストは〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟を改めて見やる。

竜は吠え立てながら、千切れた巨きょ軀くを繋ごうとする。貫かれた腹は細こま切ぎれで、どうしようもない。頭は先ほどの魚雷の直撃で、思考にまで影響を及ぼしている。〝臓腑要塞ギリイ・メディイスレンテ〟とて、装着者は所しょ詮せんルイス・マクレーンというエルフだ。

限度を上回る損傷を受ければ思考に混乱を来たし、激痛にも耐えられない。否いな、アーネストならば耐えられたであろう痛みは、ルイスに耐え切れないレベルだった。

　純粋にして大いなる力パワー──アーネスト・ヒギンズは、そして〝ガーゴイル〟はあの瞬間、〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟であるギリィと、それを装着したルイス・マクレーンを上回ったのだ。

　その結果がコレだった。ルイスが装着していた屍し骸がいは破壊し尽くされており、雷属の魔力を帯びた斬ざん撃げきだったためか修復もままならない。

〈ク…………ソ…………！　修復しなければ！　修復しなければ！　屍し骸がいを集めて軀からだを構築しなければ！　強い肉体に！　不死身の肉体に！　最強の肉体に！　ナオレ、ナオレ、ナオレ、ナオレナオレナオレェェェッ！〉

　ルイスの絶叫が世界に響く。

　アーネストはそれを哀れみを以もつて聞き入った。

　──修復は不可能だ。

　〝ガーゴイル〟がこれまで蓄積した戦闘データから、〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟の限界を算出していた。最後の二撃は、耐久力及び修復力を上回って有り余るものだった。

　彼は滅びる。それは定めだ。

　奇妙な悲哀と微かな安あん堵どを抱きながら、アーネストは〝ガーゴイル〟が外装を修復するのを待つ。

　〝王国キングダム〟の水没は既に、彼の下半身まで到達している。外装の修復まであと数十秒というところだ、と〝ガーゴイル〟は判断し、アーネストが動くことを許可した。

　アーネストは自身の動作停止が解除されたことを知って、立ち上がる。呼吸を整え、ディルビック号の外へと出て──驚きよう愕がくした。

「信じ……られない……！」

　生きている！　まだ生きている！　体たい軀くこそ半分以下となり、下半身は千切れてしまったが、それでも必死に生き続けている！

　〝ガーゴイル〟もまた、パニックに陥おちいったように情報を収集し始める──即座に結論を出す。彼は己の下半身を諦めた。下半身の修復作業を一切停止し、上半身に全力投入させることで、どうにか生命を繋つなぎ合わせたのだ。

　しぶとい、などという言葉だけでは表せない生存への執念──！

「今度こそ……！」

　アーネストは再び空を飛ぼうとして、急激に世界が押し迫ってくることに気付いた。タイムリミットだ、〝王国キングダム〟は今、ここに崩ほう壊かいする。

　〝ガーゴイル〟は海水に押し流されていく──そのせいで、〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟と引き離されてしまった。

「しまった……！」

　〝ガーゴイル〟は深海１０００ｍモールでも耐えられる。だが、動きは格段に鈍る。だが、あの竜はよりによって──〝イエスラス〟の艦体、すぐ近くに存在している！

〈修復と再生、回収を繰り返し、下半身を放ほう棄きして、あらゆるものを総動員した。さあ、私にもう一度勝負をさせろ！　私は絶対に生き残るんだ。生き残る、生き残る生き残る……！〉

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟の両腕が、〝イエスラス〟を捉えた。外殻を破壊しよう、などという無む謀ぼうな賭かけには出ない。それは今の自分で不可能だということは知っている。だが、封印することはできる。この場所に、彼ら全てを封印する方法が。

　ルイスは〝イエスラス〟に向けて怪物じみた顔で微笑ほほえみかけた。

　今頃、〝遠えん視し〟で見ていた者がパニックを起こしているだろう。

　この巨大な潜水艦を封印する──〝臓腑要塞ギリイ・メデイスレンテ〟ならば、不可能なことではない。

〈私の……勝ちだ……アーネスト……！〉

　〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟が大きく、その顎あぎとを開いた。

　凍りつく竜の息アイスブレスが〝イエスラス〟を中心とする海水を凍らせていく。スクリューはたちまち氷によって動きが鈍くなり始めた。

　氷は砕かれても砕かれても、すぐに周囲の海水を取り込んで、その勢力を増していった。やがて、海底と氷が密着した。〝イエスラス〟の周囲数十ｍモールが全て、氷によって凍結した。

〝イエスラス〟が一瞬、凄すさまじい勢いで揺れた。そして、その後すぐに進んでいるという感覚が消え失せた。シャドウフィールドは機関室全体が凄まじい唸うなりをあげているのを見て、慌あわてててカレンに問いただす。

「──どうした!?　何が起こった……！」

「教官……我々は捕獲されました！　ルイスが使ったのは、氷の息アイスブレスです！　周囲の水が凍り付いて、身動きが……！」

　シャドウフィールドはスクリューが凍って動かないことに気付いた。

　選択──スクリューを動かし続けて、強引に氷を破壊するか？　だが、それまで機関がもつか？　動かないスクリューを動かそうとした結果、精霊封印式エレメンタルシールスタイルエンジンを破損してしまい、二度と浮上できなくならないか？

　シャドウフィールドは決断した。

「エンジンを停止する……！」

　〝イエスラス〟はその動きを停止した。

　外殻に触れる。周囲の絶望が伝わってきそうな感覚に、ルイスは喜き悦えつに顔を歪ゆがめた。

　〝ガーゴイル〟は手に入らなかった。

　だが、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟を打ち倒した。

　そして〝朽ち果てし神の戦器エメス・トラブラム〟を手に入れた。

　有り余る功績だ。歓喜が彼の全身を押し包む。

　ルイス・マクレーンにとっては不死の王ノーライフキングも大いなる神エル・アギアスもどうでもよかった。忠誠などない、功績をあげること自体が目的であった。

　秘ひ蹟せきが欲しかった。

　若返りたかった。若返ったまま、いつまでも冒険家アドベンチユラーとして生きていたかった。世界にはまだ見ぬ秘境がある、まだ見ぬ財宝がある、まだ見ぬ古代の何かがある。

　それを求めた。

それが無くならない限り、死んでも死に切れなかった。

最長寿種族のエルフでありながら、彼はもっとも死を恐れた。老いを恐れた。

いつか、いつの日か──世界から、全ての『秘密』が無くなるその日まで生き続けるため、彼は己の魂を売った。

そして今回の冒険で、弟子を売った。

彼は人格者の親の元で真っ当に育てられた故ゆえに、そのことに対して良心の呵か責しやくは感じていた。

それなりに。

待ち望んだ不老不死、自分を待つ次の秘境、それらの歓喜がそんな下らない感傷を消し去っていた。

感傷、感傷に過ぎないのだ。

冒険家アドベンチユラーにとって、仲間は敵でもある。友情は打算で、相手を出し抜くことしか考えていない。

二百年生きれば、そういう世界なのだと理解できる。

だから、今回はルイス・マクレーンが出し抜いたのだ。

──何だよ、それ。

ギリィがポツリと呟く。心の声だ。

ルイスが「どうなさいました？」と応じた。

少年の怒りを秘めた声が、彼の脳を掻かき毟むしる。

──お前の心を、読んだ。

そう言った。だが、ルイスはそれでも平気だった。ギリィの力は強大だ。この状況下で装着者に逆らうということは、ギリィもまた永遠に海の底という事だ。

──酷ひどい奴、なんて惨ひどい奴！

「それはお互い様というものではありませんかな？　あなたは、ジニーを選ばなかった」

ギリィは低く呻うめいたあと、沈黙した。

「そうだ。あなたも私も裏切り者という点では同罪ですよ。当然ながらジニーもそうです。彼女はあなたを裏切った。だからあなたは彼女を裏切った。互いに敵対しただけです。そして、我々が勝利した！」

　━僕はただ、望んだだけなのに！　ただ、仲間が欲しかっただけなのに……！

「何かを望むということは、何かを捨てるということです。私もかつての仲間を捨てた、ギリィ様。だから次を求めるのです！」

　ギリィは沈黙する。ルイスは続けて言った。

「さあ、ギリィ様。次の王国が待っています。浮上しようではありませんか？」

　そう言った瞬間、深海の底から〝ガーゴイル〟が浮上した。たてがみがゆらゆら動き、溢あふれんばかりの殺気がルイスに叩きつけられている。

「遅かったな、アーネスト。お前の主も、〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟も全て終わりだ！」

　アーネストは〝イエスラス〟を見た。

　絶望のあと、すぐさま希望を見み出いだした。

　曲刀シヤムシールを構え、狙いを定める。

　こちらに正面を向いている〝イエスラス〟━その船底に存在する巨大な氷の壁。

　消耗が激しい、体内の魔マカナが枯こ渇かつしそうだ。通常ならば少し休めばいい。だが、この状況下では水圧に押し潰つぶされかねない。

　生命を通貨チツプとして、アーネスト・ヒギンズは賭かけに出た。

　〝遠えん視し〟でカレンが見てくれていることを願う、否いな、見ていることを確信する。

　━我が存在は、銃弾bulletなり。

　突撃した。

　魔マカナの膨ぼう大だいな噴出。

　〝ガーゴイル〟は螺ら旋せんを回りながら音速を凌りよう駕がする

速度で爆走する。曲刀シヤムシールの切先が海水を切り裂いていく。

「な、あぁぁぁぁぁぁ――――――ッ!?」

　途中に位置していた〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟の残ざん骸がいが巻き込まれ、粉々に弾けた。

　分厚い氷に到達する。

　激突―凄すさまじい衝撃、振動、全身が轟とどろき、鎧よろいの内部が奇妙な軋きしみをあげた。圧あつ潰かいへの恐怖を無理矢理に抑え込み、アーネストは吼ほえた。吼えて、〝イエスラス〟に残る者たちのことだけに神経を集中させた。

　そこには主がいる。色々なものを見せたい少女がいる。大切な仲間もいる。さあ、命を躊ちゆう躇ちよ無く投げ捨てろ、アーネスト・ヒギンズ。この〝イエスラス〟には、その価値がある！

　回転する刃、螺ら旋せんを描く銃弾と化した〝ガーゴイル〟は氷を引き裂き、断ち割り、破砕していく。曲刀シヤムシールが限界を越えて砕け散った。

　だが、スクリューにはまだ分厚い氷が付着している。剣はもうなく、後に残ったのは己の拳二つだけだ。

　〝ガーゴイル〟はスクリューに飛びつき、右腕を弓のように引き絞しぼる――さらに力を振り絞り、祈るように拳を氷塊に叩きつけた。叩きつけた瞬間、全身の力が抜けて倒れかけた。

　極度の疲労がアーネストの軀からだを苛さいなんでいた。力が抜け、氷で軀が滑り落ちそうになるのを、どうにか堪こらえた。

　呼吸が荒く、汗が吹き出る。あちこちの臓器が痛めつけられ、ガタがきている。

　このまま眠ってしまうのもいいかもしれない。そんな事すら脳裏に浮かぶ。



「だが。俺は、生きている」

　そう呟き、どうにか上半身を起こした。氷は──氷は、ひび割れている。あともう一押しだ。

　あともう一押し。それができれば、力尽きても悔いはあるまい。

　もう一度、もう一度だ。アーネストは、今しがた殴なぐりつけた部分から移動した。二箇所を破壊すれば、この氷塊はさらに脆もろくなる。

　拳を握れ、調息し、筋肉と神経と骨に伝えろ。〝これを破壊しろ〟と。

　そして、後は祈れ。

　神にじゃない。ジニーと、我が主カレンにだ。

　祈って、拳を叩きつけた。震動と衝撃、氷塊はひび割れ一つない。もう一度殴りつける。

　……今度は上う手まくいった。〝ガーゴイル〟は──アーネストは、スクリューの氷塊を完全に粉砕した。

「氷が吹き飛びました！　エンジン稼か動どうしてください！」

「分かった……！」

　精霊封印式エレメンタルシールスタイルエンジンが全力で稼働する。

　スクリューに纏まとわりついていた氷を跳ね飛ばし、急速に浮上し始めた。

　〝イエスラス〟は、空へと昇っていく。彼らは、大地ゴルトロツクへと戻るのだ。

　それを見たアーネストは満足して目を閉じる。残念だが、己の力は全て出し切った。生命すらもチップとして差し出した以上、もう動きようがない。残り時間、五分といったところか。

　〝ガーゴイル〟は沈んでいく。比較的ゆっくりと沈んでいくその最中、アーネストはルイスとギリィを見た。

「…………ぁ」

散らばったルイスの欠片かけらが動き出した。ギリィの修復能力故ゆえか、首と脊せき髄ずいだけの姿となってもなお、どうにか生き延びている。

「い、やだ……いやだ……死にたくない、死にたくない、死にたくない！　まだ、まだ私は見ていない……！　ソレイシアの黄金の森を、ラドリースの地下王国を、ニヴェンの結晶洞どう窟くつを……！　私はまだ手に入れてない……リケートの銀の精霊像を！　ドボルザールの斧ふ墓ぼを……！　あ、ああ……いやだっ！　いやだいやだいやだっ！　死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくないよぉ……！　わた、しは……」

ルイスが蕩とろけた頭で必死になって考えて、ギリィに縋すがる。

「ギリィ様……ギリィ様……どうか、私を……復活、させて……」

□□……。

「ギリィ様……！」

ギリィはルイスの言葉に一切応じず、自身の幻影を生み出した。

だが、魔マ力ナが足りないのか、その虚像は時折乱れる。その虚像が、〝ガーゴイル〟の元へと歩いていく。

ギリィはアーネストに手を触れた。〝ガーゴイル〟の沈ちん降こうが止まる。ゆっくりと体勢を変えて、〝ガーゴイル〟はギリィと向かい合った。恐怖はなかった、ギリィに攻撃の意思は見えなかったし、攻撃されたらされたで、死ぬのが早まるだけだった。

「──黒騎士、聞こえるかな？」

「……ああ」

アーネストは念話テレパスに応じた。契約を結びもせずに、こうして会話が可能なのは便利だな、と何となく思った。

「──僕は、間違っていたのかな」

「……ああ」

「──僕は、また一人になるのかな」

「…………ああ」

虚像の表情がくしゃりと歪ゆがんだ。泣き出しそうな顔、アーネス

トは少年が無性に哀れになった。だが、嘘をつくことはできなかった。

　そんな嘘を、ギリィが望んでいるとも思えなかった。

「でも、いいんだ。いいんだよ、黒騎士。僕は…………僕は、良くないことをしていた」

「……ジニーを救ったことは、悪くなんかない」

「ありがとう。言い訳になるかもしれないけど、僕は彼女を喜ばせたかっただけなんだ。本当だよ、信じてくれる？」

「信じるさ。ジニーは、お前を一番の友達だって言っていた。お前に願い事を叶えてもらうばかりで、自分は何一つしてあげられなかったと、ひどく悔いていた」

「……違うよ。彼女は僕を友達だと言ってくれた。ただ、それだけで良かったんだ」

「……そうか」

「ただ、それだけで良かったのに。どうして僕は、あんな事をしてしまったのだろう」

「人ならば……そういう事もある」

「僕は人なんかじゃないよ？」

「人に限りなく近い存在だ」

　少年はその言葉にくすりと笑った。

「ありがとう。黒騎士。ねえ、一つ頼まれてくれないかな？」

「何を？」

「……ジニーに謝っておいてくれない？　ごめんね、って。それから、今までありがとうって。僕は、君と過ごした日々が本当に幸せだったんだって」

　アーネストは少し悲しげに、その言葉を拒絶しようとした。

「すまない。俺には、もうその力が……」

「僕の力を分けてあげる」

　そう言って、ギリィは手から魔マカナを放出した。〝ガーゴイル〟の周囲に結界が張り巡らされる。あの広大な〝王国キングダム〟を作り上げたギリィだ。たった一人を守るくらいは、何でもなかったのだろう。

「これで、戻れるかい？」

「……ああ、だけど」

　──アーネストは、その言葉を伝えようとした。「君も一緒に来ないか」「君も、共に地上で生きてみないか」と。

　だが、ギリィはまるでそれを察さつ知ちしたかのように、無言で悲しげに首を横に振った。

　アーネストは、ギリィの気け高だかい決意を見て取った。それ以上、何も伝えられなかった。だから、代わりにこう言った。

「ジニーに……先ほどの言葉を、必ず伝える」

　ギリィは少し不安げに眉まゆをひそめて言った。

「信じて、くれるかな？」

「信じるに決まってるさ」

　アーネストは断言した。

「……うん、よかった」

　幻影が足下から徐々に消えていく。

　最後にギリィは、思い出したように尋ねた。

「黒騎士。君の名前は？」

「アーネスト・ヒギンズ」

　そう、とギリィは呟き──それから、万ばん感かんの想いを篭こめて彼に告げた。

「……さようなら、アーネスト」

「……さようなら、ギリィ」

　幻影が消えた。

　ルイスが絶望の悲鳴をあげる。ギリィとルイスは墜おちていく。

　誰にも邪魔されぬ、そして何も存在しない１０００ｍモールの海底へ。

第八章

「浮上角度五度。微速前進──現在、深度10mモール」

「当とう該がい海域に異常なし。巨大生物の姿なし、潜水艦を含めた船せん舶ぱくの姿なし」

「角度そのまま、エンジン出力は15％」

〝イエスラス〟は動き続ける。既に危機は脱したものの浮上するまで気は抜けない。

怯えるジニーを抱きしめつつ、カレンは〝遠えん視し〟で周囲を窺うかがっていた。

「……カレン、アーネストは……？」

「うん……まだ、来てないわ」

彼の名前が出るたびに、心臓が喉のどから飛び出しそうだ。呼吸を整え、〝遠視〟で深海を覗のぞき込む。だが、やはり無駄だった。

「全員備えて。〝イエスラス〟浮上！」

カレンの言葉と共に、〝イエスラス〟は一瞬、宙に浮いた。まるで鯨くじらが飛び出して呼吸するように、艦首は海面を斜めに貫いた。

「エンジンそのまま。〝イエスラス〟全ぜん箇か所しよチェック」

「後部操そう舵だ室しつ、異状なし」

「機関室、異状なしだ」

「魚雷発射管室、異状ありません」

「バラストタンク、異状なし」

「エンジン停止。…………〝イエスラス〟浮上完了」

その声に、生き残った乗組員から安あん堵どのため息が漏れた。

喜びの声は少ない。それほど疲れ切っていたということもあるが、一部の者にとっては、最後の生存者が未だに確定できないからであった。

アーネスト・ヒギンズ。

〝ガーゴイル〟を着装した彼があの巨大な〝骸の竜ドラゴンゾンビ〟と激闘を繰り広げていたのは、カレンの〝遠視〟で分かった。

　動けなくなっていた〝イエスラス〟を覆おおった氷塊を、粉々に破壊したことも。

　だが、その後はどうなったのか──。カレンは浮上する寸前、沈み行くアーネストを見た気がした──否いな、アレは幻想だ。自分の下らない幻覚だ……カレンはそう思い込むことにした。

「浮上したのよ。ジニー！　艦かん橋きように行きましょう！　一緒に外を見なきゃ」

「うん。行く！」

　ジニーが喜び勇んで、カレンと手を繋つなぐ。艦かん橋きように向かう途中で、シャドウフィールドとすれ違った。

「どうした？」

「ジニーと艦橋に出ようと思います。何か問題ありますか？」

　シャドウフィールドは肩を竦すくめて言った。

「……落ちないように注意してくれれば構わんだろう。ジニー」

「うん」

　シャドウフィールドが微かに口元を微笑ほほえませて言った。

「ようこそ、〝外の世界ゴルトロツク〟へ」

「……ありがとう、ブレイド。ばいばい」

　ジニーは微笑み、可愛かわいらしく手を振った。

　シャドウフィールドは、そこに奇妙なものを見た。少女の微笑みは歓喜ではなく、悲哀が混じったものだった。

　まるで別れを惜しむような笑みだった。おおよそ、少女がして良い笑みではない。子供は、別れの際には泣くものだ。泣いていいものだと決まっている。

　──ああ、やはりそうか。そうなのか。

　もっと何か言ってやれば良かったと、シャドウフィールドは後悔した。だが、それを彼女が望んでいたかどうかは定かではない。

　願わくば全てが間違いであるといい、そう思った。何事もなく昇しょう降こう筒づつから降りてくるといい。

　だが──。

「お疲れ様でした、教官。……どうしました？」

　コゼットの問いかけに、シャドウフィールドは首を横に振った。

「いや……何でもない」

　シャドウフィールドはほんの少しの哀しさと虚しさを滲にじませて呟いた。

　昇降筒を昇り、ハッチに手を掛ける。このハッチを開けば、外の世界だ。大地ゴルトロツクは見えずとも、ここには本当の空と太陽がある。

「行くわよ、ジニー。準備はいい？」

　ジニーはぎゅっと己の手を胸に当てて、勢いよく頷いた。

　カレンは笑って、ハッチを開く。

「あ────」

　眩まばゆい光が、二人の目に差し込む。

　艦かん橋きように昇ると、世界は淡い橙だいだい色に染まっていた。

　水平線の向こうに、夕陽がゆっくりと沈んでいく。

　ジニーは、呆ぼう然ぜんとその姿に見とれていた。澄んだ夕陽は沈みつつ、温かい穏やかな光を投げかける。昼の名な残ごりの光、夜闇と交じり合って少しずつ色を失っていく光を。

　カレンがジニーの手を握り締め、優しく解説する。

「あれが、太陽……お日様よ。綺き麗れいでしょ？」

　眩しげに目を細めて、ジニーはカレンに尋ねた。

「うん……。ねえ、あのお日様は海に落ちていくの？」

　カレンは少し迷って、頷いた。

「そうね。海に落ちて、溶けていくわ……このオレンジの綺麗な光は

ね、お日様が海に溶けていくその一瞬しか見られないの」

　カレンは一息入れて、続けて言った。

「でも、それは永遠じゃない。海に落ちたお日様はまた昇ってくるの。暗い夜をゆっくりと明るく輝かせていくの。黒い空は綺麗な紫色となり、次第に青さを取り戻していって朝が来るわ」

「本当──きれい。外の世界って、すごい」

　目を輝かせるジニーは、涙ぐんでいた。

　カレンは微笑ほほえみ、背後に回るとジニーの両肩に手を置いた。

「まだまだジニーに見て欲しいものはあるわよ。朝の美しさ、昼の華やかさ、花の美しさ……みんな、みんな見てもらいたいわ」

「うん……」

　ジニーは頷き、何か言おうとして口を開こうとした──が、それはそのまま驚きの声に変わった。

「カレン、見て！」

　カレンが振り返る。振り返ると同時に、ジニーが指差した方向の水面が乱れ、海水が間かん欠けつ泉せんのように噴き出した。

「あ…………！」

　〝ガーゴイル〟と呼ばれていた黒騎士が、空に浮いていた。禍まがが々まがしい姿なのにもかかわらず、夕陽に照らし出されたその姿は奇妙に美しく思えた。

「……帰って、きてくれた……」

「アーネスト……アーネスト！」

　ジニーとカレンの声に、〝ガーゴイル〟は気付いたように手を振った。その行為は、彼がアーネスト・ヒギンズであることを証明するものだった。

◇

　アーネストは鎧よろいを脱ぎ終わり、一つ一つをバラバラに分割してハッチの中へどうにか差し入れた。その作業が終わると、太陽は水平線の向こうに今にも没してしまいそうだった。

「お帰りなさい、アーネスト」

「お帰り、アーネスト！」

　改めて、二人がそう言って彼を出迎えた。いま、三人は狭苦しい艦かん橋きようを抜け出して、ハッチそばの平坦な部分に佇たたずんでいた。アーネストは既に虎人ワータイガーから、人の姿へと戻っている。救難信号を受けた船が来るまで、ここで待機しなければならないようだ。船が来るまで、おおよそ一時間というところらしい。

　しばし押し黙っていたアーネストがすぅ、と息を吸って言った。

「遅くなって、その、申し訳ありません、お嬢様……」

「体は？」

「……私は頑がん丈じようですから」

　アーネストは、ポリポリと情けなさそうに頭を掻かいた。

「あとで、ササキに見てもらいなさいよ？　生なま兵びよう法ほうは何とかって言うでしょ」

「はい、畏かしこまりました。……それから、ジニー」

「うん」

「ギリィから、伝言なんだ」

「……」

　ジニーが不安げにアーネストを見つめる。アーネストは自分の顔がちゃんと微笑ほほえんでいて、彼女を不安がらせてないか、怖がらせていないか、鏡を見たいと思った。

　アーネストはゆっくり、一言一言を名な残ごり惜しむかのように告げる。

「ジニー、ごめんね。それから、今までありがとう。僕は、君と過ごした日々が本当に幸せだったんだって……そう、言ってくれと」

「──ギリィ」

　ジニーが驚きに目を見開く。

　アーネストは思った──今の自分はきっと、上う手まく笑えていると。

「彼は、ちゃんとジニーと呼んだんだ。君のことを」

　ジニーの目を、そっと涙が伝う。流れた涙はあごを伝って、〝イエスラス〟に滴したたり落ちた。

「ああ……よかった……」

　泣きじゃくるジニーの両肩に、カレンがそっと手を当てた。

「良かったね、ジニー」

「ギリィにも、ギリィにもこの風景を見せてあげたかった。ギリィだって、ずっと見たかったのに……！」

「……ギリィは、分かっていたんだ。自分が行ったら、どうなるかを」

　──きっと世界は綺き麗れいで美しいんだろう。

　──きっと僕にとっての世界は、眩まばゆくてたまらないに違いない。

　──だけど。いや、だからこそ。

　──僕は、海こ底こに残らなくては。

「ギリィは優しいただの人間になれたかもしれない。ここで楽しく過ごせたのかもしれない。でも……彼には、力があった。この世界を変えてしまう力が」

「……」

「だけど、ギリィはやはり優しかったんだよ、ジニー。……彼なら、地上に来ることもできた。いくらでも方法はあったんだ。でも、彼は選ばなかった」

「どうし、て……」

「彼を悪用しようとする奴らがいるからだ。彼を捕まえて、彼を操って、彼を道具に使おうとする輩たちが」

「……じゃあ、ギリィは……」

「ギリィは、それが厭いやで厭で仕方なかった。だから、だから……」

　アーネストは哀しかった。ただ、哀しかった。流れる涙を我慢する

ことはできなかった。

　ジニーを抱きしめて、アーネストは言った。

「だから。ギリィは、向こうを選んだんだと思う」

「うん……」

　すまない、とアーネストは思った。ジニーとギリィの幸せを壊したのは己だ、という罪悪感が頭について離れない。

　もちろん、ギリィは人を殺した━ジニーのためとはいえ、それもまた罪だ。だが罪があるからといって断じて悪ではない。悪とは、ギリィを利用しようとした愚かな者のことだ。

　彼の純真さを知っていてなお、策を弄ろうしたあの男に。そして、あの男が信奉する邪じや宗しゆうこそが完全な悪だ。

　ああ、だけど。もっと、もっと別の方法が━。

「アーネスト。……アーネスト、お兄ちゃん。悲しまないで、お兄ちゃんのせいじゃない。わたしのせいなの、ギリィも悪くないの。お兄ちゃんは、間違ってなんかない」

「ジニー……？」

　跪ひざまずいてジニーを抱きしめていたアーネストが、その口調に奇妙な不安を感じて離れた。

「ああ━やっとお兄ちゃんに、言えた。よかった」

　そう言って、ジニーははぁと大きく息を吐いた。笑顔を見せる。それはシャドウフィールドが見た、あの悲哀に満ちた笑みだった。

「ジニー……？」

　アーネストは悲哀だけではなく、そこに浮かぶ満足感をも読み取っていた。

　━わたしは、ちゃんとやるべきことをやった。

　━わたしは、ちゃんと言うべきことを言った。

　ジニーは誇らしげに、胸を張っている━そう見えた。

「ジニー……ねえ、ジニー。あれ、ねえ、やだ、ちょっと、ジニー……！」

　最初、カレンはジニーが輝いて見えるのは夕陽のせいだと思った。

　だがしかし、彼女の姿が薄ぼんやりと見えているのは気のせいではなかった。彼女の姿は、陽が落ちるのに合わせるみたいに消え去ろうとしていた。

「……ごめんね、カレン、アーネスト。わたしは……」

　──わたしは、ここで、おしまい。

　ジニーは確かにそう告げた。

「……何を、言ってるんだ？」

　困ったようにジニーは微笑ほほえむ。

「何となく、分かってた。わたしはここで終わるんだって。そういう……きまりなんだって」

　ジニーはカレンを向いて言った。

「カレンは分かってたでしょ？　何となくかもしれないけど」

「……ジニー……」

「お嬢様？　どういう……事、です？」

　ジニーが手でカレンに詰め寄ろうとするアーネストを押し留めた。

「アーネスト。あのね、わたしはね、もう、死んでるの。ずっとずっと前に、死んでいたの」

「……それを、ギリィが蘇よみがえらせたんじゃ……」

　アーネストはそう思っていた。彼の恐るべき力があれば、人を一人蘇らせることなど簡単だろう──あるいは、そう思いたかったのかもしれない。

　彼女は生きている。彼女は紛れもなく生きている。泣き、笑い、怒り、悲しむことができて、抱きしめると温かい──これを、生きていると言わずして何だというのだ。

　だが、ジニーは首を横に振った。

「ギリィはね、わたしの心……魂っていうのかな？　それを、死んだわたしの中にいれただけ。ギリィが……その、あのわるいひとといっしょになったとき、わたしはわたしの中にいれなくなったの」

　ジニーは死んだ後に契約されたという、前ぜん代だい未み聞もんの契約者であった。

　ギリィの驚嘆すべき修復、空間構築能力もあって、ジニーという少女は生き続けたのだ。他の屍しかばねたちのように、腐ることもなく、思考が胡う乱ろんになることもなかった。

　だが、それもギリィがルイスと契約した瞬間に終わりを告げた。

　ギリィはそれを覚えてすらいなかった。彼に契約したという記憶はなかった。ただ自分の力によって助けることができたのだと、そう信じていた。

　二人は知らぬ内に契約を交わし、知らぬ内に契約を断っていた。

　ジニーは微笑ほほえみながら言う。

「本当は、あのとき死んだはずなの。でも、でも……きっと、祝福の精霊ジニー・リップが助けてくれたのかもね。アーネストと会うまでは、アーネストにあの言葉を言うまではってがんばれた」

「嘘だ……！」

　アーネストは跪ひざまずいて、ジニーの顔に両手を当てた。

「うそだと言ってくれ、ジニー」

「わたし、お友達に……うそは言わない」

「俺はまだ……君に、何も見せてない」

「ううん。いっぱい見せてくれたよ、アーネスト」

　ジニーはカレンを振り返った。カレンは口を開くこともできず、ひたすら泣き続けていた。

「カレンもありがとう。こんな……すてきな景色を見ることができたのは、あなたのおかげ」

「違うわ！　私はまだ何も見せてない！　見せてないのよ、ジニー！　真っ青な空……白くて大きな雲……！　穏やかな緑の森も見せたい、人が溢あふれかえるような街も見せたいわ！　それに……それに、それに……！」

　ジニーは首を横に振った。

「わたし、これだけでいいの。わたしの願いはみんなかなった。すて

きなお友達がたくさんできたから……それで、いいの」

淡い光のように輝くジニーの顔におおよそ後悔は見られない。ただ、友人と別れるための寂しげな感情だけが浮かんでいた。

寂しい……そう、寂しかった。

哀しくはない。

たった数時間だったが、彼らと過ごした日々はかけがえのないものだった──ジニーは思った。それに、その数時間とギリィと過ごした数百年は本当に楽しかった。

思えば何と幸せな人生だったのだろう。

そうだ、哀しむべき出来事など自分には何もなかったのだ、ジニーはそう思った。

だから、決して哀しくはない。この別れに胸を抉えぐり取られるような悲哀はない。

ただ──少し寂しいだけ、ただそれだけだ。

「──本当にありがとう、アーネスト、カレン」

「待っ……」

ああ、もう待てない。何もかもが遠ざかる。

躯からだは羽根が生えたように軽く、心が夕焼け空に広がり解ほどけていく。

最後はありったけの笑顔を。焼き付けるように。

──さよなら！

ジニーは輝く無数の粒子となって消えていく。アーネストは反射的に手を伸ばしたが、摑つかめぬまま、空を切った。

そして、アーネストは見た。

つられて空を見上げたカレンも確かに見た。

橙だいだい色の輝きを持つ人の形をしたものが、ゆっくりと宙を旋回している。

その中央には、ジニーの姿をした光の粒子。

「ジニーリップ……」

　ジニーリップ。祝福の精霊ジニーリツプたち。彼らは天に昇る無む垢くな魂を愛いとしむために、地に生まれる無垢な子を祝福するために現れるという。

　伝説だった。

　伝説だと思っていた。

　伝説などではなかった。

　ジニーは祝福されながら──天に、昇っていく。

　その鮮烈な光景を忘れることは一生涯ないだろうと二人は思った。

終　章

　全てが終わった。

　ディルビック海域については、いくつかの事実を除いて公表された。それはギリィの正体であったり、目的であったり、そしてジニーという少女の存在についてだが、それ以外は大まかに全てが明かされた。

　さすがにどのメディアも懐かい疑ぎ的であったし、何よりも陸軍及びＮＣＩＡが〝ガーゴイル〟プランについて公式に否定したためにますます調査隊の報告に信用が置かれなくなった。

　だが、ここで業ごうを煮やして現れたのがブレイド・レイ・シャドウフィールドである。

　彼は公式に会見して、カレン・グリムスターが述べたことは全て真実であると証言した。そして、自身の正体も明かした上にその調査隊に同行したことも明らかにした。

　調査内容の真偽についてなど、全てが吹き飛ぶような報告であった。

　――あの〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟が危険極まりない冒険に出かけていた！

　批判と賞賛の両方を集めつつも（苦言を呈するのは、大抵が年寄りだった）、シャドウフィールドのお陰で、報告が真実であることが証明された。

　ディルビック海域は名前こそ残ったものの、横断する船の数は徐々に増え始めた。

　遺族たちは、グリムスター社に対する告こく訴そを一斉に取り下げた。

　乗組員の遺族たちは、グリムスター社に名めい誉よ回復の感謝声明を発表した。

　同時に、〝ガーゴイル〟の存在も明らかにされた。ワイズマンは自分の潜水艦を利用したことに対して激怒し（無論、本心からではない――激怒している、と述べただけだが）、お陰でこの計画を立案した陸軍及びＮＣＩＡの上層部はその首が飛んだ。

　ルイス・マクレーンが聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいの信徒で

あったことは、大学に衝撃を走らせた。

　ＦＢＩは直ちに捜査を開始して、彼とつながりのあった幾人かの信徒を引っ張ることができた。教え子であったササキ・ユウマやカレンも尋じん問もんを受けたものの、無関係であることは割りと早くに証明された。ルイスに殺されかけたという事実が大きかったからだ、とカレンは思った。

　サティとアーネストは、蟲ワームの除去手術を受けた。サティは元通りの思考を取り戻せたが、二度と軍務に就く気は起きなかった──引退し、家業である薬屋を継いで暮らすそうだ。

　フィールタン兄弟は相変わらず、のんきな冒険家アドベンチユラーとして名を馳はせている。この冒険記について本を書かないか、というオファーを予あらかじめ受けていたのはいいが、冒険の間にすっかりそれを忘れており、すったもんだの末に危うく訴そ訟しようを仕掛けられる羽目になっていた。

　コゼット・レングランスはフォルテンマイヤー家に帰還した。優しい執事と主に囲まれ、再びメイドとして働き始めている。しばらくの間、メガロドンに車で突とつ貫かんした話は主と、その幼おさな馴な染じみであるエルフの少女を震え上がらせた。

　カレンは両親の許可を得て、庭のとある場所に墓を作った。ジニーの墓標だ。見晴らしの良い、花が咲き乱れる場所に。

◇

────英雄暦１９３９年鉄てつ鎚つい月づき（11月）ノ１日

オセロットシティ・フォルテンマイヤー邸会議室

　カレン・グリムスターの周囲は色々と騒がしいものがあったが、二か月経ってようやく落ち着きを見せ始めた。

　秋も落ち着きを見せ始めた頃、〝イエスラス〟の元乗組員たちはフォルテンマイヤー邸へと召喚された。

「さて、と──」

　そう言いつつ、セルマ・フォルテンマイヤーは一人一人〝イエスラス〟乗組員を見回した。

　カレン・グリムスター、アーネスト・ヒギンズ、ユウマ・ササキ、サティ・モントルフ、ルイ・フィールタン、ベルベット・フィールタン──。

誰もがカチコチと石せつ膏こうで塗り固められたのかと思うくらいに緊張している。その様子を見て、セルマがくすりと笑った。

シャドウフィールドは彼らから離れた場所の壁にもたれかかり、緊張する彼らを面白そうに眺めている。体色は黒のままだ。もう化ける必要もないからだろう。

コゼット・レングランスは執事と共にセルマの傍そばに控えている。その表情は、穏やかに笑みを浮かべる執事とは対照的なほどに堅苦しいものだった。

「そう緊張しないで、六人とも」

──そんな無茶な。

六人は一斉にそう思った。何しろ、眼前に立つ少女はこの国最高の権力者である。カレンは同じ年くらいであろう少女の落ち着きように、自分が情けなくもなった。

（……ああ、何て自分と違うのかしら。うう、いくらシャドウフィールドに言われたとはいえ、この格好のまま来るんじゃなかった……）

アーネストの方は、セルマの隣に立つ執事──先ほど屋敷を案内する際、リック・アロースミスと名乗った──を羨せん望ぼうの面持ちで眺めていた。

（……羨うらやましい。ああいう風になりたい）

「ともかく。あなたがたの健闘に敬意を。よく、このブレイド・レイ・シャドウフィールドを守り通してくれました」

「は、はい！」

──実際には、あの人はほぼ自分一人の力で生き残ったんだけどなあ。ルイスを倒したのは、アーネストだし。

カレンはそう思いつつも、震えながら勲くん章しようを受け取った。

〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟が授ける名誉勲章メダル・オブ・オナー──民間人に与えられる勲章では、最上級のものである。

そして、セルマ・フォルテンマイヤーは〝イエスラス〟による航海で亡くなった者全員に勲章を授ける旨むねを改めて発表した。

「ルイス・マクレーンは除きますが。それに……彼も私からの勲章など厭きらうでしょうしね」

　上品な笑みを浮かべつつ、セルマはそう言った。

　そして四人が退出し、後には二人──カレンとアーネストが残された。

「さて、と。ここからは堅苦しい事は抜きよ。ミス・カレン」

「はっ、ははははいっ」

　カレンが背筋を伸ばす。

「ありがとう。コゼットを──私の友達を守ってくれて。本当はその行為に名誉勲章あげたいんだけどねえ」

　くっくっく、と先ほどとは違った笑みを浮かべるセルマ。

「お嬢様、それは私の立つ瀬がございません……」

　はぁ、とため息をついてコゼットが言った。

　リックが続けて言う。

「それからお嬢様、地が出ています。堅苦しいことを抜くのもほどほどに──」

「いいのよ。大体ねえ。ここだけの話、シャドウフィールドなんて殺しても死なないんだから」

「おーい、聞こえてるぞー！」

「……第三者が聞いたら国際問題になりかねない発言はご勘かん弁べんを」

「……」

「……」

　呆あつ気けに取られているカレンを尻目に、セルマはにこやかに告げた。

「ミス・カレン」

「は、はい」

「おめでとう。あなたはグリムスター家の名誉を守り通せたのよ」

「あ……はい！　ありがとうございますっ！」

　セルマはカレンの手を握り、ぶんぶんと勢いよく振った。カレンはその言葉に感動し、その日は遅くまでセルマに自身の冒険談を語った。

　その間、アーネストはじっと目をつむって傍かたわらに控えていた。カレンは、緊張しているのだろうと思っていた。それはある意味で正しくもあったが、間違ってもいた。

――――英雄暦１９３９年鉄鎚月（11月）ノ11日

ソレイシア共和国・ワイズマン邸

「久しぶりだね、カレン・グリムスター」

「お久しぶりです、ミスター・ワイズマン。ご多忙のところ、恐縮です」

「いやいや。帰還当時はどうにも慌あわただしかったからね。一度ゆっくりと話したいところだったよ」

　ワイズマンは穏やかな顔でソファーに座り、カレンと向かい合う――とはいえ、彼女は巨人の顔を見上げっぱなしなので、やたらと首が辛つらかったが。

「〝イエスラス〟の調子はどうでしょうか？　私たちが酷こく使ししたせいで、壊れてなければいいのですが」

「ああ、既に整備は完了しているよ。外殻にほんの少し傷がついた以外は問題ない。しかし、薄く加工しているとはいえ、アダマンタイトに傷をつけるとはねえ」

　感心したように、ワイズマンは何度も頷いた。

「メガロドンだ、とシャドウフィールドから聞いているが――本当かね？」

「体長30mモールの鮫さめはメガロドン以外には存じませんので……」

「君は見たのかね？」

「はい。泳ぐ姿も、地上で動く姿も」

　ふむ、と呟いてワイズマンはニッカリと笑顔を浮かべて言った。

「それではミス・カレン。どうか、君の冒険話を聞かせて欲しいのだが」

カレンは無意識に首に手を当てつつ、引き攣つった笑みで頷いた。

ソレイシア共和国・ワイズマン邸 乾ドック

カレンが息を吐き出すと、白い靄もやになって空に昇っていった。空気はすっかり冷えており、カレンとアーネストは共に分厚い防寒着で身を覆おおっていた。

「冷えませんか、お嬢様？」

「大だい丈じよう夫ぶよ、この外套コート温かいんだから」

ワイズマンの質問責めからようやくのことで解放された二人は、〝イエスラス〟を見にこのドックまでやってきていた。

ドックはひっそりと静まり返っており、二人以外に人影はない。アーネストの耳には、ひゅるるるるという風鳴りの音が微かに響くだけだ。

共に沈黙する。あの航海を耐え切った〝イエスラス〟に畏敬の念を抱く。

そして、あの戦いで失われた者たちを悼いたむ。カレンはルイスですら、その死を悼んでいた。どうあれ、彼の死は世界的な損失であることは間違いなかった。

彼の作り上げた人生は贋にせ物ものであったが、彼が発見した〝歴史〟だけはどうしようもない真実だった。

「……ねえ、アーネスト」

「はい」

「私、教授が死んだことをどうしようもなく悲しんでいるわ。……おかしいかしら」

くすりと自嘲的な笑み。

「おかしいわよね、きっと。裏切り者なのに、私たちを殺そうとすらしたのに。あの人が死んだことが、どうしようもなく悲しいわ」

「……おかしくなど、ありません」

「そう？」

「はい。……教授は、確かに聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいの信徒であり、我々を殺そうとしました。ですが、同時にルイス・マクレー

ンは死ぬまで冒険家アドベンチユラーでしたから」

「……そっか」

　決して口に出さなかったが、カレンにはルイスの気持ちが少しだけ理解できた。

　日々老いていく軀からだ。

　日々衰えていく知能。

　エルフとて、それは例外ではない。万物に死と老いは等しく訪れる、それが定めだ。

　だが──老いれば、死ねば、冒険ができない。歴史を変える喜びも、遺跡を探検する際の胸が詰まりそうなスリルも、二度と味わうことができない。

　──それは、ルイス・マクレーンにとっては。愛すべき弟子たちを裏切ってでも、耐え難いものだったのだ。

　カレンはルイスを思って涙した。かわいそうなルイス、彼には冒険しかなかったのね。冒険の喜びを分かち合える、大切な存在もいなかったのね。

「お嬢様……」

「アーネスト、あのね。これは主としての命令じゃなくて、その、お願いっていうか、甘えっていうか、そういう類たぐいのものだから。気に入らなかったら、やらなくてもいい」

　──ああ、そんな言い訳じみたことを言っても無駄だろうに。アーネストは、絶対にこの頼みを断らない。

　カレンは手袋を脱いで、囁ささやくように告げた。

「手……………………つないで」

　アーネストは少し躊躇ためらったあと、手袋を脱いでその大きな手で包み込んだ。アーネストの手が、彼女の冷たくなった手をじんわりと温めていく。

「ん…………」

　寒くて助かった、とカレンはぼんやりとそんな事を考えた。この赤くなった頬もきっと、寒さのせいだと思ってくれる、と。

「アーネスト」

　当たり前に願い続けていることを、改まって言うのは、どうしてこんなに勇気がいるのだろう、とカレンは思う。

　例えば──母に産んでくれてありがとうとか、父にいつも働いてくれてありがとうとか、そういうのは日頃絶えず感謝しているのに、やっぱりどうしても口に出すことはできない。口に出さずとも分かってくれるはずだと、そう期待してしまって。

　──だけど。

　カレンは考える。これは、言わなくてはならないことだと。

　言わずとも伝えられることはある。だけど、それでも言って形に残さなくてはダメな事もあるのだ。

「アーネスト」

「はい？」



「…………いつもありがとう。あなたが居てくれて、あなたが私の執事で、本当に良かった」

「…………………………お嬢様」

　はぁ、と一息。またも白い靄もやとなって消えていく。

　もう一言、伝えなければ。過去ではなく、未来のことを。

「だから。これからも、ずっと、私のそばにいて」

　──よし、言えた。

　アーネストはしばらく目をきょとんとさせた後、改めて伝えられた言葉に溢あふれるような感謝と親愛の情を果たしてどう表現していいものか悩んで悩んで悩んで、ようやく搾しぼり出せたのはたった二言だった。

「はい。…………いつまでも」

　それでも、カレンには充分だったに違いない。

　かくして秋が終わり、冬が始まり──。

　アーネストは、一人の少女に出会った。

◇

────英雄暦１９３９年大おお鎌かま月づき（12月）ノ８日

ダウンロッド・プレモール大通り

　──頼まれていた買い物はこれで全部か。

　メモを取り出し、一つ一つを確認しながらアーネストは並木道を歩いている。道のあちらこちらに枯葉が大量に積もっていて、身も凍るような風が吹くたびにそれらが宙を舞った。

　こういう寂しくも綺き麗れいな風景も、ジニーに見せてやりたかった──アーネストはそんなことをぼんやりと考えた。

　今日は今までで段違いに寒さが厳しくなったせいか、ベンチに座っているような者は皆無だった。暦こよみでは冬に入ったばかりだが、この寒さは冬の一番厳しい日に勝るとも劣らなかった。

　風景の侘わびしさに合わせるように大きな背中を丸め、やや早足で

歩いていく。

「……」

　ふと気付くと、一番近くのベンチに少女が一人座っていた。こんな状況で珍しい、とは思うがそれ以上のことは特に考えない。

　意識から消して、彼女のそばを通り過ぎた。

「ちょっと待って、お兄ちゃん」

　その囁ささやきに、立ち止まった。

「何か──？」

　何気なしに振り向くと、少女は既にベンチから立ち上がっていた。ショートカットのあどけない美少女。種族はその矮わい軀くと耳の尖とがった様子から、メドラビットだと見当をつけた。

「ん。……おめでとう、って言おうと思って」

　少女がニコリと笑う。邪じや気きのない笑みは心を和なごませる──が、アーネストは疑問が棘とげのように引っ掛かった。

「……？」

　めでたい話など、何一つとして存在していない。そもそも、彼女は何者なのだ。

　胸中にほんの少し不安が過よぎる。眉をひそめつつ、アーネストは彼女に尋ねようとした。

「君は──」

「ディルビック海域から生還おめでとうって話さ、アーネスト」

　背中に怖おぞ気けが走った。買い物袋を手から離して、身構える。

　くすくすと少女が笑う──その笑みに、寒々しいものを抱く。

「何者─だ？」

「ボクの名前はマグダラ。ええと、何かもう薄々感づいているみたいだけど、聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいの信徒ね。ふふふ、察しのいいお兄ちゃんは話が早くて好きだな」

「……」

　腰のナイフにそっと手を掛ける──が、彼女はその動作を見ると、笑顔を浮かべたまま、アーネストを右手で押し留めた。

「やめてやめて。今日はさ、ちょっと世間話をしにきただけだから。戦うつもり全くなし、ゼロゼロゼロ」

「……」

　油断なく睨にらむアーネストに、マグダラはため息をついた。

「あーあ。せっかく、過去の思い出を語ろうとしたのになあ。お兄ちゃんの失った過去のこととか、話したいこと色々あるのに」

「……っ！」

　愕がく然ぜんとする。

　ニッとマグダラは笑った。

「興味ある、みたいだね」

　そう告げると、彼女はベンチに座り直した。そして、自分の隣をぽんぽんと叩く。

「さ、座って座って。色々と長くなるから、さ」

「……」

「あ、立っている限り、絶対話さないよ？　ボクを信頼してないって事なんだから」

　信頼できるものか、と彼は思った。このまま立ち去るべきだ、通報すべきだ、あるいは己の力で少女を捕ほ縛ばくするべきだ。それが正しい道であることは間違いない。

　アーネストは迷う。

　──忠告だ、都で育った者。過去を追うな、追えば醜みにくい傷を暴かれる。そう占いに出ておる。

　ああ、だがしかし。

　己という存在は、どこでどういう風に構築されたのか。己はなぜ、半分だけ虎人ワータイガーなのか。己の両親は、どんな人だったのか。

　知りたかった。

　自分の失われた記憶を振り払うために、現在に縋すがり続けてきた。だが、それももう終わりにしたいのだ。占いの通り、傷ついたとしても。

　過去を知った上で、今を大切にしたい──アーネストはそう思った。

　深呼吸を一度して、アーネストはベンチの端に座った。

　満足げにマグダラは指を立て、得意げに告げる。

「よろしい。それじゃ、どこから始めようかな……そうだね、まずは……」

「俺は……どこで、生まれた？」

　話の腰を折られたと感じたのか、マグダラは少しだけ不機嫌そうな表情でアーネストを見た。

「それは知らないよ。お母さんがどこで君を産んだのかは分からない。ただ、確実なことが一つだけこちらの記録に残っててね」

「……」

「君のご両親はね、聖導評議会の信徒だよ」

「な────に」

　凍りついた。

　マグダラは笑顔を絶やさない。

「つまりお兄ちゃんも、生まれた頃からずっと信徒だったって訳さ」

「ふ……ざけ……」

　怒鳴ろうとした瞬間に人差し指を突きつけられ、絶妙なタイミングで押し留められた。

「話は最後まで聞くコト！」

　牙きばを嚙かみ砕かんばかり唇を嚙み締め、沈黙した。

「証拠もあるよ。タクピカルの研究所に運ばれた〝ガーゴイル〟だけど、あれを開発したのはボクたちなんだ。だから、ちょっとした仕掛けを施したのさ」

「仕掛け──だと？」

　満面の笑み。

「あれはね、聖導評議会の信徒にしか装備できないんだ。それ以外の者が装備すると、三十分以内に死亡する。だから、この〝ガーゴイル〟計画はその内破は棄きされるはずだよ。あれに関するノウハウはボクたちが戴いただいたから別に構わないけどね」

　予想だにしなかった言葉に、アーネストは更なる衝撃を受けた。

　〝ガーゴイル〟──対魔銃兵装計画アンチウオーロツクウエポンプロジエクトの要かなめであり、アーネストにとっては命を救ってくれた……。

「……俺、は」

「そ。お兄ちゃんは三十分以上もったよね？　それが何よりの証拠。ああ、忠告だけどその事実は明かさない方がいいと思うなぁ。だって、それって自分が信徒だって言っちゃうのと同じことだからね」

　くすくすと嗤わらう。

　アーネストはしばしの沈黙のあと、言葉を振り絞しぼるように尋ねた。

「──なぜ、俺の記憶を封印した？」

「ああ、ボクたちはね、定期的にそういう作戦を行っているの。ええと、何だっけ。ニヴェンの用語なんだけど……〝草〟だったかな。ともかく、赤ん坊の頃からある程度まで育てて、そういう子の記憶を一旦封印するの」

「封印……何故だ？」

「まっさらな人として、色々なところに入り込むためだよ。最近は、精神支配の技術も発達してきたから、家族丸ごと偽の記憶を刷り込んだりもしてるけどね」

「……ッ！」

「そうしてね。お兄ちゃんみたいな人は、彼らはある程度社会的に認められた地位にいる信徒たちによって、各地に送り込まれるのさ」

　社会的に認められた地位にいる……信徒。

　自分を送り込んだ者。

　アーネスト・ヒギンズにとって、そしてグリムスター家にとって絶

対的な信頼を置かれていた男。

「それは…………教授、か」

「そう。君を保護した人物、ルイス・マクレーンみたいにね。ある者は警察へ、ある者は政治家へ、ある者は──」

　マグダラがアーネストを指差した。

「ある者は、執事バトラーとなる」

　しばらく沈黙。呼吸を整えて、告げた。

「……だが、そんな事をしてどうなる？　記憶を封印して、真っ当に働いている者に、お前たちは何をさせたいんだ？」

「そりゃ、色々とね。記憶を解放しなくても、警察官なら無意識レベルで情報を無視したり、黙殺したり、あるいは侮あなどったりさせることもできる。裁判官なら理り不ふ尽じんな判決だってできる。医者なら都合の悪い患者を抹まつ殺さつしたり、犯罪者ならわざと犯罪を起こさせることだってできるよ。理り不ふ尽じんに殺された人の遺族ってさあ、やっぱりみんな魂を売ってでも仇を取りたいみたいだからね！」

　ケラケラ笑うマグダラに、アーネストは本気の殺意を抱いた。

「──お前は。いや、お前たちは、最悪の下げ種す野郎だ」

　低く、唸うなるように告げた。握り締めた拳は、血が通っていないほどに白い。

「ボク、女の子なんだけどねー」

　平然と殺意を受け流すマグダラ。落ち着け、冷静になれ、とアーネストは自分に言い聞かせていた。

「まあ、要するにお兄ちゃんもその一人ってこと。例えば、ブレイド・レイ・シャドウフィールドに殺意を持たなかった？」

　その問いかけに、アーネストはギクリとした。

「それ、ボクたちの精神支配のお陰。〝末裔たる者ミスティック・ワン〟はいくら殺しても殺し足りないからね。心が弱いと、たまに実行してくれるから面白いんだよ？　ボクたちも忘れた頃にやってくれるから、嬉うれしさも二倍！　ほら、紛失したことすら忘れた物が発見されたときの喜びみたいなもので」

　そこまで言って、マグダラは何かを思いついたようにぽんと拳を平手で叩いた。

「あ、そうだ。お兄ちゃんの記録あるよ。持ってきてないけど、欲しいなら見せてもいいよ？」

「……必要ない」

「お父さんとお母さんの名前も書いてあるけど？」

「必要ない……聞きたいことはもう聞いた」

　━自分の過去は、所しよ詮せん過去でしかない。重要なのは現在であり、未来だ。

　アーネストは過去を知った今、なおさら痛切にそう思った。

　立ち上がる。ナイフを握り締める。

　少女の姿をしているために、わずかに胸が痛むが……彼女が聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいでもかなり重要な地位を占めているのは明らかだ。少なくとも、ルイスと同等かそれ以上の地位くらいの。

　捕ほ縛ばくできれば理想的だが━。

「じゃ、お礼をしてもらわなきゃね」

　マグダラも立ち上がった。

　瞬間━━背中に悪寒が走る。

「お礼━だと？」

「うん。君ね、〝草〟の中でもかなり重要な位置に一いち躍やく躍り出たんだよ。何しろほら、あの忌いま々いましいシャドウフィールドやワイズマンと、ある程度親しくなったでしょ？」

「な━!?」

「だからね。君なら無防備な彼に鉄槌を喰らわせることができるかなって」

　まばたきした瞬間、彼女はアーネストの懐ふところに入り込み、人差し指を額に押し当てていた。

　恐るべきスピードにもかかわらず、アーネストは嗤わらった。

「子供の頃の記憶が蘇よみがえった程度で、俺が貴様らの仲間に与くみすると思うか？」

　マグダラも嗤った。

「思うよ？　あのね、これはただ記憶を解放するだけじゃないんだ。記憶を再構成するんだよ。分かる？　お兄ちゃんにとっての楽しい、愛しい沢たく山さんの思い出……それは全部暗殺の瞬間を偽装するために存在したんだと理解するんだよ」

「な──に？」

「ふふふ。そりゃそうさ。過去の記憶を解放したからって、今を失うことを決断する人はそうはいない。でも、記憶を構築し直してそれらは偽装だったということにすれば話は別だ。これまで十三回やって十三回成功した。さ、十四回目はアーネスト・ヒギンズ──君だ」

　アーネストの笑いは消えた。

　全身の悪寒は間違いではなかったと思い知る。

「じゃ、頑張ってね。死んだら……うーん、献花くらいはしてあげるよ。じゃあ──」

　──〝覚醒ルガルタ〟──

　囁ささやき。

　同時に、脳が爆発したような錯さつ覚かく。

　記憶が加速する、加速して巻き戻っていく。

　朝にベッドに寝転がり、夜にベッドから立ち上がる。

　戻る、戻る、戻る、たちまちの内に戻っていく。潜水艦が浮上してあの不毛なる王国から脱出する、〝ガーゴイル〟を装備する、戦う、ジニーと出会う、ディルビック号を発見し、潜水艦から抜け出し、潜水艦が潜航する。

　ワイズマンのドックから出航する。

　訓練が終わり、訓練が始まった。

　ディルビック号が沈没したとの知らせが届いた。

　冒険をしていた。

冒険をしていた。

冒険をしていた。

執事となった。カレンに仕えた。

カレンに出会った。

ルイスに出会った。

歩いていた。

それら全ての思い出は――その瞬間を迎えるために。

幼い頃の思い出。

生まれて、育てられた。悪徳を善とし、良き行いを唾だ棄きした。

殺し合った。殴なぐり合った。死に物狂いで生き延びることを学んだ。

良識を徹底的に侮ぶ蔑べつした。

振り返れば全て下らない思い出――――――。

認識が逆転する。

記憶が再構成される。

恐怖は消えた。全ての綺き麗れいな思い出に唾つばを吐きかける。

汚い、汚い、全て汚い、薄汚れた思い出――。

「……あれ？」

きょとんとするマグダラの声。声は遠い。下らない。下らない考えだ。

「…………………そんな、訳がない」

そんな認識を、アーネストはかなぐり捨てた。

ジニーとの別れのときに見た景色。壮絶なまでに美しく、哀しかったあの風景。

「嘘……なんで、なんでだよ……！」

ジニーと別れ、カレンと二人で抱き合い泣きじゃくった思い出に、

誰が唾を吐けようか？

　否いな、断じて否だ。

　アーネストの周囲から、金こん色じきのオーラが立ち昇った。それらはアーネストを守るように、旋回し続ける。

「祝福の精霊ジニーリツプ……！　そんな、まさか……この男を守護している……!?」

　マグダラの愕がく然ぜんとした声。

　狼ろう狽ばいしていた彼女ははっと気付いて、後方に勢いよく飛び退いた。

　殺気──アーネストは猛たけり狂っていた。それは、グリムスター家と精霊使いシヤーマンによって施された封印を、己の心だけで引き剝がすほどのものだった。

「ワータイガー……！」

　ワータイガー──世界有数の稀き少しよう種族である彼らは、紛れもなく虎の力を持つ人間だった。

　鋭い爪、兇きよう悪あくな牙きば、鋼はがねのような筋肉、黄金の体毛──。だが、ワータイガーの恐ろしさはそれだけではない。

　最悪なのは、その恐るべき俊敏性。獲物が気付いたときには、首が吹き飛んでいる程の。

「……!?」

　消えた、とマグダラは思った。

　それほどの速度で彼は走った。走ったというよりは、ほとんど跳躍に近かった。それもほんの一瞬、刹せつ那なの出来事だった。

　凄すさまじいまでの戦闘経験がマグダラを救った。跳ねた、凄まじい跳躍力で一気に10mモールの間かん隔かくを取った。アーネストの一撃は空振った──マグダラはわずかに安あん堵どを抱く。

　だがしかし──ずん、という鈍く重い痛みが彼女の全身を襲った。脱力する、信じられない光景に目を見開く。

　恐るべき精密さを以もつて、アーネストの投げ放ったナイフは心臓を貫いていた。彼の持つナイフは特注サイズで、鉈なたのように大きく分厚く、そして剃かみ刀そりのように鋭かった。

　血が滴り落ちる。流れる。

「お、の……れッ！　貴様、なんか、に……！」

　マグダラは無意識下の動作か、ナイフを引き抜こうとした。

　マグダラが力なく仰向けに転がった。アーネストは虎の姿を保ったまま、彼女に近づいて脈が停止していることを確認し、ナイフを引き抜いた。

　沈黙。

　マグダラは動かない。虚空を見つめるその瞳に光はない。彼女は完全に死んでいる。少女を殺したことに、罪悪感はない。善悪という価値観は絶え間なく移り変わる、昨日の善が今日の悪になることも珍しいことではないだろう、それでも――この少女は、紛れもなく悪だ。

　己という存在を生まれた頃から利用していたことではない。

　その行為を嗤いながら説明したことだ。

　アーネストはそれが何より許すことができなかった。

（誰に連絡すればいいだろうか。連邦異端審問局か？　いや、まずはお嬢様に……）

　ほんの一瞬、彼はマグダラから目を離した。離しただけでなく、その存在を意識の外へと追いやった。

　だが、それはほんの一瞬のはずだった。きっと、一秒もなかっただろう。だが、その刹せつ那なでマグダラの姿は掻かき消えていた。

　呆ぼう然ぜんとする彼の周囲――並木の隙間から、苦痛混じりの叫びが聞こえる。

「あははははは！　参ったなぁ、もう！　心臓に一撃なんて、五十年ぶりだ！」

　ぐるぐると視線を移す。居ない、居ない、姿が見えない……だが、彼女の声はどこからともなく聞こえてくる……！

「このナイフは、ボクの油断が招いた一撃だ。受け取ってあげる。ああ、安心していいよ。別にこんな事くらいで君を恨んだりとかしないからさ！　痛いだけだ！　人が痛みを与えた者を恨むのは、痛みが死に繋つながっているからだ！　だけど、ボクは違うんだよ！　だから、君を恨んでなんかない！」

「何処にいる！」

　アーネストの咆ほう哮こうにも、彼女は笑い続けるだけだ。

「いつかまた、君に会う日が来るだろう！　今度こそ、君を更正させてあげる！　君のことが、ボクは本当に気に入った！　一緒に堕ちてくれる日を、楽しみに待ってるよ！」

　嗤わらう、嗤う、嗤う――。

　強風が吹き荒すさむ。風が轟ごう々ごうと鳴り響く。枯葉がアーネストの周囲を覆おおうように舞い続けた。

　高笑いが耳に響き、心が壊れそうになる。アーネストは負けじと吼ほえた。

「俺は貴様の血の臭いを嗅いだ！　貴様の血を覚えたぞ！　次に会ったとき、この血が流れているお前を必ず嗅ぎつける！」

「楽しみにしているよ、アーネスト・ヒギンズ！　次こそ、ボクが勝つからね……！」

　高笑いがゆっくりと薄れていく。

　薄れて掻かき消える。

　後には何も残されていなかった。ナイフを突き刺したとき、滴り落ちた血すらも。

　アーネストはしばし呆ぼう然ぜんと立ち尽くしていたが、やがて自分が帰宅途中だったことを思い出すと、慌あわててベンチ傍そばの買い物袋を抱えなおし、走り出した。

　あの鮮烈な血の臭い─悪の臭いが混じった彼女の血を、アーネストは一生涯忘れまいと、胸に刻み込んだ。

　走りながら、ふと思った─祝福の精霊ジニーリップが、自分を守ってくれたのだろうか。もしそうであるならば、きっとジニーのお陰なのだろう。彼女が、自分はだらしないから守って欲しいと思ったのかもしれない。

「……ありがとう、ジニー」

　呟つぶやきは誰の耳にも届かず、風に乗って運ばれていく。けれどいつか、その音節が天国ブレシグランドに届くかもしれない。

　アーネストはそう願いつつ、走り続けた――。

◇

――ディルビック海域 元〝王国キングダム〟地点

―また、一人になった。

少し辛つらかったけど、少し安心した。海底は落ち着く、とても落ち着く。ただ、目を開けていると退屈ばかりが募るので、仕方なく少し眠ることにした。

どれくらい眠れば、許されるのだろうか。

―とりあえず、二千年眠ってみよう。

二千年くらい経ったかと思って目覚めた。周囲に変化はない。魚が泳いでいるくらいだ。

―もう少し、眠ろう。

二千年くらい経って、また目覚めた。二千年前と変化はない。退屈。いつか、自分に変化が訪れることを期待して目をつむる。

―さあ、眠ろう。

今度は四千年くらい眠った気がした。

海底の形は八千年前と比較して、だいぶ変化した気がする。



　けれど、やはり何にもないことに変わりはない。

　──今度は、誰かが起こしてくれるまで眠ろうか。

　決意した。

　目をつむった。

　眠る、ひたすらに眠り続ける。起きては罪を背負う、起きて動いては更なる罪を背負う。

　だから、少年に許されたのはひたすら眠り続けることだった。

　地上で戦争が起きたときも、国が興おこされたときも、誰かが死んで生まれてからも眠り続けた。

　いつか、きっと。

　いつか、きっと──誰かが起こしてくれる。

　そう願った。

　願って、眠り続けた。

　──起きて。

──────気の遠くなるほどの長い年月

何処いずこともつかぬ場所

「ん……？」

　ある日、願いは叶った。目を開けると、そこには未知の世界が広がっていた。

　呆ぼう然ぜん自失としたまま、周囲を見回す。

　少年の姿で踏んでいる土は、あの不毛で素そっ気け無いものではない。植物が育はぐくまれ、色とりどりの花が咲いていた。

「あ……あ、ああ……」

　とても大きな、樹木があった。草原を駆け回る兎うさぎや犬や猫や馬がいた。

「……」

樹木が作った影の下で涼んでいる少女がいる。

少女は、少年を見て微笑ほほえんでいる。

「――久しぶり。よく眠れた？」

「――うん、眠れた。久しぶり」

少年は満面の笑みを浮かべる少女を見た。

―君の笑顔を見るために、二万年くらい眠って待っていたんだ。

恥ずかしくて、自慢っぽくも感じられて、そう言い出せなかった。言う必要もないように思われた。

駆け寄る少女が手を差し出してくる、少年は迷わず手を繋つなぐ。

「ね、空を見て」

「うん……」

少女に言われて、少年は宙を見上げた。

目に痛いほどの鮮やかな青い空はどこまでも続かんばかりに高く、綿わたのように千切れた白い雲は何とも微笑ほほえましかった。

素晴らしい世界だった。

二人がいるこの世界は、どんな宝石よりも美しかった。少年は何か賞賛の言葉を二、三考えてみたがすぐに全て放ほう棄きした。どれもこれも、この美しさの前ではどうしようもなく陳ちん腐ぷなものに思えたからだ。

「ああ――――」

「きれいでしょう？」

少女の得意げな言葉。

頷きつつ、少年はただ静かに泣くことにした。それが自分に出来る精一杯の賞賛だからと思ったのだ。

「とても、きれいだ」

かつて人ではなかった少年ギリィは、今、人として静かに泣いていた。少女ジニーは、彼の手をしっかりと握り締め、優しく微笑みながら彼が泣き止むのを待っている。

かくして、少年と少女の物語は始まったのだ。

ありふれた二人の、ありふれた物語が。

あとがき

東出祐一郎

　一方が堅実かつ安定感のあるプロットであり、もう一方がはちゃめちゃなプロットであった場合、あなたはどちらを選ぶでしょうか？

　はちゃめちゃという言葉だけでは足りないかもしれない、己の妄想と書いてドリームと呼ぶようなものが山盛り詰まっているプロットということです。具体的に言うと、体長30メートルの巨きよ大だい鮫さめ（愛称〝メグ〟ちゃん）とか。

　普通は堅実なプロットを選ぶ。まして、これはＰＣゲーム『Bullet Butlers』のノベライズです。何だかんだ言って、ゲームのアフターストーリー的なものが好まれるはずだ──と、私は思っていました。

　ところがどっこいガガガ文庫の編集者さんが選んだのは後者であった。こっちの方が面白そうだから、という至し極ごく明めい快かいな理由からです。

　なるほど。これが面白い、ガガガ文庫の小説として通用するというのであれば私としてはもう何も言いません。ただひたすらに書くだけでございます。

　……という訳で書いた。約一か月ひたすら書いて書いて書き捲まくりました。

　そして、何とか指定されてたギリギリのページ数になったんじゃないか？　と思いつつ送ると、私は挿さし絵えや人物紹介用に取っておくべきページなどといった大切なものをすっかり頭の外に追いやったまま書いていたため、既にかなりはみ出していた模様。

　二か月間お待ちになった皆様、申し訳ありません。この馬鹿な男が原因でございます。

　さて、上下巻にされることが決定されたため、逆に少なくなったページを補ほ塡てんするためにまた書いて書いて書き捲くりました。

「受け入れてくれるだろうか」なんていう不安は最初だけで、後はひたすら書くだけの日々でした。けれど、こうして書き終わると時折、不安が蘇よみがえってきます。

　果たしてこれは面白いんだろうか、とか。果たして自分はとんでもないミスをやらかしてないだろうか、とか。

　そんな事を思いつくまま書き連ねれば、たぶんこのあとがきが立派に埋まるんじゃなかろうか、というくらいには不安になりました。

　ゲームのシナリオを書くときもそうですが、自分の書いたものがとんでもない傑けつ作さくに見えるときもあれば、どうしようもない駄作に思えるときもあるのです。作品は同じ、一字一句違うはずもないのに、その日その時その瞬間で評価が変わってしまうのは本当に不思議ですね。

　ただ、後悔はしていません。読者にとっては手に取った本──つまり結果が全てだが、作者にとっては結果も過程も含めた全てが大切です。

　私は後悔していません。でも、できれば読者の皆様がこの物語を面白いと思ってくれた方がやっぱり良い。

　という訳で皆様、『Bullet　Butlers』ノベライズはいかがだったでしょうか？

（面白いと思ってくれますように！）

　さて、ここからはちょっと作品内容についての解説。ＰＣゲーム版『Bullet　Butlers』はノベライズ本編の始めと終わりに少し出たリック・アロースミスという執事が主人公のアドベンチャーゲームであり、ノベライズ本編よりも少し前の物語となっております。

　セルマ・フォルテンマイヤーがいかにして世界を動かす大英雄〝末裔たる者ミスティツク・ワン〟に選ばれたのかが語られておりますので、気になる十八歳以上の貴方あなたは是非手に取ってみてください（ノベライズ上巻にほんの少しだけ登場した女執事や、コゼット・レングランスも沢山登場します）。

　ゴルトロックについて。ゴルトロックとは、いわゆる〝世界〟の名前です。主に人が住む大地のことを指します。神であるエル・アギアスが住み、死んだ者の魂が昇る先の天国をブレシグランドと呼び、逆に不死の王が封印され、邪悪な魂が運ばれる地獄がダロマググルと呼ばれるところになります。

　文明的には一九三〇年代末から一九四〇年代初頭──というところですがゴルトロックに存在する奇跡、即ち魔法のために我々の住む世界以上に発展を遂げた部分もあれば、大きく立ち遅れている一面も存在します。

　ノベライズ版に出てきた潜水艦──〝イエスラス〟は魔法により発展を遂げた技術の典型でしょうか。現実の潜水艦は深度１０００メート

ルも潜れません、残念なことです。

モンスターは絶滅こそ免まぬがれたものの、四方八方あちこちに勢力圏を広げた人類（この場合の人類は知的生物であり、喋ることが可能な存在全般のことを指します）によって保護されるまでに落ちぶれています。

ですが、安あん穏のんとした世の中という訳でもありません。〝不死の王ノーライフキング〟の復活を企むテロ組織、聖せい導どう評ひよう議ぎ会かいが存在するからです。

『Bullet　Butlers』の物語はノベライズ、ＰＣ版共にこの聖導評議会と〝末裔たる者ミステイツク・ワン〟との死闘をバックボーンとして描かれていきます。

そしてもう一つ、忘れてはならないのが〝執事バトラー〟の存在です。名前こそ同じものの、彼らの職業目的は現実こちらと大きく異なるものになっているのは、既に小説を読んだ方にもお分かりでしょう。

彼らは主を敬愛し、主を護ることが第一の仕事です。平たく言ってしまえばボディガードのようなものですが、それよりはずっと主と密着した仕事となっています。

そのために存在するのが〝名も無き守護者ネイムレス〟という執事支援組織であり、彼らが創設したのが、若き執事見習いを養成する〝白手の学院フオレン・ソール〟と呼ばれる学校です。

ノベライズでも言及されていた通り、アーネストはここで執事たるための戦闘技術や礼れい儀ぎ作さ法ほうを学び、主を護る仕事へと就いた訳ですね。

ただし、アーネストのように年がら年中冒険に付き合わされる羽目になる執事……というのは、さすがに滅多にいないと思われますが。

作品についての解説は以上です。最初にあとがきを読んでから本編を読まれる方も、あるいは読み終わってここを読んでいる方にも多少の参考になれば幸いです。

最後に、素晴らしいイラストを描いてくださった中央東口さん（冗談抜きで〝ガーゴイル〟を見たときは「勝った！　第三部完！」と思いましたよ、三部って何さ）、この作品に「ＧＯ」を出して下さったガガガ文庫編集のＭさん、お二人には大変お世話になりました。

他にもお礼を言わなくてはならない人間は尽きませんが、名前をず

らずらと並び立てるのもどうかと思うので改めて──本当にありがとうございました、私が今、こうしてここにあるのは皆様のおかげです。

　正直に申し上げますと、次の作品に関しては出る出ないも含めてあらゆるものが未定ですが、またお会いできる日を楽しみにしています。それでは。

東出祐一郎

Yuichirou Higashide

２００５年「あやかしびと」でソロデビュー。

本作は２００７年７月に発売された「Ｂｕｌｌｅｔ　Ｂｕｔｌｅｒｓ」のノベライズ。

今度こそ詳細なプロフィールをと思ったが三十分で挫折。平凡人生万歳。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

Bullet Butlers

～黒騎士は弾丸のごとく駆け抜ける～２

２０１５年10月９日　電子書籍版発行

者　東出祐一郎

作　propeller

行人　立川義剛

集人　野村敦司

集　望月充

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００８年１月23日　初版第１刷発行

©Will/propeller 2015　ISBN978-4-09-451050-8